

津島九反坪遺跡

福岡県筑後市大字津島所在遺跡の埋蔵文化財調査

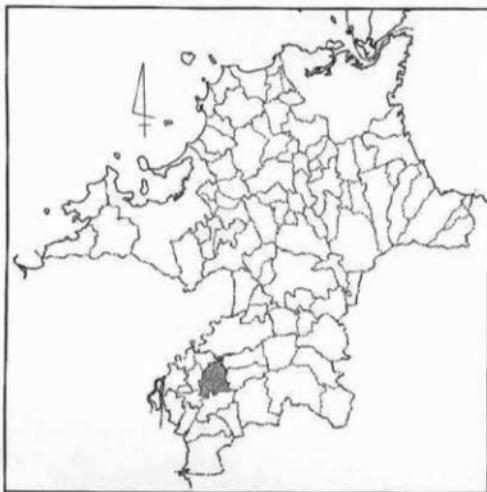
筑後市文化財報告書
第42集

2002

筑後市教育委員会

津島九反坪遺跡

福岡県筑後市大字津島所在遺跡の埋蔵文化財調査



2002

筑後市教育委員会

序

筑紫平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稻耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する津島丸反坪遺跡は筑後市の南部に位置し、弥生時代を中心とした遺跡であることが確認されました。特に弥生時代の溜井の確認は報道機関が伝えたように、弥生時代の低平地での農業用水の確保を考える上で、貴重な資料を提示しております。また、発掘調査から報告書作成に至るまで、福岡八女農業協同組合をはじめとする各関係機関、工事関係者、有職者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成14年3月

筑後市教育委員会

教育長　牟田口　和良

例 言

1. 本書は、它地造真に作い、船岡ハ女陰茎蟲問組合の依頼を受けて、室後市教育委員会が平成12年夏に大字津島において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は水見秀徳・上村英七・栗田剛・立石真二・高田知恵・奥村太郎が製作し、浄書は立石・平塚あけみ、横井照惠がこれを行なった。
3. 本書使用の遺物実測図は上村・立石・平塚が製作し、浄書は平塚・横井がこれを行なった。
4. 本書使用の写真是水見・上村・栗田・立石が主に撮影した。なお遺跡の気球写真是仰空中写真企画に依頼した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位G, N, Tである。
6. 本書におけるグリッドはX=19656, Y=-47136を起点 (AA) とし、3m隔に北へ2, 3, 4,…、西へAB, AC, AD…と設定した。従ってDK51はX=19869, Y=-47000にあたりる。
7. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。
8. 本書に掲載した遺物の縮尺は土製品・陶磁器・木製品は1/4、石製品は1/2を基本とする。
9. 本書の執筆は第3章第1節を上村、第4章1を水見、その他を立石が担当した。編集は立石が行なった。
10. 出土した木製品の一部については株式会社吉田生物研究所に保存処理を依頼した。
11. 本書に附わる図面・写真・遺物などの資料は室後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目 次

第1章	調査概況と組織	1
第2章	位置と環境	5
第3章	調査成果	7
第4章	討議	119
付	出土遺物一覧表	121

第1章 調査経過と組織

1 調査に至る経過

津島九反坪遺跡は福岡県筑後市大字津島に所在する。遺跡名称は対象地区の大半を占める字九反坪の地名を取り、津島九反坪遺跡とした。ここは近年「県営狙い手育成基盤整備事業西部第2地区」として圃場整備が進められており、遺跡所在地は住宅用地として計画がされていた。この住宅用地はJR船小屋駅の西南側に位置し、山門郡瀬高町大字本郷にまたがる広大なもので、筑後市側の対象面積は約38,532m²である。

平成10年2月13日、福岡県筑後川水系農地開発事務所（以下「甲」とする）より筑後市教育委員会社会教育課社会教育係（以下「乙」とする）に対し、該当地に対する埋蔵文化財に関する申請がなされた。
平成10年3月～4月、「乙」は申請地に対し、試掘調査を行なった。
平成10年6月、「乙」は引き続き試掘調査を行ない、弥生土器等が採集された。
平成10年11月20日、「甲」より「乙」に対し、該当地に対する埋蔵文化財に関する申請がなされた。

試掘調査の結果、「乙」は対象地全域において遺構の存在を確認し、この旨を返答した。遺構は北側で地表より80～90cm、南側で160～170cmの深さであった。

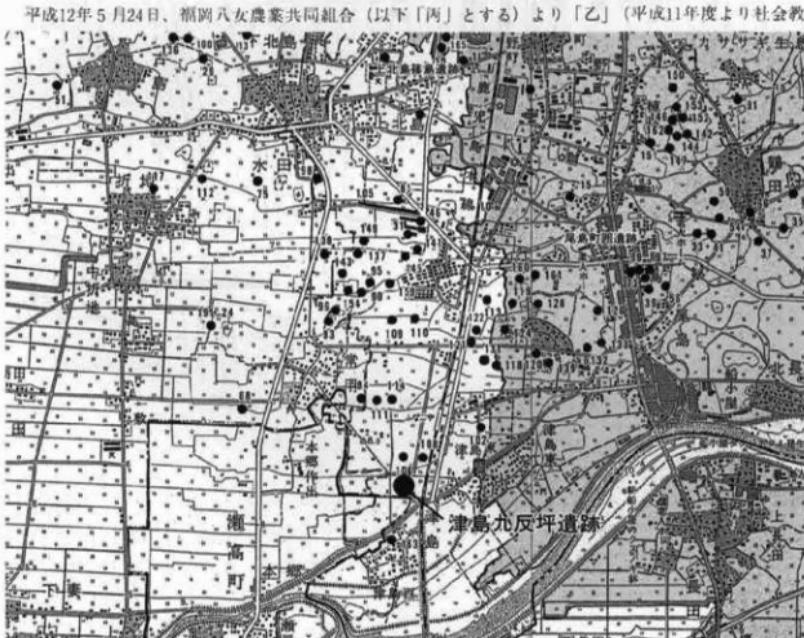


Fig.1 津島九反坪遺跡位置図 (S = 1/25,000)

（遺跡番号は筑後市文化財調査報告書第34集を参照）

青様より文化様に改称)に対し、該地の埋蔵文化財に関する申請がなされた。また、調査に至る協議の間に南側の漁港町部分では機構は確認されていないことを工事主体である「寺」より聞いている。「乙」では先の試掘結果を「丙」に対し同年6月20日で伝え、発掘調査が必要である旨を伝えた。その後両者は協議を行ない、開発地区には全面に盛り土を行なうものの、道路部分は恒久的開設物のため発掘調査が必要であるとの結論に達し、この部分の発掘調査を行なうこととなった。調査期間は平成12年4月17日から同12月28日までである。

2 調査組織

津島丸反呼遺跡に関する調査組織は以下の通りである。なお、文化関連業務は機構改革に伴い平成11年度より社会教育係から文化係が主管している。



Fig. 2 平成9年度試掘調査区位置図 (S = 1/2,500)

Fig. 3 試掘調査出土遺物 (平成12年6月出土・S = 1/3)

調査主体

教育長

森田 基之（～平成11年3月）

牟田口和良（平成11年4月～）

津留 勉義（～平成11年3月）

下川 雅晴（平成11年4月～）

山口 雄郎（～平成11年3月）

庄村 国義（平成11年4月～平成13年4月）

松永豊四郎（平成13年4月～）

田中 清通（～平成11年3月）

田中 優一（平成11年4月～平成12年3月）

成井 平和（平成12年4月～）

永見 秀徳

小林 勇作

立石 真二

高田 知恵

池末 由子

江崎トシ子

角 黒子

柳 ちゑ子

馬場千鶴子

深町ミコ子

森山美津子

石橋香代美

小野カトリ

瀬戸八重子

鷲 芳輝

栗 米子

深町美智子

矢木 和枝

非上むつ子

加藤 礼子

田島ヤス子

富安 英子

平井 正芳

村上 幸子

村上美津子

渡辺 浩将

菅原 泰子

江崎 末廣

城崎マスヨ

田中ミドリ

馬場 司

中富 威士

平井 良治

平尾 七子

本村 修一

鏡邊 泰子

江崎志保子

高橋 伸也

高橋 伸也

高橋 伸也

高橋 伸也

Fig. 4 楠島九反坪遺跡 調査範囲位置図 ($S = 1/2,500$)



調査作業協力
奥村 太郎
整理補助員
仲 文恵
整理作業
平塚あけみ
尾巻 恵子
橋川 知香
尾巻 恵子
野口 郁子
野口 郁子
鶴川 學美

奥村 太郎
平塚あけみ
尾巻 恵子
橋川 知香
佐々木寿代

3 調査経過

津島丸反坪遺跡において気候市教委員会では対象地区を東と西に2分し、調査を行なった。東区の調査は上村英士・柴田剛、西区は永見秀典、立石真二がそれぞれ担当し、東区から調査を行なった。なお、調査後は協議の結果、業者側で認め辰ため、調査区を開けたまま引き継ぐこととなつた。

東区は平成12年4月17日より直轄による作業を開始し、作業員による調査は6月2日から本格的に始

められた。東区の調査期間は施設の時期と重なり、行き場のない工区内の雨水が調査区へ流れ込んだた

め、排水と流入土の除去に多大な時間を割かれてしまった。

西区での作業は東区の調査終了を受けて本格的に開始された。西区は当初包含層と考えていた部分が西区である可能性があり、さらに掘立柱建物との切り合いが確認されたため改めて確認され、西区は多くな時間を使ってしまった。また、西区中央部の地山は軟質な青灰色粘土であり、遺構の検出・掘り下げ・記録にも苦労する有り様であった。さらにこの青灰色粘土の下層は湧水砂疊層であり、調査区の深い部分では周辺の土の重みにより粘土層が浮き上がり調査が不可能な部分も発生した。開発部当地の西端も本来は調査の予定であったが、予定区間に平行に位置する農道を地滑りにより破壊するおそれもあったため、この部分の調査は行なわないこととなった。泥井に関しては調査の結果、国内最古例に属する可能性があるので、10月中旬にこの旨を各報道機関に発表した。調査は12月27日に終了し、平成13年1月10日、開発業者立ち会いのもと現場引き渡しを行なった。これにより、発掘調査の全工程を終了した。

なお、調査および報告書作成には、鶴岡八女農業共同組合、二箇所ヶ谷生小学校園児園より多くの御協力を頂いた。また、下記の方々、各機関からは調査・整理工業に際して貴重な御教示・御指導を賜った。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

木野 正好、西山 勉一（奈良大学）、佐田 茂（佐賀大学）、本田 光子（獨協大学）、鷲口 達也、佐々木謙彦、小田 和利（福岡県教育厅）、西 優太（熊本県教育委員会）、吉留 秀敏（福岡市教育委員会）、片桐 宏二、松見 栄二（小郡市教育委員会）、白木 守（久留米市教育委員会）、大冢 映治（八女市教育委員会）、山田 元樹（大牟田市教育委員会）、石井美美子（依田町教育委員会）、榎本 瞳子（三潴町教育委員会）、東 危雄（山川町教育委員会）、清田 純一（城南町教育委員会）、小谷桂太郎（西原村教育委員会）、秋川 真一（元興寺文化財研究所）、守山市埋蔵文化財センター、吉田生物研究所



発掘体験の様子

第2章 位置と環境

1 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地盤は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

津島九反坪遺跡は筑後市の南部、大字津島に所在する。地勢的には矢部川北岸の後背溝地付近に立地し、東側から南側にかけて矢部川支流の松永川が西流する。

2 歴史的環境

筑後市大字津島では以前は埋蔵文化財は確認されていなかったが、近年の県営狙い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区の実施に伴い遺跡が発見され、発掘調査が行なわれている。北から津島南佈生遺跡、津島南篠原遺跡、津島北石伏遺跡、津島皿ヶヶ類遺跡があり、これらは主に弥生時代後期から古墳時代初期にかけての遺跡である。隣接する山門郡瀬高町大字本郷でも、弥生時代後期から古墳時代中期の遺跡が確認されている。

律令体制の下では下妻郡に属し、中世には水田荘となる。遺跡の南側には津島西集落がある。旧名を今寺村といい、ここにある光明寺の境内には、鎌倉時代に作られた石造九重塔（県指定文化財）がある。

近世には遺跡の南側を蘿摩街道（坊津街道）が走る。尾島町から久郎原村（津島東）を通り、今寺村へと向かっており、柳川藩との境界に位置する今寺には番所が置かれていた。

【参考文献】

田中 勝信	『木村地区遺跡』	瀬高町教育委員会	1997
近本 寛機	『山ノ井側道をゆく』（筑後市編）	筑後市中央公民館	1997
田中 基樹	『瀬高地区遺跡群目録』	瀬高町教育委員会	1998
筑後市史編さん委員会・編	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1998
立石 貞江	『筑後西部第2地区遺跡群（上）』	筑後市教育委員会	1999
木見 齊衛	『筑後西部第2地区遺跡群（下）』	筑後市教育委員会	2000

第3章 調査成果

第1節 津島九反坪 東側調査

はじめに
調査は調査区全域を東西で二分し東側調査、西側調査として発掘調査を行った。東側調査区は上村英士、柴田剛が行つた。報告はFig. 6のとおりトレンチ状の調査区の中で、遺構が確認された部分をA区からH区に区切り報告する。区別から漏れていいる箇所と、北側のトレンチについては明確な遺構は確認されていない。

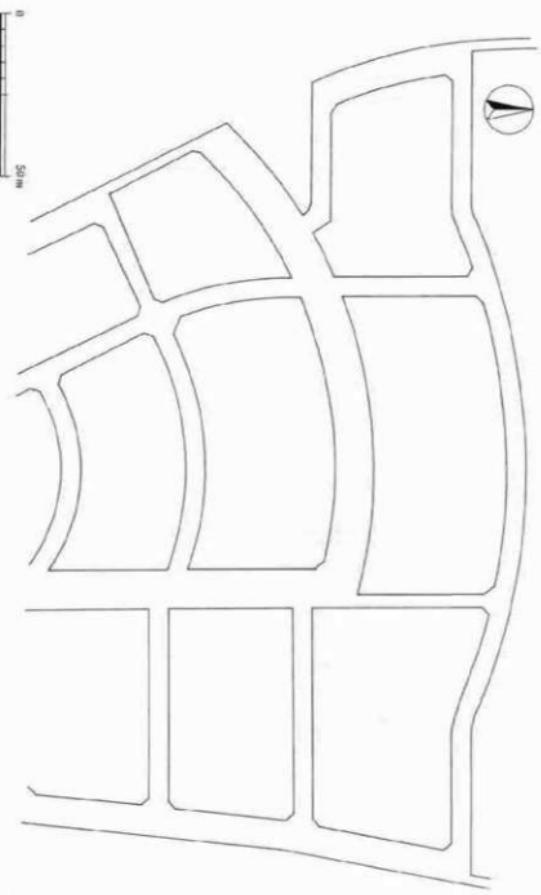
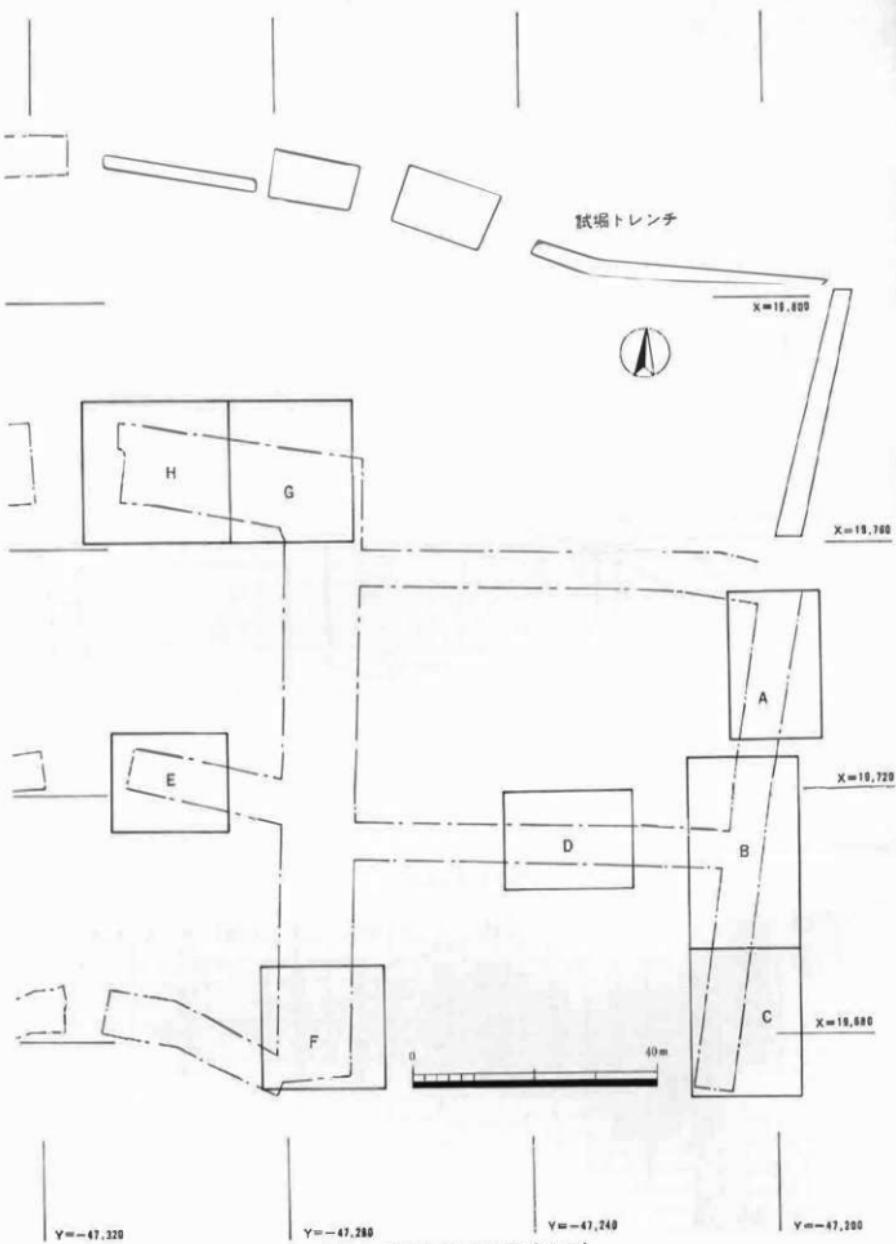


Fig. 5 調査区設定全域図 (1/1,500)

号	地名(区)	S-番号	遺構番号	号	遺構番号
C		16			
E		17	SK017		
E		18	SK018		
E		19			
-		20			
		21			
		22			
		23			
		24			
		25	SK025		
		26			
		27			
		28			
		29			
		30			
		SK039		F	SK045
				H	

Tab. 1 遺構番号合帳



(1) 東側調査 A区

A区は本調査対象地の東端に南北に設定される。調査前は1m以上の盛り土がされており、遺構面は約1m50cmから2m程下げた所で検出された。遺構面の標高は約7m程度で、北に向かって下がっており、北端で落ち込みが始まる。地山は淡茶褐色土である。

検出遺構

溝

SD020 (Fig.8, PL.1)

北側で検出された溝で、傾斜がほぼ東西を測る。検出東西長約6.2m、幅約0.45m、深さ約0.14mを測る。断面は緩やかな逆台形状を呈しており、遺物は弥生時代と考えられる壺型土器片を出土している。

出土遺物

SD020 (Fig.9)

壺型土器(1) 頂部から胴部にかけての破片で、頸部外側に斜方向のハケ目、内面は横方向のハケ目、胴部外側は縱方向のハケ目、内面は斜方向のハケ目が入る。胎土には小砂粒を含み焼成はやや不良で、内外面ともに淡黄白色を呈する。

SD020

7.3m



Fig.8 SD020断面図 (1/40)

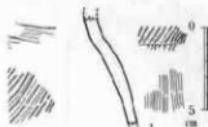


Fig.9 SD002出土遺物 (1/1)

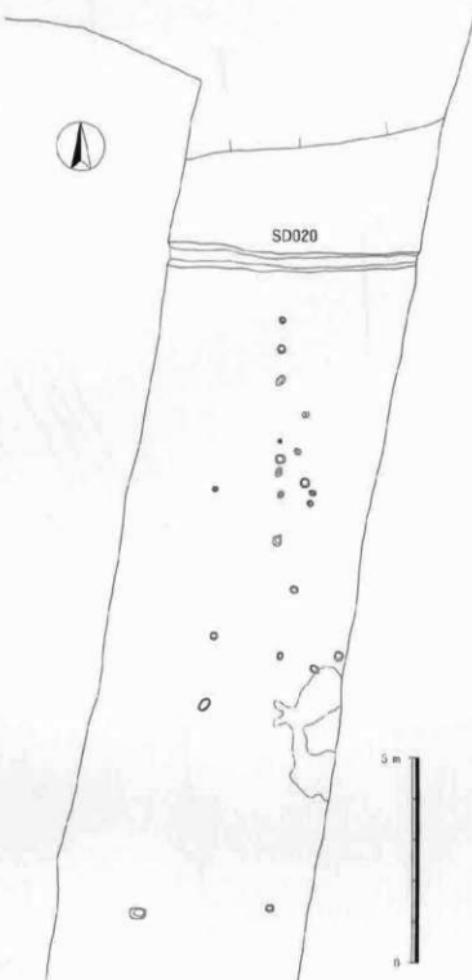


Fig.7 東側調査 A区遺構実側図 (1/120)

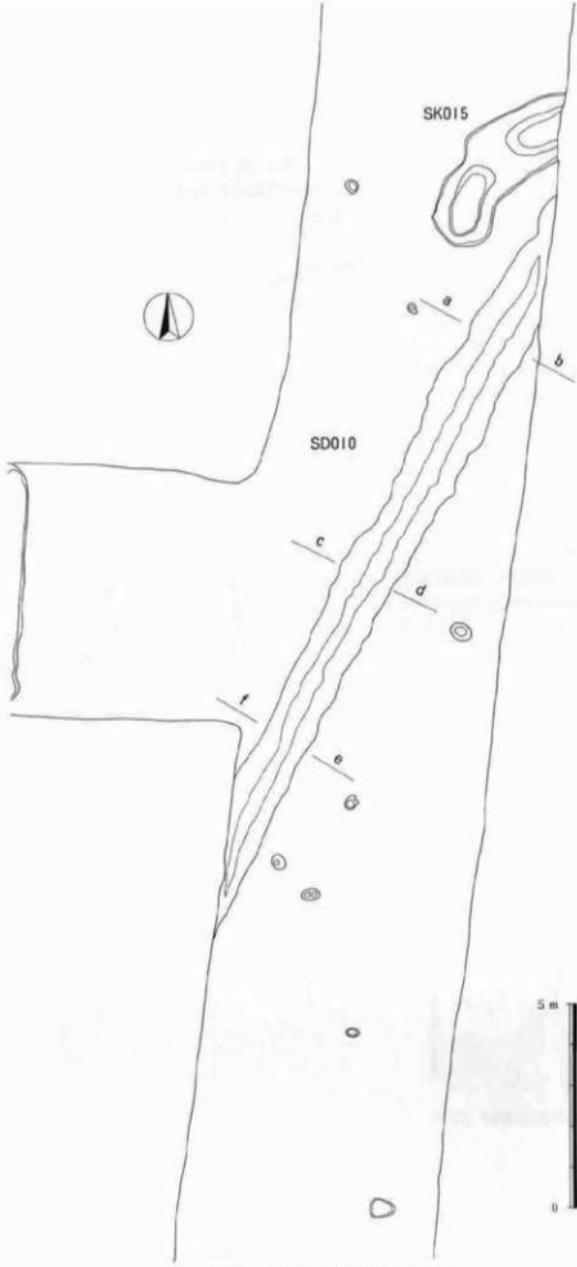


Fig.10 東側調査 B 区造構実測図 (1/120)

(2) 東側調査区

B区はA区の東に最も調査区である。基本土層はA区と同様で標高約7m程度である。遺構は溝、ヒット、不明遺構を検出している。

検出遺構

溝

SD010 (Fig.11, PL.2)

調査区を北東から南西に横切る溝で検出長約16.5m、幅約1.4m、深さ約0.8mを測る。溝断面は逆台形を呈している。遺物は、始・終・時代のものと考えられる土器片と黒縁瓦片を出土しているが、細片のため図示していない。

土壌

SK015 (Fig.11, PL.2)

SK010の南側で検出した不明土層で慣習的な可能性もある。検出長約4.15m、幅約1.7m、最大深さ約0.32mを測る。出土遺物は皆無であった。

SD010

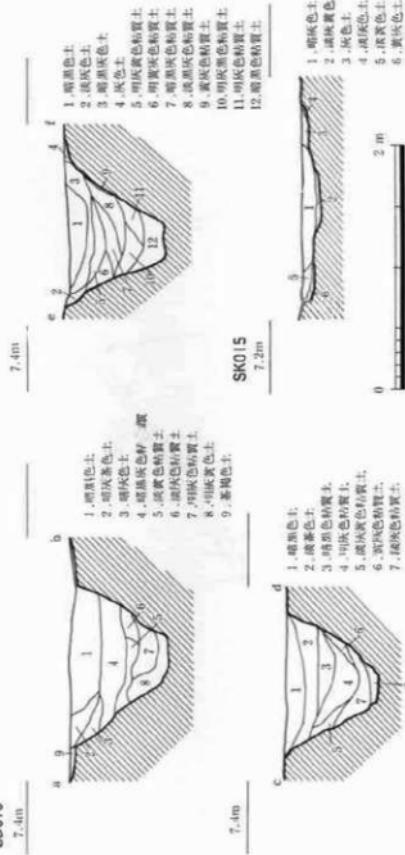


Fig.11 SD010, SK015土層観察図 (1/40)

(3) 東側調査C区

C区はB区の南側に位置する。調査区南端は諫高町との市境になる。基本土層はA・B区と同じで標高は約7m程度である。遺構は ヒット、土塹、溝を検出している。

検出遺構

溝

SD001 (Fig.13)

調査区を北西から南東に走る溝で、検出長約6.75m、幅約0.3m、深さ約0.07mを測る。この溝の延長上に東側調査D区で同様の溝を確認している。溝断面は緩やかな船底状を呈する。填土土は淡茶褐色土の單一層である。出土遺物は皆無であった。

土壌

SK005 (Fig.12, PL.2)

SD001南側で検出した土壌で隅丸長方形を呈する。長軸約1.8m、短軸約0.5m、深さ約0.07mを測る。埋土は暗茶色粘質土の單一層である。遺物は土器小片を出土しているが、細片のため図示していない。

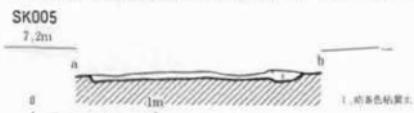


Fig. 12 SK005 土層観察図 (1/40)

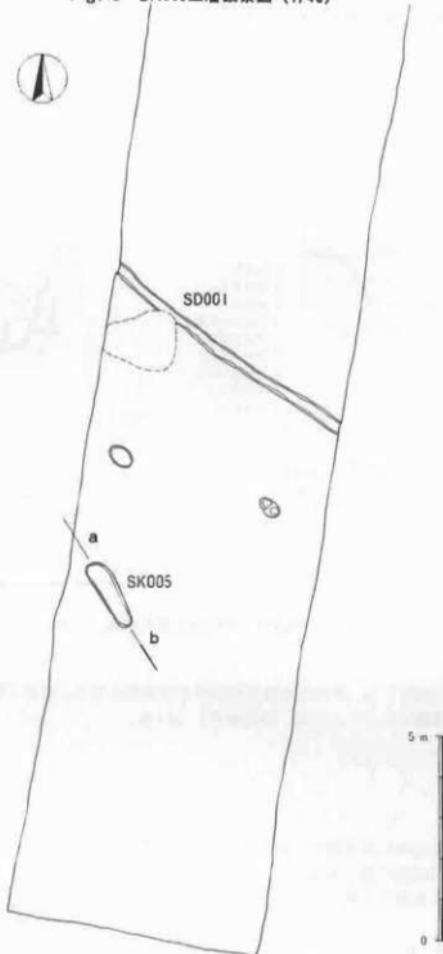


Fig. 13 東側調査 C区遺構実測図 (1/120)

(4) 東側調査D区

D区は東側調査区中央に腰廻し、現況は田地であった。遺構面まで約0.3mから0.5m程度であった。遺構面の標高は約6.8mから7m程度である。調査区からはC区で検出された溝の延長部分とピットを検出したが遺物の出土は皆無であった。地山は淡茶褐色土で粘質土ではない。

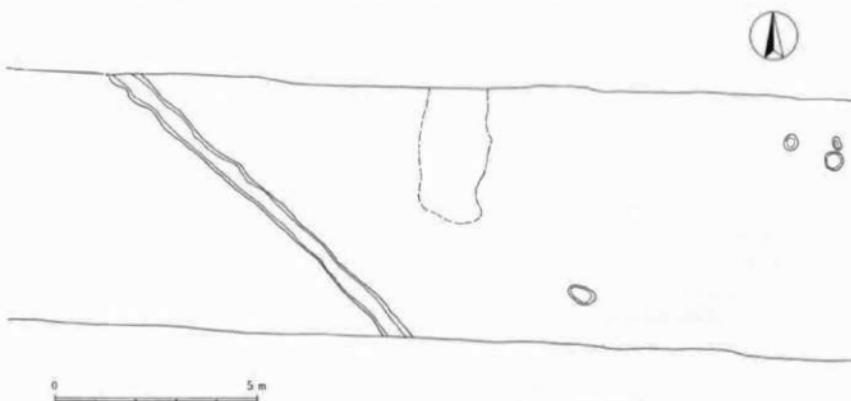


Fig. 14 東側調査D区遺構変側図 (1/120)

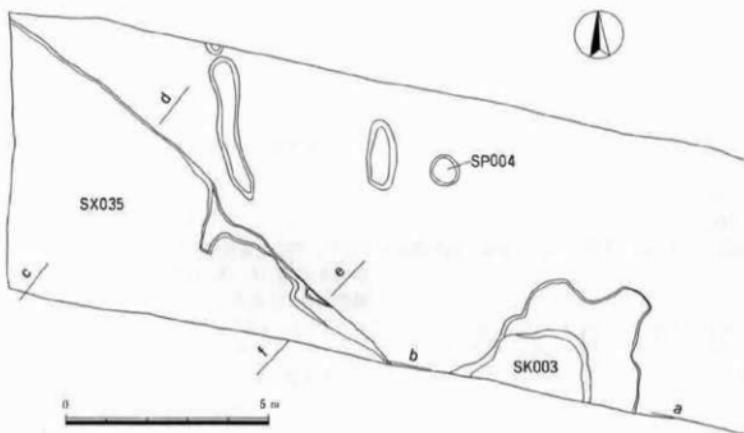


Fig. 15 東側調査E区遺構変側図 (1/120)

(5) 東側調査E区

E区は東側調査区中央西端に展開し、現況は田地であった。遺構面は約1.0m程度下げた部分で検出した。標高は約6.3m程である。遺構はビット、溝状遺構、不明土壌を検出している。

検出遺構

ビット

SP004 (Fig.15)

真円に近いビットで幅約0.75m、深さ約0.08mを測る。遺物は石包丁片を出土している。

土壌

SK003 (Fig.15・16)

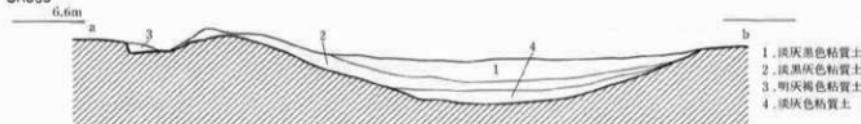
不定形の土壌で、北側にテラスを設け、調査区外へ広がる。テラスの深さ約0.1m、塘底の深さ約0.39mを測る。遺物は弥生土器と考えられる小片を1点出土しているが図示していない。

溝状遺構

SX035 (Fig.16)

調査区西端で検出された遺構である。北西から南東にかけての遺構ラインを検出しており、調査区外へ広がると考えられ、溝になる可能性がある。検出長約12.7m、最大深さ約0.19mを測り、一部にテラスを設ける。遺物は弥生時代と考えられる甕型土器片、高环型土器片、土師器残片、サヌカイト製石鉄を出土している。

SK003



SX035



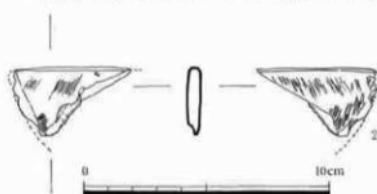
Fig.16 SK003、SX035土層観察図 (1/40)

出土遺物

SP004 (Fig.17)

石製品

石包丁 (2) 破片資料である。刃部が若干残存しており、石材は頁岩製である。



SX035 (Fig.18, PL.15)

甕型土器 (3) 底部小片である。平底で内外面共に淡灰黄色を呈し、1mmから2mm程度の小砂粒を含み、調整は磨耗が著しく不明である。焼成不良。

高环型土器 (4) 口縁小片である。口縁端部をつまみ出し形成する。内面は淡橙褐色、外面は淡灰黑色を呈し、3mm程の小砂粒を含み、調整は磨耗が著しく不明である。焼成不良。

Fig.17 SP004出土遺物 (1/2)

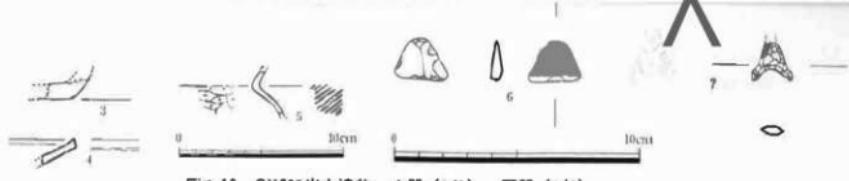


Fig.18 SX035出土遺物 土器 (1/3) 石器 (1/2)

土師器

高坏 (5) 小甕の頸部から胴部にかけての小片である。外面を斜方向のハケ目、内面を横方向のケズリで調整する。1mm以下の小砂粒を含み焼成はやや良好である。

石製品

石鎌 (6・7) 共にサメカイト製の石鎌で6は完形で刀部の加工が貧弱である。7は先端が欠損する。

(6) 東側調査F区

F区は東側調査南西端に展開し、南端は漸高町との市境である。現況は田地で遺構面まで約0.6m程下げた所で検出し、標高は約6.8m程である。遺構はピット、溝を検出している。

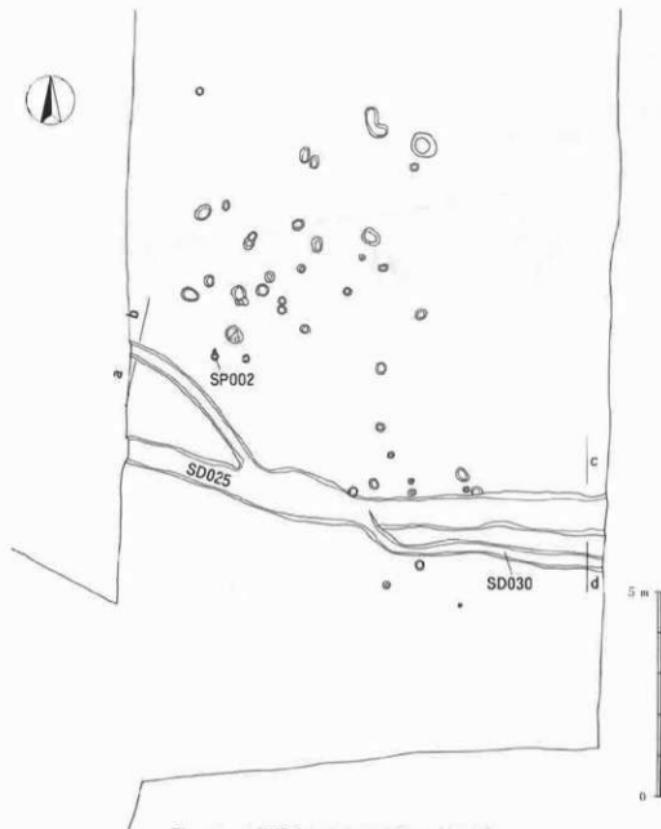


Fig.19 東側調査F区遺構実測図 (1/120)

検出遺構

ピット

SP002 (Fig. 19)

真円に近い小ピットであるが、木の根の痕跡の可能性も考えられる。幅約0.2m、深さ約0.08mを測る。遺物は土師器片を出土しているが、小片のため図示していない。

SD025 (Fig. 19・20)

調査区をほぼ東西に走る溝でSD030と切り合うが、前後関係は不明である。検出長約11.8m、幅約0.9m、深さ約0.1mを測る。埋土は淡黒灰色土である。遺物は土師器片を出土しているが、小片のため図示していない。

溝

SD030 (Fig. 19・20)

SD025の北西から南東に横切る溝でやや蛇行する。検出長約13.15m、幅約0.35m、深さ約0.1mを測る。埋土は暗黒灰色粘質土で、遺物は土師器片を出土、小片のため図示していない。

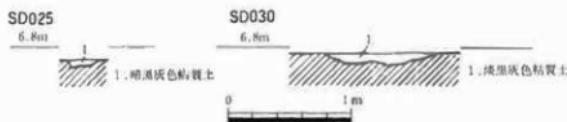


Fig. 20 SD025、030土層観察図 (1/40)

(7) 東側調査G区

東側調査区の北に展開し、現況は田地であった。遺構面は0.3mから0.5m下げたところで検出し、標高

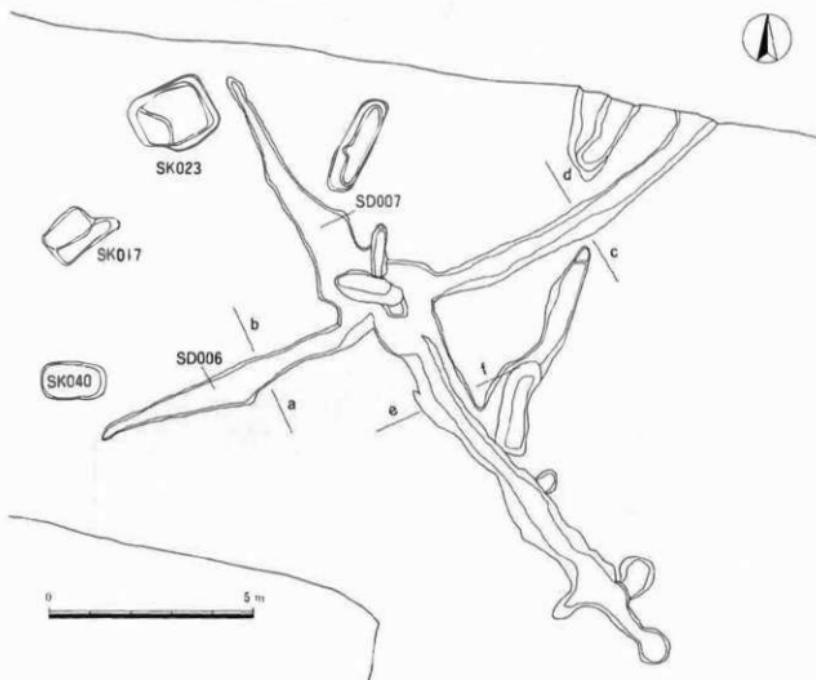


Fig. 21 東側調査G区遺構実測図 (1/120)

は約6.3m程度である。遺構は溝、土壙、風倒木痕を検出している。

検出遺構

溝

SD006 (Fig. 21・22)

調査区の北東から南西に走る溝でSD007を切る。北側は調査区外へ広がると考えられる。検出長約17m、幅約0.6m、深さ約0.1mを測る。遺物は土器片を出土しているが、小片のため図示していない。

SD007 (Fig. 21・22)

SD006に切られる溝で検出長約17.9m、最大幅約1.25m、深さ約0.15mを測る。

土壙

SK017 (Fig. 21・22, PL. 3)

調査区西で検出した土壙で南東側にテラスを設ける。検出長軸約1.65m、短軸約1.02m、深さ約0.62mを測る。遺物は皆無であった。

SK023 (Fig. 21・22)

SK017の北側で検出した土壙で南西側が一段低くなる。検出長軸約2m、幅約1.68m、最大深さ約0.57mを測る。遺物は弥生時代と考えられる甕型土器片を出土している。

SK040 (Fig. 21・23)

SK023の南側で検出した土壙で、検出長軸約1.6m、短軸約0.95m、深さ約0.65mを測る。遺物は皆無であった。

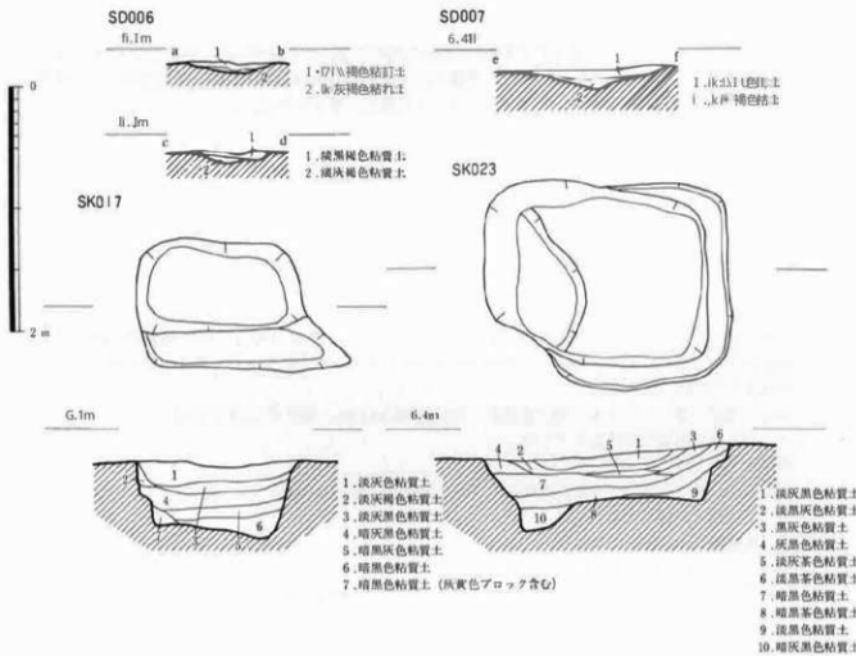


Fig. 22 SD006, 007, SK017, 023 遺構実測図 (1/40)

SK040

出土遺物

SX023 (Fig. 24, PL. 5)



壺型土器 (8) 廃油の破片で断面三角形の姿勢が張り付くが、消耗のため若干剥離している。外面を縦方向のハケ目、内面は消耗が著しく不明。2mm程度の小砂粒を含み、内外面ともに淡黄白色を呈する。

SK023

（8）壺型土器 (8) 廃油の破片で断面三角形の姿勢が張

り付くが、消耗のため若干剥離している。外面を縦方

向のハケ目、内面は消耗が著しく不明。2mm程度の小

砂粒を含み、内外面ともに淡黄白色を呈する。

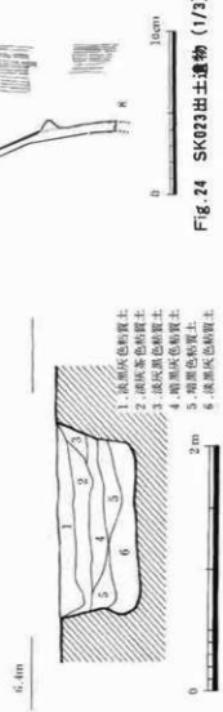


Fig. 23 SK040遺構側面図 (1/40)

（8）東側調査H区

G区の西側長土上に展開する調査区である。標高約6m程でG区から西側に行く程低くなる。検出遺構は土塙、ピット、周溝状遺構である。また、遺構のSX012・016・019については、平面でのプランは見えるが断面で遺構と判断できず、包含層の限り残しの可能性が考えられる。

検出遺構 ピット

SP022 (Fig. 25)

構内に近いピットでチラスも潰け、一段深くなる。検出長軸約0.9m、短軸約0.8m、チラスの深さ約0.17m、最大深さ約0.29mを測る。遺物は土師器片等を出土しているが小片のため図示していない。

土塙

SK011 (Fig. 25・26, PL. 3)

調査区最西端で検出した土塙で検出長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約0.47mを測り、端底は北側が下がる。遺物は弥生時代と考えられる鉢型土器を出土している。

SK018 (Fig. 25・26)

調査区東端で検出した土塙で検出長軸約1.0m、短軸約0.9m、深さ約0.8mを測る。遺物は弥生時代と考えられる鉢型土器片を出土している。

SK021 (Fig. 25・27, PL. 3)

SP002の東側で検出した土塙で両側にチラスを設ける。検出長軸約1.7m、幅約1.55m、深さ約0.43mを測る。遺物は皆無であった。

周溝状遺構

SX045 (Fig. 25・27, PL. 4)

調査区西北端で検出した周溝状遺構である。周溝の約1/2程度は調査区外へ広がると考えられ、円形ではなく長方形に近い形状をとる。溝の幅は最大で0.45m、最小で0.2mを測り、溝底部の一部はチラス状に段が設けられる。深さは最大で0.31m、最小で0.16mを測る。遺物は弥生時代と考えられる車型土器片を出土している。

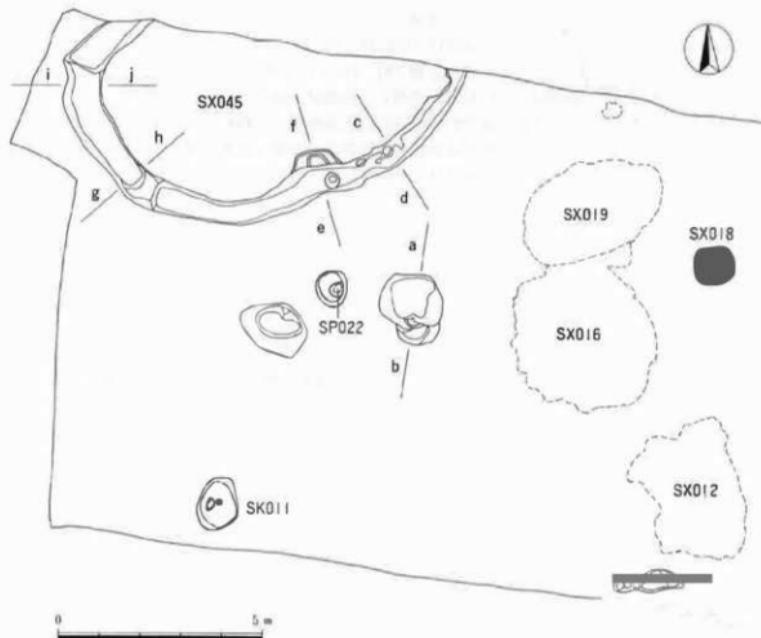


Fig. 25 東側調査 H 区造構実測図 (1/120)

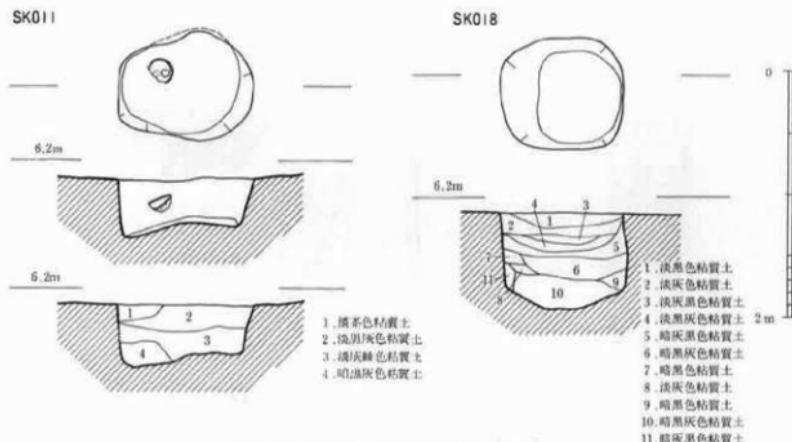


Fig. 26 SK011、018 造構実測図 (1/40)

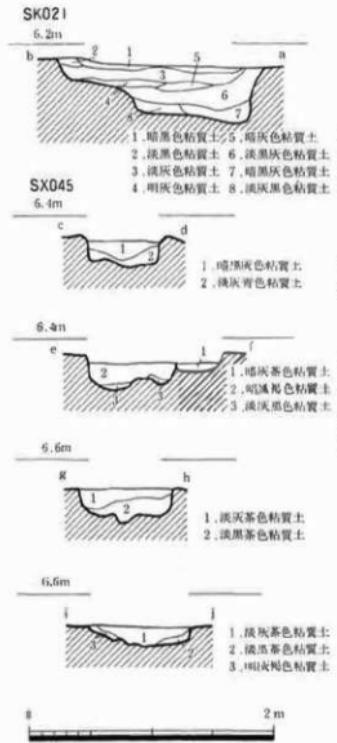


Fig. 27 SK021, SX045 土層観察図 (1/40)

出土遺物

SK011 (Fig. 28, PL. 5)

鉢型土器 (9) 口縁から体部にかけて 1/3 程欠損する破片で、口縁部が内凹し、底部は平底である。口径 21.6cm、器高 12.7cm、底径 8.6cm を測る。1mm 程度の小砂粒を多く含み外表面は淡黄白色、内面は淡褐色を呈し、調整は磨耗が著しく不明。焼成不良。

SK018 (Fig. 29)

壺型土器 (10) 長胴の壺の破片である。器壁が 5mm 程度と薄い。外表面は縱方向のハケ目で調整し、外面に一部黒班が残る。1mm から 2mm 程度の小砂粒を含み、内外面ともに淡黄褐色を呈する。

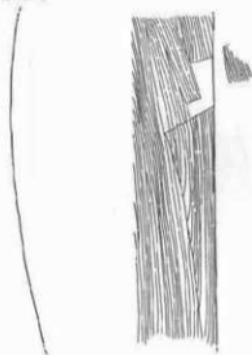
SX045 (Fig. 29, PL. 5)

壺型土器 (11) 削部から底部の破片である。削部が球形で削部中位に断面台形の突帯が付く。底径 5.6cm を測り平底を呈する。削部外面の突帯より上位が斜方向のハケ目、下位が縱方向の工具による強いナデ、内面は斜方向のハケ目で調整する。外面に黒班が残る。



Fig. 28 SK011出土遺物 (1/3)

SK018



SX045

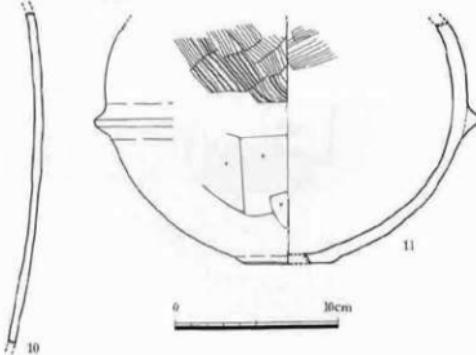


Fig. 29 SK018, SX045出土遺物 (1/3)

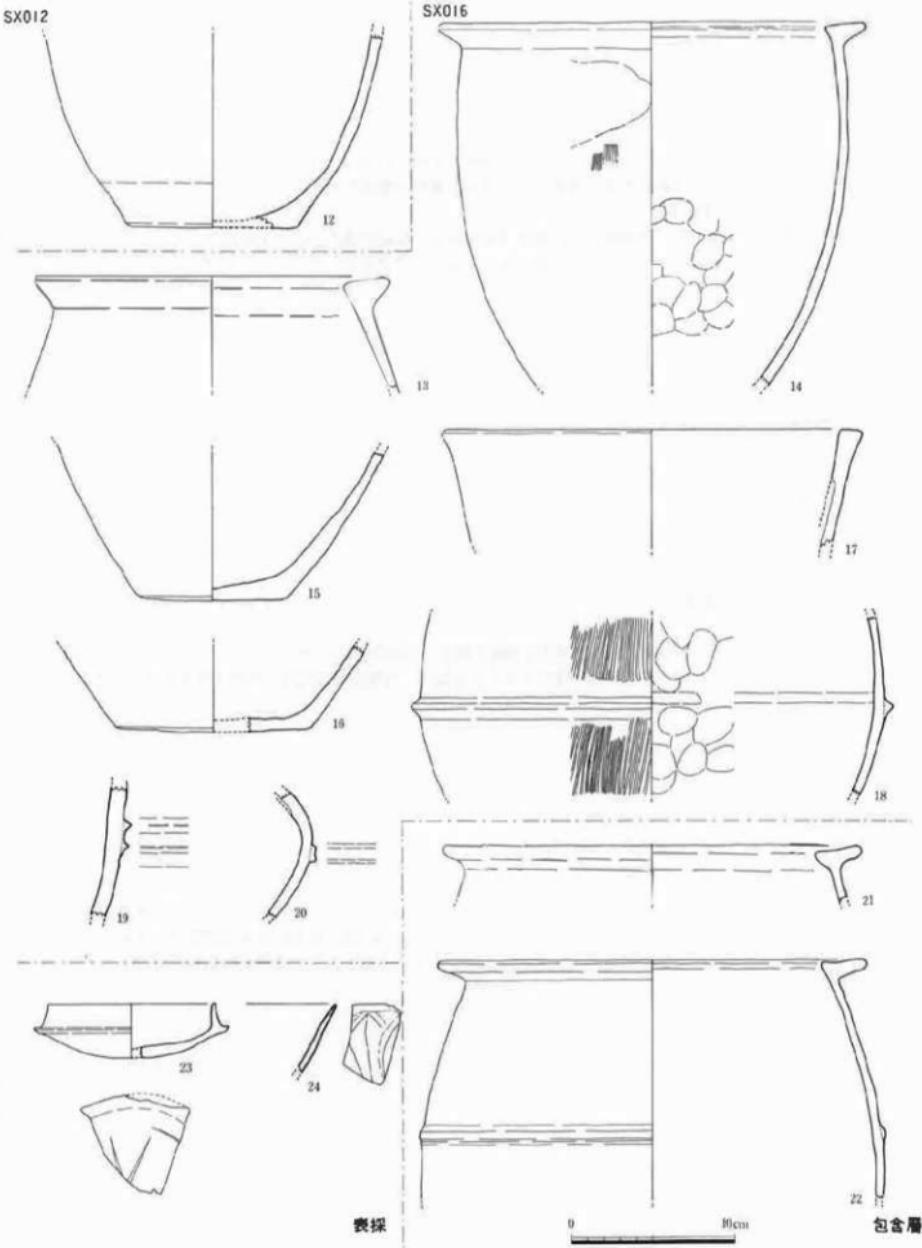


Fig.30 SX012、016、包含層、表採 出土遺物 (1/3)

SX012 (Fig. 30)

壺型土器 (12) 脊部下位から底部にかけての破片である。底径9.8cmを測り、平底である。2mmから3mm程度の小砂粒を含み、内外面ともに淡黄白色を呈し、調整は磨耗が著しく不明。焼成不良。

SX016 (Fig. 30, PL. 5)

壺型土器 (13～16) 13は口縁部片で口径21.7cmを測る。2mm程度の小砂粒を含み内外面ともに淡黄白色を呈し、調整は磨耗が著しいために不明。焼成不良。14は底部が欠損する。口径26.4cmを測り、磨耗のため調整は不明であるが、内面下位に指頭痕が残り、外縁には黒斑が残る。15・16は脣部下半から底部にかけての破片で共に平底で底径は15が9.0cm、16が12.0cmを測る。16は外面にナデを施す。

壺型土器 (17～20) 17は直口縁の兼か鉢の可能性もある。口径25.8cmを測る。調整は内外面とともに磨耗のため不明で淡黄白色を呈する。18は脣部片で最大径部分に断面三角形の突帯が付く。外面を縱方向のハケ目、内面は指頭痕後、ナデを施す。19は脣部下位に突帯が付く破片で外面をナデ、内面は斜方向のナデを施す。焼成良好で外面は暗黒灰色（黒斑）、内面は淡黄褐色を呈する。20は脣部片で最大径やや下位に突帯が付く。磨耗が著しいために調整は不明。焼成不良で内面は淡褐灰色、外面は淡黄褐色を呈する。

包含層 (Fig. 30, PL. 5)

壺型土器 (21・22) 21は口径25.7cmを測る。調整は磨耗のため不明。内外面ともに淡黄白色を呈し、焼成不良。22は口径26.4cmを測り、脣部中位やや上に突帯が付く。調整は不明で内外面ともに淡黄白色を呈する。

表採 (Fig. 30, PL. 5)

須恵器

壺 (23) 口径10.3cm、器高3.35cm、底径2.6cmを測る。底部外面はヘラ削り後、ナデを施しヘラ記号が入る。内面は不定方向のナデ、受け部はヨコナデを施す。外面は淡赤褐色、内面は暗赤紫色を呈する。焼成・還元やや良好である。

青磁

碗 (24) 龍泉窯系青磁碗片で外面に蓮弁を施す。素地はきめ細かく、釉は淡緑白色を呈する。

小結

東側調査区を全体的に概観すると西寄りに弥生時代から古墳時代にかけての遺構が点在する。北側は試掘調査で深い落ち込み（現況から2m以上下がる）を確認しており集落の本体は次節の西側調査部分に展開するものと考えられる。今回の東側調査で明確な遺構として土塙、ピット、周溝状遺構が挙げられ、遺物は弥生時代中期後半から古墳時代初頭までのものを出土している。調査区周辺では多数の遺跡の存在が認められており、今回の調査を含めて津島地区の集落の範囲や時期の変遷が限定できる資料が蓄積している。今後、広範囲での遺跡全体像を提示することが必要であり、成果の公表が待たれる。

第二節 津島九反坪 734-737工区の調査

1. 西側調査 概要

津島九反坪遺跡の西側は、東側調査区の人力による調査が終了したことを受け、8月8日より調査を開始、8月11日には調査作業による発掘作業を開始した。調査区の呼称は便宜上、開発業者が設置した測量点を利用することとし、遺構の密集している735-736工区より始め、南側の調査区へと順次移っていった。北側中央部に当たる737-738工区は器材等の搬入の関係上、最後に調査を行なうこととなった。調査にあたっては、永見秀徳が業務全般を主管し、立石真二・高田知恵がこれを補助する体制で進めることとなった。

2. 734-737工区 概要

734-737工区は、筑後市大字津島字南石伏に所在する。調査区は735-736工区から始め、これを734工区、737工区へ拡張する形で行なった。調査面積は約942m²である。この調査区は表土より0.8~1m (標高6.9m前後) で弥生前期~古墳初頭にかけての遺物包含層に達したが、調査期間の関係上、時間的余裕の出来た時点では遺物を採集することとし、遺構検出面 (標高6.5m前後) まで重機による掘り下げを行なった。調査の結果、弥生時代の掘立柱建物1棟、溜井状遺構2、これに伴う溝1条、古墳時代初期の溝1条、弥生時代の溝1条、時期不明の溝1条、土塙、柱穴多数を確認した。調査は8月11日から始めてられたが、本製品の取り上げなどに時間を取られ、12月27日にこれを終了した。

3. 掘出遺構

掘立柱建物

735-737工区では多くの柱穴が検出され、これらの多くから柱根、礎板が出土した。しかしながら、736-737工区では狭小な調査区に対し、溜井状遺構、古墳時代の溝状遺構などと切りあっており、検出時点では明確には確認できない状況であった。

SB350 (Fig.33, PL.6)

DD50~DF52グリットにかけて確認された、1×2間の建物で、SX150を切り、SD130に切られている。柱間の幅は、P206~P208間で3.0m、P206~P140d間で約1.9m、P140d~P140a間で約2.4m。主軸の傾きはN-5°-Wを測る。柱穴は確認できたものは隅丸長方形のプランを有し、深さは標高約5.3~5.6mを測る。北側の土壤が浅く南側に向かって徐々に深くなるが、いずれも砂層や砂礫層まで掘り込まれている。柱の基礎部分はそれぞれ断面カマボコ状の礎板を有し、中央には柱根の底面と組み合わせるために切り込みが施されている。P214、P218以外のものには柱根を確認したが、良好な状態の物はP140dの1点のみである。P140dの柱根の底部は礎板と組み合わせるために「八」の字状に加工され、多角形状に面取りされていた痕跡が伺える。また、P214の礎板の下にはさらに4本の礎板が敷かれており、P214・P218の底面には植物遺体が確認された。これらはP140aとともに防水砂礫層の上に設置されており、地盤沈下や出水による礎板のズレなどに対応した施設と考えられる。この遺構は近隣の類例や遺構の切り合いなどから弥生時代後期に属するものと考えられる。

溝状遺構

この調査区からは古墳時代1、弥生時代2、時期不明のもの2、4条の溝を確認した。この内、SD105は溜井状遺構に伴う施設なので後述し、ここではその他のものについて記述する。

SD130 (Fig.32・34, PL.7)

試掘部分も含め、DA52~DK52グリットで検出された、東西方向に走る溝である。西側は調査区外へ走るが、東側は737-738工区のSD275となると仮定される。検出長約18m、幅約1.8m。断面は逆凸字状で、深さは上段で約0.25~0.35m、下段で約0.65~0.85mを測る。埋土の状況から、上段を形成する溝

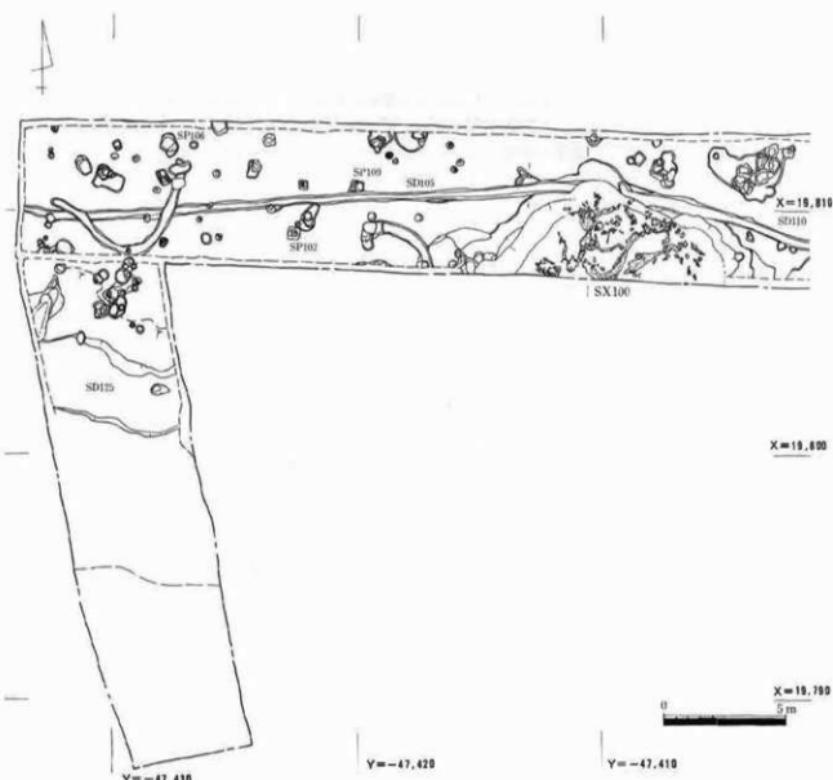


Fig. 31 734-737工区 全体図(1) (S=1/200)

が埋没した後に下段を形成する溝が掘り込まれたことが分かる。埋土は自然埋没であり、流水を伴ったかどうかは確認できなかった。弥生後期の組合せ式鏡板を有する柱穴を多数切っており、古式土師器を多数出土したことから弥生終末期～古墳時代初頭のものと判断した。また、埋土上位においては炭化した木片などを検出している。

SD110 (Fig. 32・34)

DJ50～DM51グリットにかけて検出した溝で、東南東から西北西へと走る。東側でSX150、西側でSX100と切りあっている。3者との前後関係は確認できなかった。検出長約11m、幅約0.25m、断面はU字状で深さ約0.25mを測る。埋没状況は自然埋没を示している。遺物は弥生中期から後期にかけての土器、黒曜石のフレークを出土した。

SD125 (Fig. 31)

DT49～DV50グリットにかけて検出した溝で、南東から北西方向へ走る。両端とも調査区外へと延びており、検出長約6m、幅約2.8m、深さ約0.2mを測る。上面を734-737工区包含層と一緒に掘り上げて

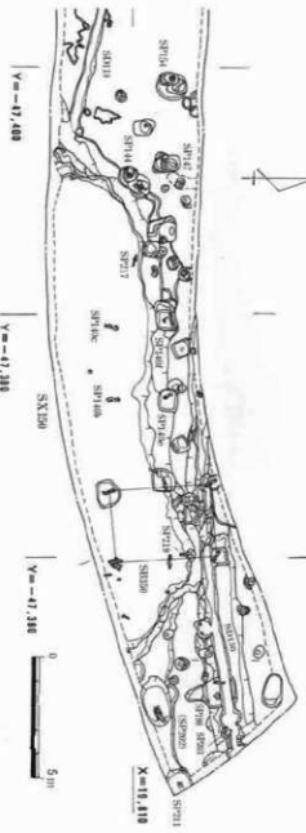


Fig. 32 734-737工区 全体図(2) (S=1/200)

しまったが、西側および南側の切りが悪く断面形状は判然としない。遺物は弥生前期から古墳時代頃、にかけての土器を含んでいるが、時期を特定し得る資料は得られなかった。

留井状遺構

今回の調査では2基の留井状遺構を確認した。留井ニと言っても両者の性格は大きく異なり、SX100は竹木構造を兼ねているのに對し、SX150は純粹な湧水・貯水施設として機能していると考えられる。当遺構は調査区両側に存在する谷地形に向かって包含層土が堆積していると考えられ、遺構露出面まで重機で掘り下げられた。その為、上部にあった包含層との関係が不明となっている。

SX100 (Fig. 33, PL. 8-2, 9)

D150-D151-D150グリットから検出された留井状遺構である。調査区内で東西方向約11.2m、南北方向・約4.8m、深さ約1.0m。断面はほぼ台形状となる。北東部にはSD110、北西部にはSD105が発達する。SD105には水口状の遺構が確認できた為、SX100の開通の施設としたが、SD110については判然としなかった。堆土は大きく2つに分離でき、上位の暗黒灰褐色土層（II層）と下位の暗黒灰白色土層（III層）との境目には木材が密装している。木材のうち大型のものは切り出されただけの丸太材であるが、中形の物は建築部材とみられる角工木が大半である。出土遺物はII層からは弥生後期～古墳時代初期、III層からは弥生中期～後半～弥生後期の遺物が見られた。

SX100開通遺構

SD105 (Fig. 32・36, PL. 10)

D105-D151-D150グリットから検出された溝状遺構で、SX100の北西部分に接続する。検出長は約22m、幅約0.35m、深さ約0.18m。断面は台形状となる。東から西へ向かい緩やかに下っており、D150-D151グリット部分では流水を制節する為の木口と思われる石組みを検出した。ただし、遺構面は北から南側の谷地形へなどらかに下っており、溝と溝の関係もあり、水田城かどこになるのが特徴できない。

SX150 (Fig. 32・37)

DB51-D150グリットにかけて検出された留井状遺構である。この部分だけは調査前から水が溜まつており、表土・包含層を除去したのちも常に水がぬみていた。このような状況のため、遺構の切り合いの確認に手間取り、いくつかはそのまま穴付かずに掘り上げてしまったものもある。出土遺物は調査区内で東西方向約23m、南北方向約4.5m、深さ約0.7m。断面形は逆台形となる。弥生

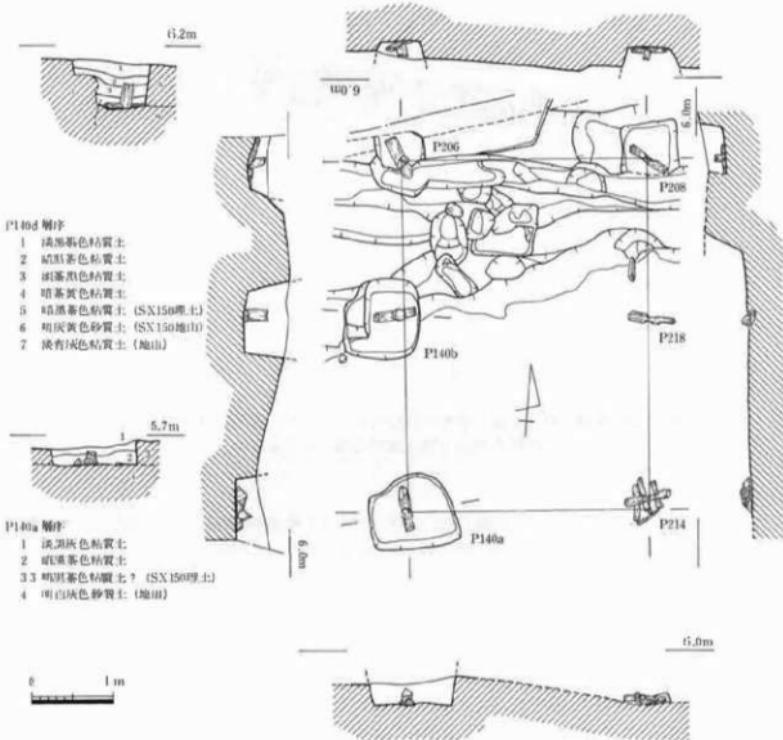


Fig.33 SB350 (S=1/60)

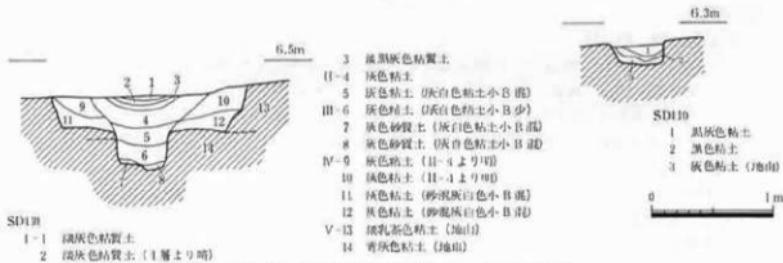


Fig.34 SD130・110土層断面 (S=1/40)

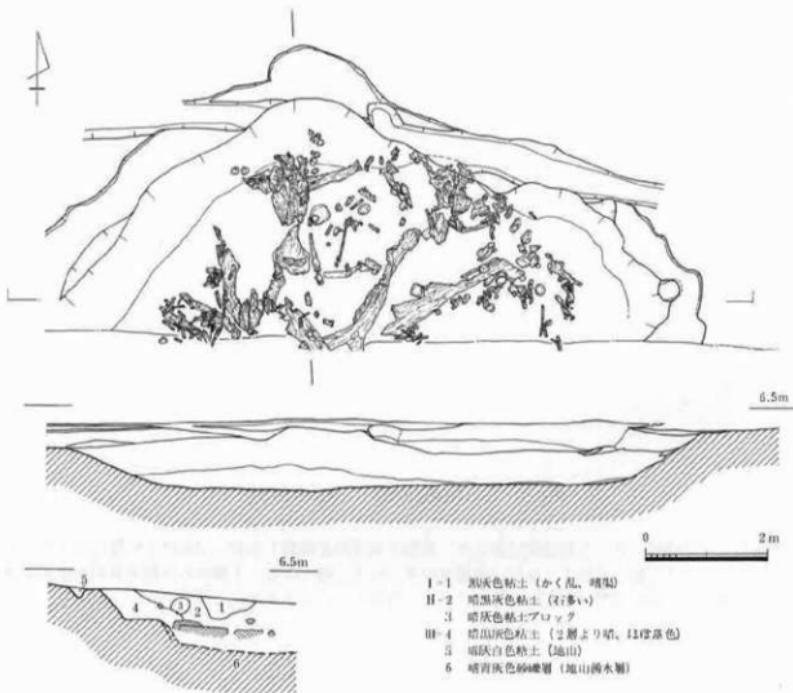


Fig.35 SX100 (S = 1/80)

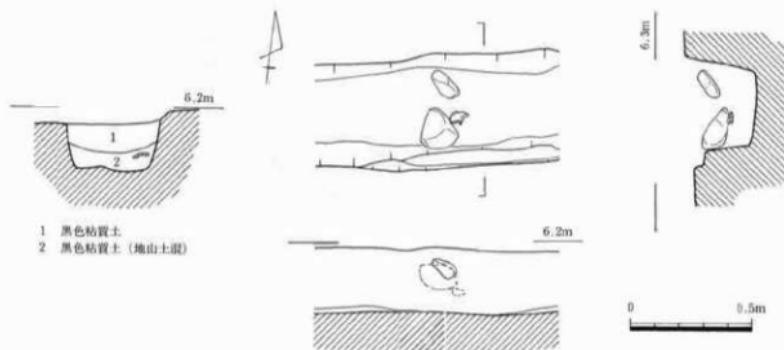


Fig.36 SD105土層断面・水口状造構 (S = 1/20)

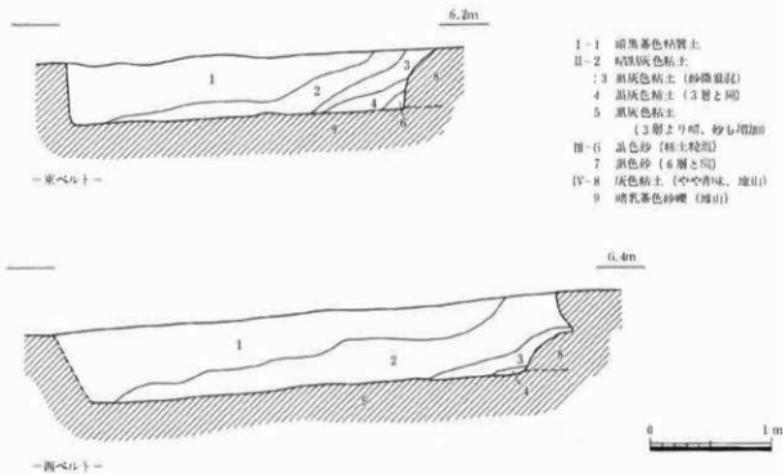


Fig. 37 SX150 土層断面 (S=1/40)

後期の組合せ式礎板を有する柱穴群に切られ、西側にSD110が接続するが、SD110との関係は不明である。埋土は大きく3層に分類できるが、遺物量の多いのは1層である。I層からは縄文後期～弥生中期前半、II層からは弥生前期の土器を出土している。III層からの出土遺物はない。

柱穴群

この調査区からは多数の柱穴を確認し、その多くから柱根、礎板を確認した。柱穴は大きくSX150周辺（調査区東側）と調査区の西側に分布し、前者は軟弱地盤が近いためか、組合せ式の物が多数であった。ここでは柱根を確認したが建物として復元できなかったものについて報告していく。

SP102 (Fig. 38)

DR51グリットから検出された柱穴で、隅丸方形の平面プランを有する。長軸約0.6m、短軸約0.55m、底部は2段構造となっており、深さは上段で約0.45m、下段で約0.55m。主軸の傾きはN-85°-Wを測る。柱根は下段にわずかに残る程度で、どのような造りであったかは不明である。この他には弥生中期の甕を出土している。

SP106 (Fig. 38)

DT52グリットから検出された柱穴で、若干楕円形の平面プランを有する。長軸約0.9m、短軸約0.75m、深さ約0.6m。主軸の傾きはN-29°-Wを測る。柱根は30cm程が残っており八角形に削取られており、柱根の下からは小さな木片が出土している。この他には弥生中期の甕を出土している。

SP109 (Fig. 38)

DQ51グリットから検出された柱穴で、一部をSD105に切られているが、台形状の平面プランを有する。長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ約0.35m。東西方向に主軸を持つ。柱根は約15cmほどが残っていたがスponジ状となっており、どのような造りであったかは不明である。この他には弥生時代の鉢を出土している。

SP144 (Fig. 38)

DI51グリットから検出された柱穴で、SX150・SP156を切る。隅丸長方形の平面プランを有し、長軸

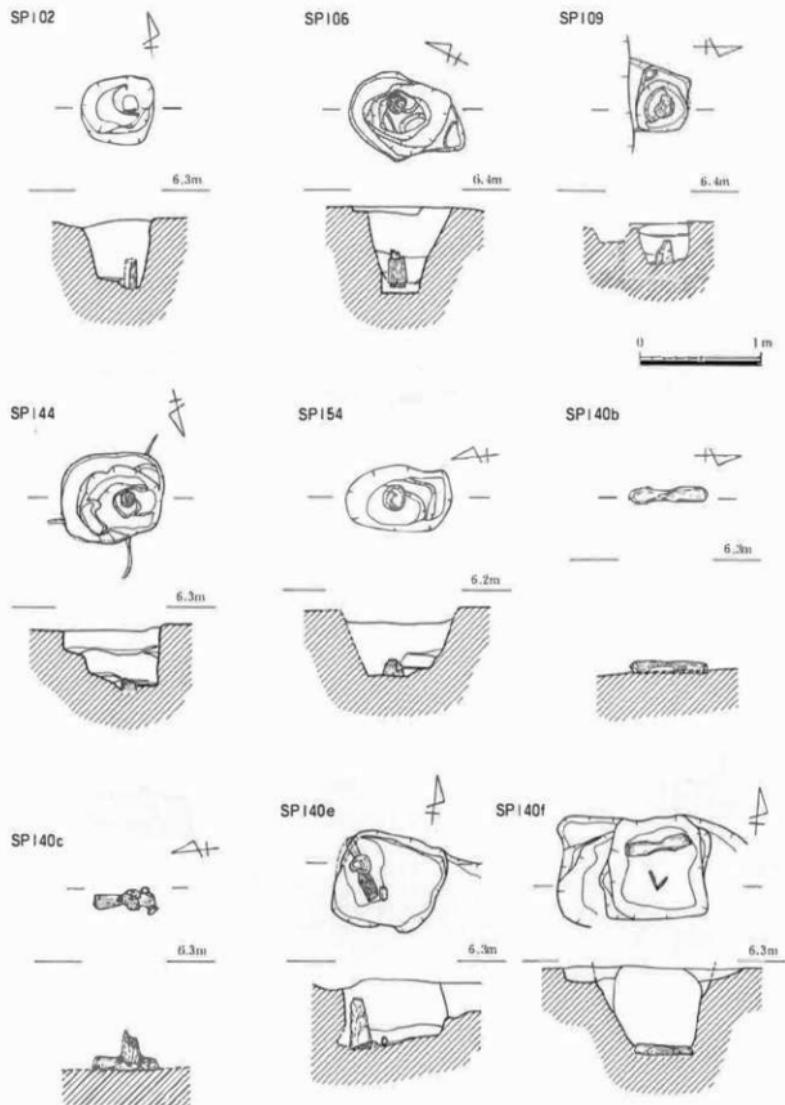


Fig.38 735-737工区 柱穴群 ($S=1/40$)

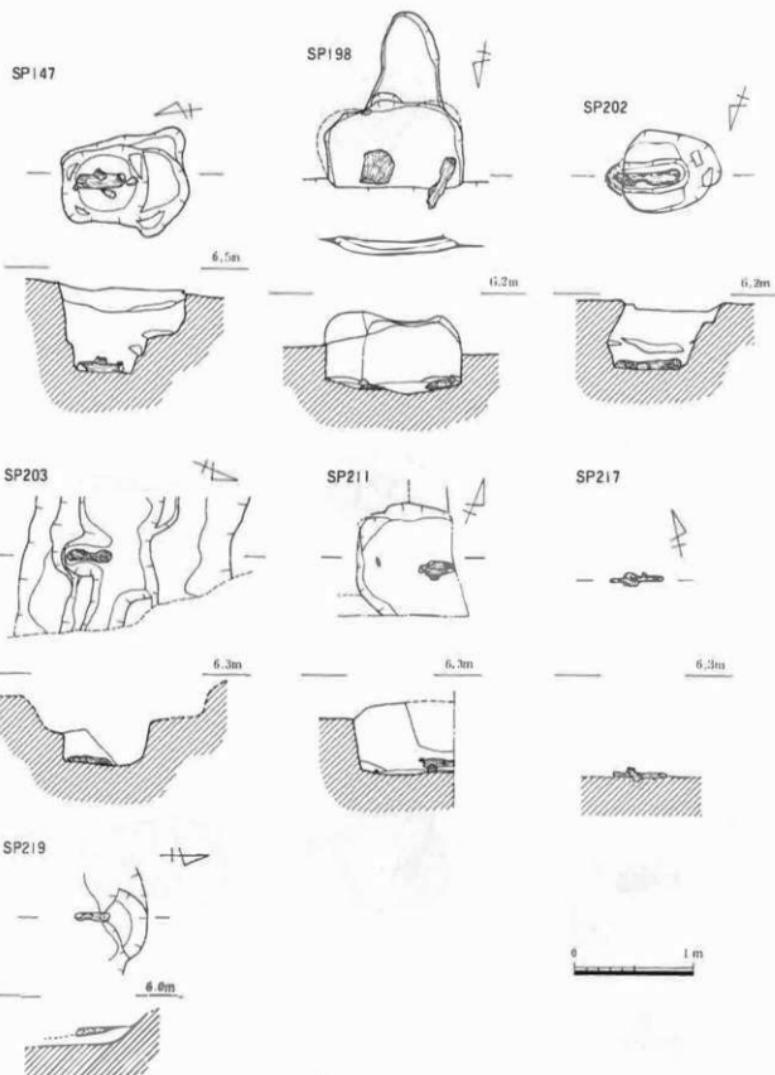


Fig. 39 735-737工区 柱穴群 (2) (S=1/40)

約0.8m、短軸約0.65m、底部は3段になっているが深さ約0.6m。主軸の傾きはN-77°-Wを測る。柱根は約10cmほど残っていたが風化が激しく、どのような造りであったかは不明である。このほかには弥生土器を出土したが、圓化しうるものではない。

SP154 (Fig.38)

DJ51グリットから検出された柱穴で、SP162を切る。ほぼ隅丸長方形の平面プランを有し、長軸約0.85m、短軸約0.55m、底部は3段となっているが深さ約0.45m。主軸の傾きはN-4°-Wを測る。柱根は約15cmほど残っていたが風化が激しく、どのような造りであったかは不明である。このほかに弥生中期の土器を出土した。

SP140b (Fig.38)

DF50~51グリットから出土した礎板である。柱穴はSX150の埋土との区別がつかなかったため掘り上げてしまい、形状などは不明。礎板の主軸は南北方向を取る。礎板の形状は断面カマボコ状で、中央の両面に切り込みを持たせたものである。柱根は確認できなかった。この他の出土遺物は前述の理由から不明である。

SP140c (Fig.38)

DG50~51グリットから出土した礎板である。柱穴はSX150の埋土との区別がつかなかったため掘り上げてしまい、形状などは不明。礎板の主軸はN-84°-Wを測る。礎板の形状は断面カマボコ状で、中央の両面に切り込みを持たせたものである。柱根は約25cmほどが残り、底部は礎板と組み合わせるために割り貫かれており、面取りを施された痕跡を持つ。この他には弥生前期の土器があるが、混入の可能性が高い。

SP140e (Fig.38)

DF51グリットから検出された柱穴で、隅丸長方形の平面プランを有する。長軸約0.85m、短軸約0.8m、深さ約0.55m。主軸の傾きはN-84°-Eを測る。礎板、柱根は柱穴西壁寄りにあり、礎板の形状は断面カマボコ状で、中央の両面に切り込みを持たせたものである。柱根は約40cmほどが残り、底部は礎板と組み合わせるために割り貫かれており、面取りを施された痕跡を持つ。この他には弥生中期の土器があるが、混入の可能性があるが、圓化しえなかった。

SP140f (Fig.38)

DG51グリットから検出された柱穴で、隅丸長方形の平面プランを有する。長軸約0.85m、短軸約0.8m、深さ約0.7m。主軸の傾きはN-85°-Eを測る。礎板は柱穴北壁寄りにあり、礎板の形状は断面カマボコ状で、中央の両面に切り込みを持たせたものである。柱根は確認できなかった。また、底面中央部ではV字状に小木片が確認された。この他には弥生中期の土器、石鉗片などを出土している。

SP147 (Fig.39)

DJ51グリットから検出された柱穴で、隅丸長方形の平面プランを有する。長軸約1.0m、短軸約0.8m、底面は3段構造となっており、深さは下段で約0.7m。主軸の傾きはN-84°-Wを測る。礎板の形状は断面カマボコ状だが、他の礎板と異なり中央部に切り込みを有していない。柱根は約5cmほどを確認したが遺存状態は悪く、どのような造りであったかは不明である。この他には弥生前期~中期の土器を出土している。

SP198 (Fig.39)

DB51グリットから検出された柱穴で、SD130に大きく切られているが隅丸長方形の平面プランを有すると考えられる。削側の浅い掘り込みは柱の抜き取り跡で、土層上でもこれを確認している。長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さ約0.65m。主軸の傾きはN-81°-Eを測る。礎板は柱穴西壁寄りにあり、礎板の形状は断面カマボコ状で、中央の両面に切り込みを持たせたものである。柱根は確認できなかった。また、床面中央部で木質の植物遺体を確認したが取り上げられるようなものではなかった。この他には弥生中期前半の土器片を出土している。

SP202 (Fig.39)

DA50~DB51グリットから検出された柱穴で、卵型の平面プランを有する。内側は東側に大きくえぐ

れ、底面は二段構造となっている。長軸約0.8m、短軸約0.7m、下段で深さ約0.5m。主軸の傾きはN-61°-Eを測る。礎板の形状は断面カマボコ状で、中央の画面に切り込みを持たせたものである。この他には弥生前期・弥生終末・古墳初頭の土器片を出土している。

SP203 (Fig.39)

DA52～DB52グリットにおいて検出した柱穴で、遺構自体はSD130によりほとんど残っていない。礎板の主軸はN-24°-Wを測る。礎板の形状は断面カマボコ状で、中央の画面に切り込みを持たせたものである。柱根は確認できなかった。このほかには弥生土器片・古式土器片を出土したが復元化したものではなかった。

SP211 (Fig.39)

DA51グリットから検出された柱穴で、遺構の東部分および南壁は調査区外へと延びている。礎板もその半分しか出土していないが、おそらくは他の物と同様、断面カマボコ状で、中央の画面に切り込みを持たせたものと考えられる。柱根は確認されていない。この他には弥生中期の土器片を出土している。

SP217 (Fig.39)

DH51グリットから検出された柱穴だが、柱穴はSX150の埋土との区別がつかなかつたため掘り上げてしまい、形状などは不明である。礎板の主軸はN-79°-Wを測る。この礎板は他の物とは構造・規模が異なり、径5cmほどのまっすぐな枝の上に径10cm程度の貧弱な柱根を乗せている。この規模から建物を構成する主な柱ではなく、補助的な支柱であろうと考えられる。この他の出土遺物はない。

SP219 (Fig.39)

DD52グリットから検出された礎板で、柱穴はSX150の埋土との区別がつかなかつたため掘り上げてしまい、形状などは不明である。主軸は南北方向を取る。この礎板は他の物とは規模が異なり小型である。

この他の出土遺物は確認されていない。

4. 出土遺物

この調査区からは縄文後期～古墳初頭にかけての遺物を採取した。このうち縄文時代の物は量的にも少なく、混入を示すような出土状況であった。

SB330出土遺物 (PL.11-1)

土製鋸錐車 (Fig.40)

1はPL40a裏込め土からの出土。径5.3cm、厚さ1.0cmを測り、表面にはミガキに近い工具ナデが施されている。

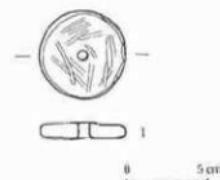


Fig.40 SB330出土遺物 (1)
(S=1/3)

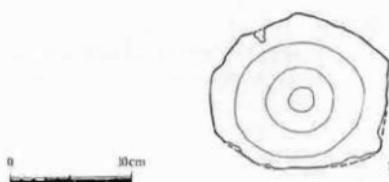
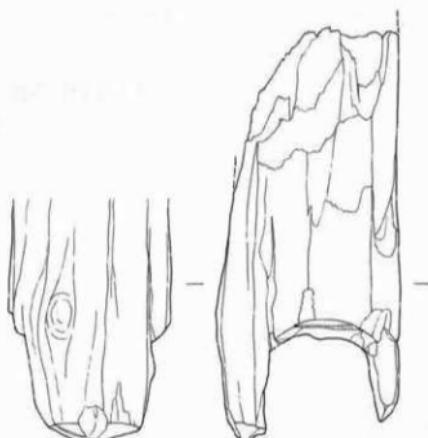
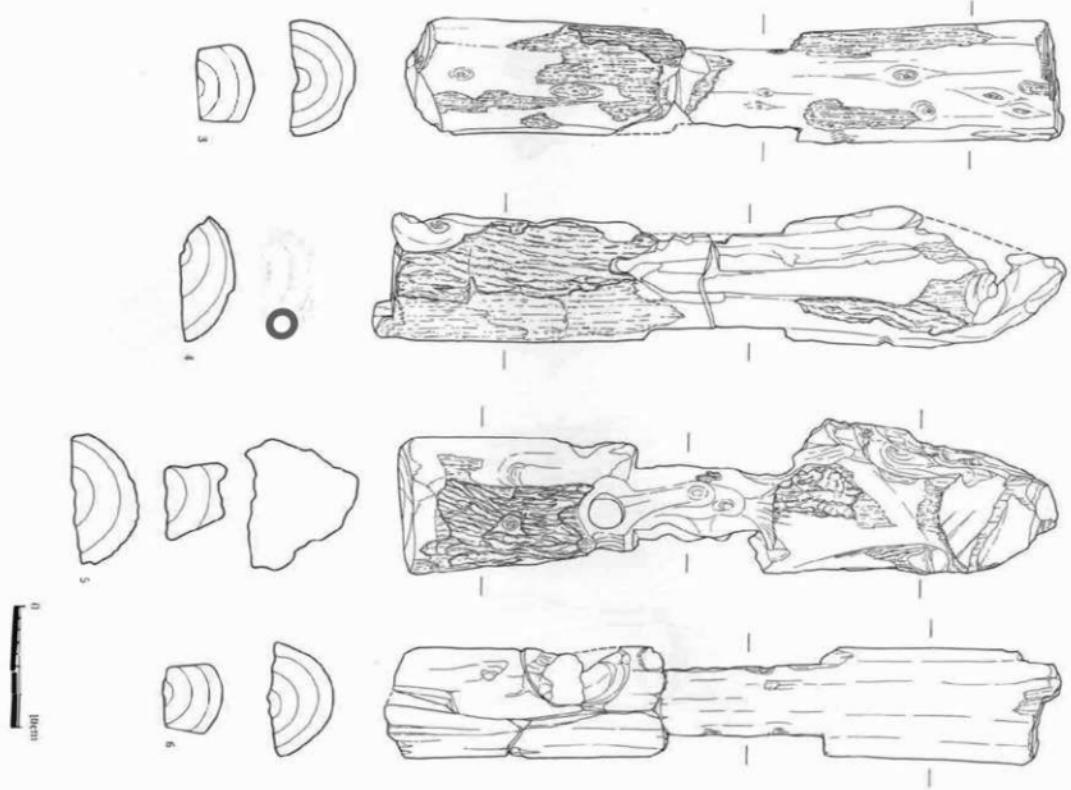


Fig.41 SB330出土遺物 (2) (S=1/4)

FIG. 42 SB330出土遺物 (3) (S=1/4)



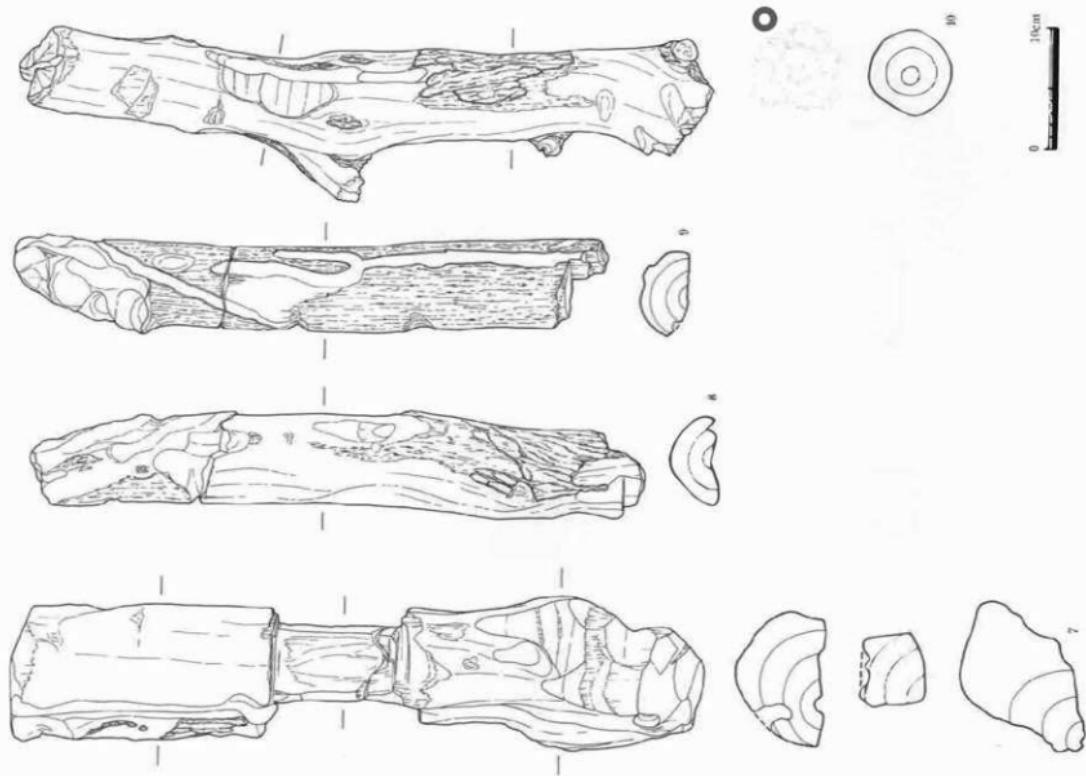


Fig. 4.1 SB350出土遺物(4) (S=1/4)

柱模 (Fig.41)

調査時点では柱模はP206、P208、P140a、P140dにおいて確認したが、炭化したのはP140dの1点だけである。

2はP140dからの出土。32cmほどが残存し、中心部は腐食が進んでいる。全面に面取りが行なわれ、底部は礎板と組み合わせるために切り込みが施されている。

礎板 (Fig.42-3～Fig.43-10)

全ての柱穴で礎板を確認したが、P208のものは所在不明となっている。側断面は建物の重量のために反り返るが、礎板自体の痛みが激しく、炭化しない状況である。3～7は柱模と組み合わせるために、中央両側面に切り込みを有している。切り込みは「コ」の字状に施されており、特に7は上面にも加工が施されている。8～10は7の下に置かれていたもので、加工痕などは特に確認されていない。

SD130出土遺物 (PL.11-2・12)

第Ⅰ層出土遺物 (Fig.44-1～2)

1は弥生土器の蓋の底部小破片である。中期のもので上げ底となる。2は砂岩製の砥石の小片で、4面に使用痕跡が見られる。

第Ⅱ層出土遺物 (Fig.44-3～7)

3～4は弥生土器の蓋の底部である。5は弥生土器の蓋の底部小破片である。中期のもので上げ底となる。6は高环（脚付鉢？）の脚部小片で、円形の穿孔を施してある。7はミニチュアの蓋で手づくね製である。

第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物 (Fig.44-8～11)

第Ⅲ層と第Ⅳ層の分層面からは多くの土器が出土したため、このグループは別個に取りあげを行なった。8～9は弥生土器の蓋の口縁部である。9は後期前半の二重口縁蓋だが、袋状口縁の外側端部に刃目を有している。10は弥生土器の鉢である。11は土師器の鉢と思われるが、小片のため断定できない。

第Ⅲ層出土遺物 (Fig.44-12～20)

12～13は弥生土器の蓋である。14は弥生土器の鉢である。15は弥生終末期の蓋である。16は土師器の脚付鉢である。17は土師器の高环である。18～19は土師器の壺である。20は不明土製品である。

第Ⅳ層出土遺物 (Fig.44-21～23)

21～22は土師器の蓋である。23は土師器の鉢で、完存品である。外面の調整は荒い。

その他の土器 (Fig.44-24～Fig.48-98)

層位ごとに取り上げられなかった土器を報告する。24～25は縄文土器の浅鉢の小片で、晚期後半（山ノ寺～夜白期）のものと考えられる。26～36は蓋で、26・30は弥生中期。27・32は弥生後期後半、28・29・31・33は終末期のものである。31は内底面中央部に刺突痕を有し、口縁部を打ち欠いた可能性がある。34～36は大型の蓋の口縁部小片で、時期を特定することはできない。37～54は蓋で、37は前期後半～中期前半、38は中期後半、39～51は終末期～古墳時代初期のものである。52～54は大型品で、後期のものと考えている。55～64は鉢である。55は弥生中期前半の龜ノ甲系のもので、蓋となる可能性もある。56～64は弥生後期～古墳時代初期。65～75は土師器の壺で、古墳時代初期。76～80は弥生後期～古墳時代にかけての高环である。81～82は弥生土器の蓋である。83～87は器台である。83は弥生中期、84は弥生後期後半で他地域からの流入品の可能性がある。85～87は土師器で古墳時代初期。88～92は時期不明の土製品である。88～90は手づくねの鉢で、90の断面は二枚貝の殻のようになっている。91は小型の脚付き鉢、92は用途不明の土製品で、蓋のミニチュアか。93は炭化木材で、一方に工具痕が残る。94は礎石で安山岩。95～96は砥石で共に肌理の細かな砂岩である。

北側試掘調査区出土遺物 (Fig.48-97～99, PL.8-1・12)

掘立柱建物が大型建物になるかどうかを確認するために北側を試掘したところ、SD130の続きを確認した。ここでは完存に近い土器が溝内に埋没された状況で確認された。本来ならば現状保存を行なうところであるが、工事等により破損する可能性が高かったため、特に残りの良い2点を取り上げることとなった。この際に作図などの作業は一切行なわれていない。いずれも弥生終末～古墳初期にかけてのも

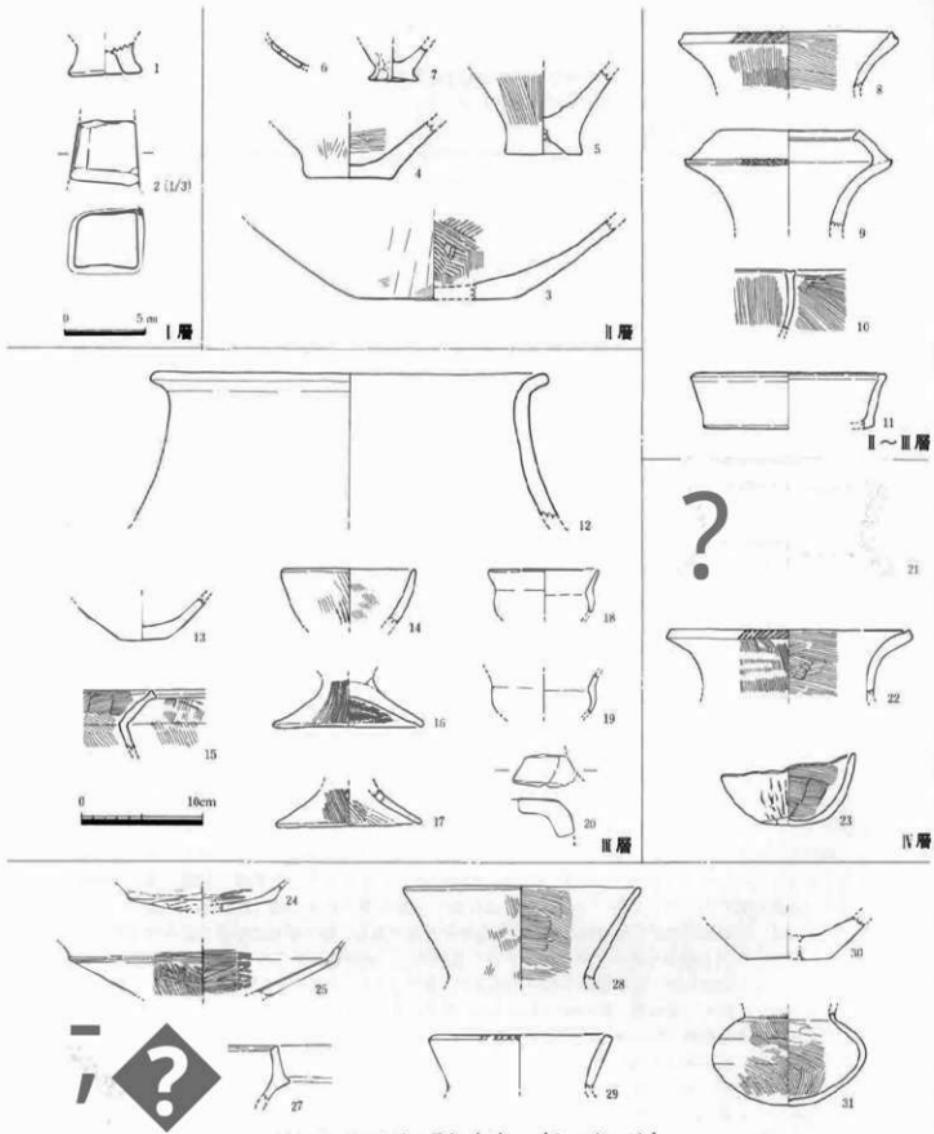


Fig. 44 SD130出土遺物 (1) ($S=1/3 \cdot 1/4$)

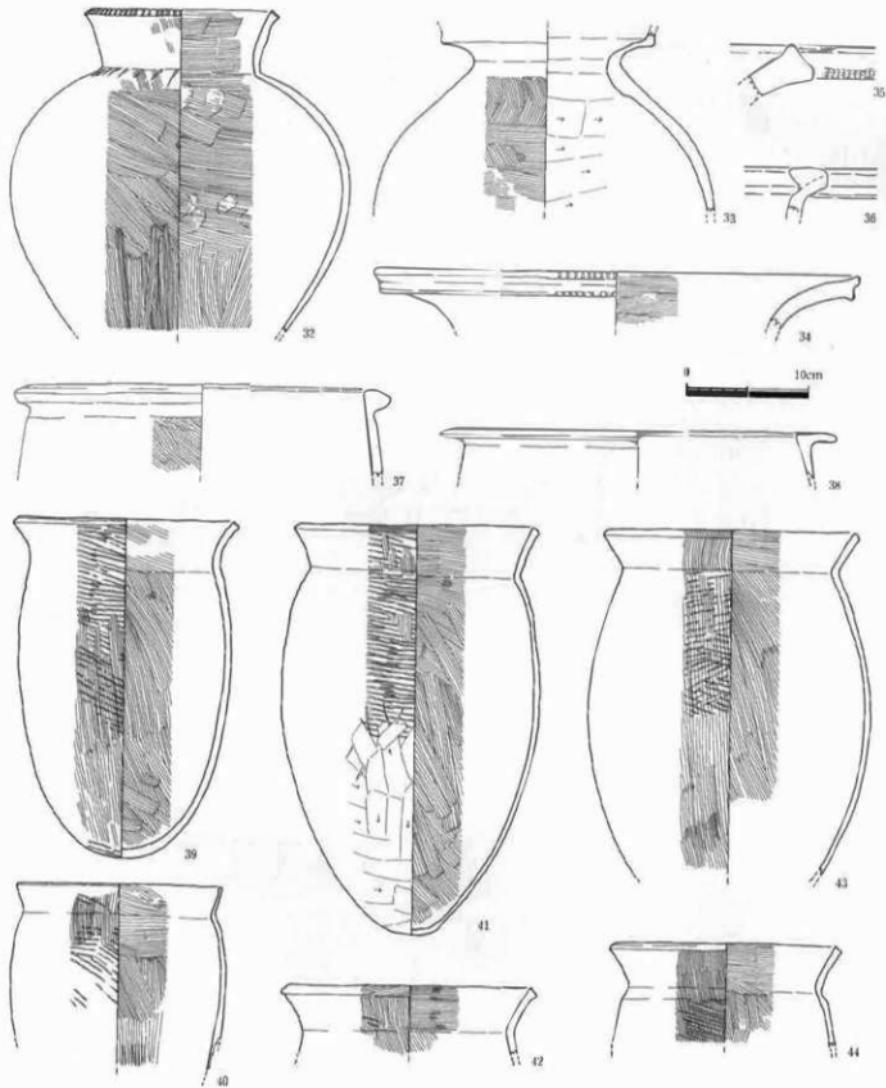


Fig.45 SD130出土遺物 (2) ($S=1/4$)

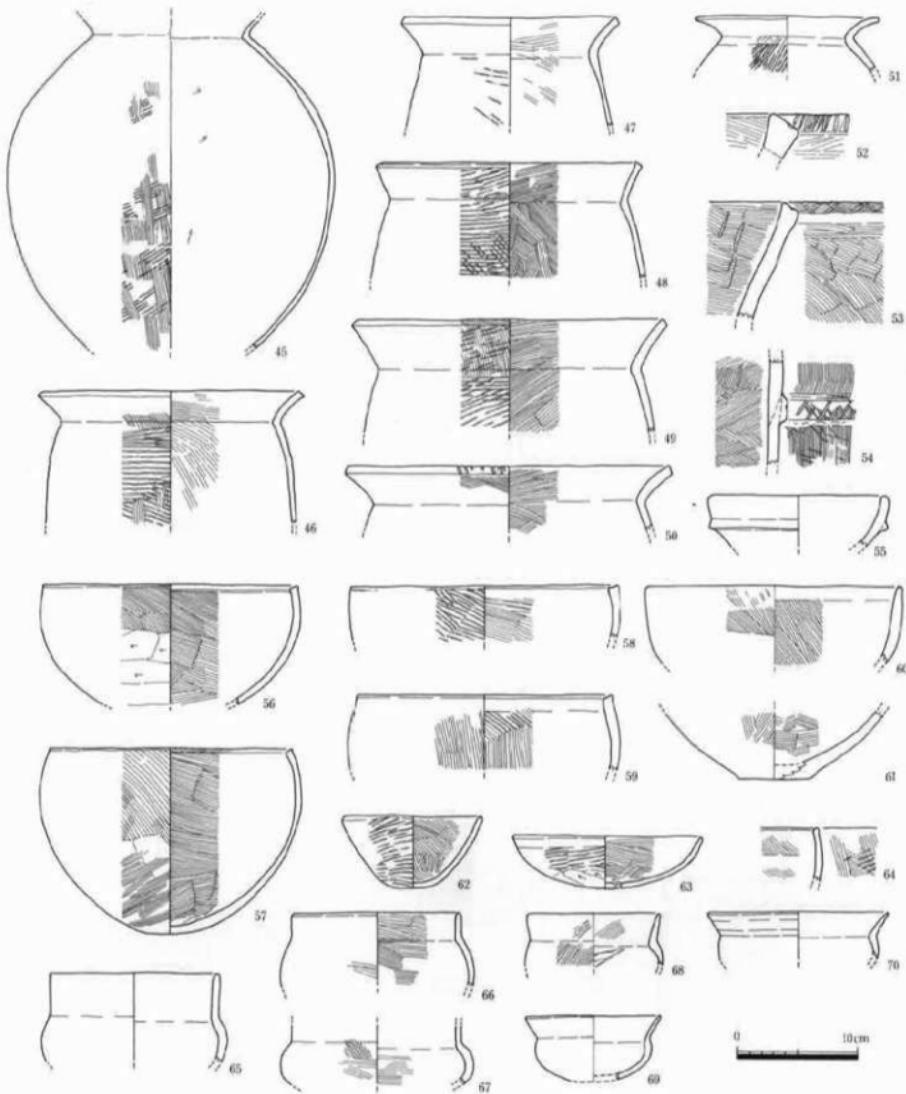


Fig. 46 SD130出土遺物 (3) (S=1/4)

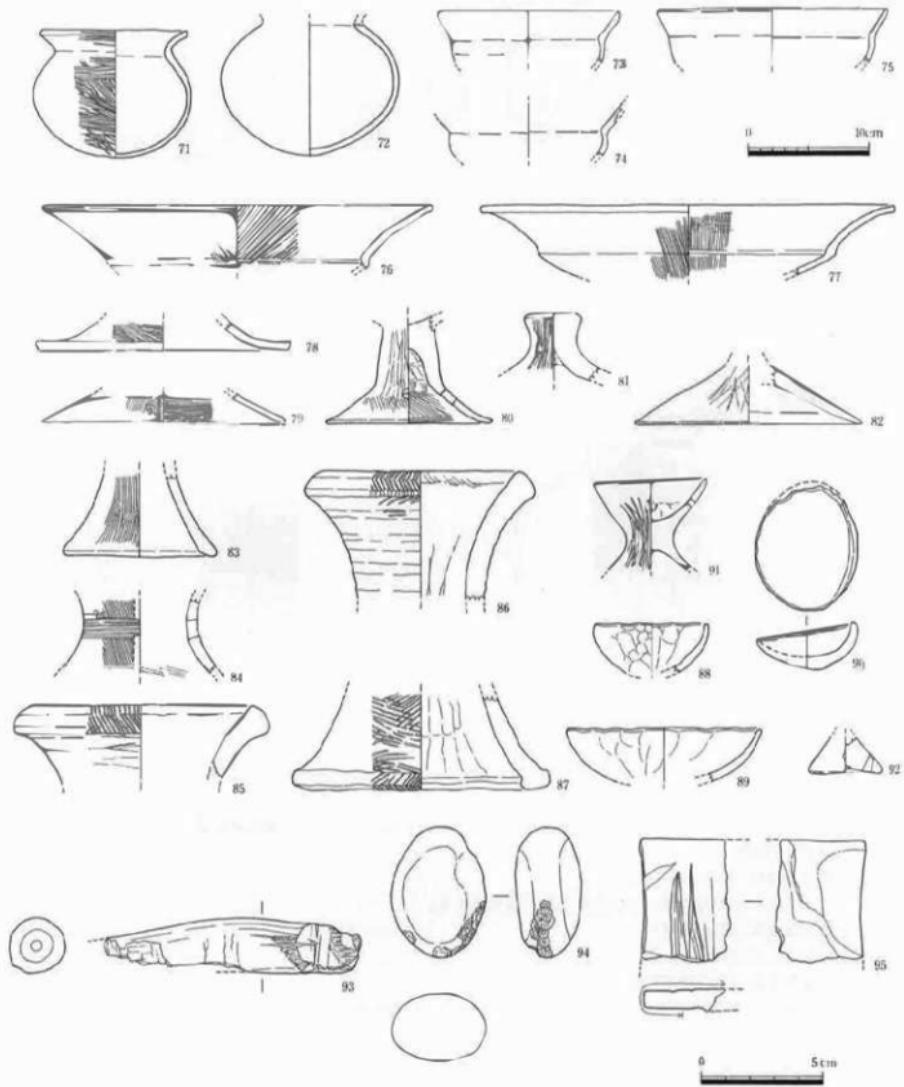


Fig.47 SD130出土遺物 (4) ($S = 1/4 \times 1/2$)

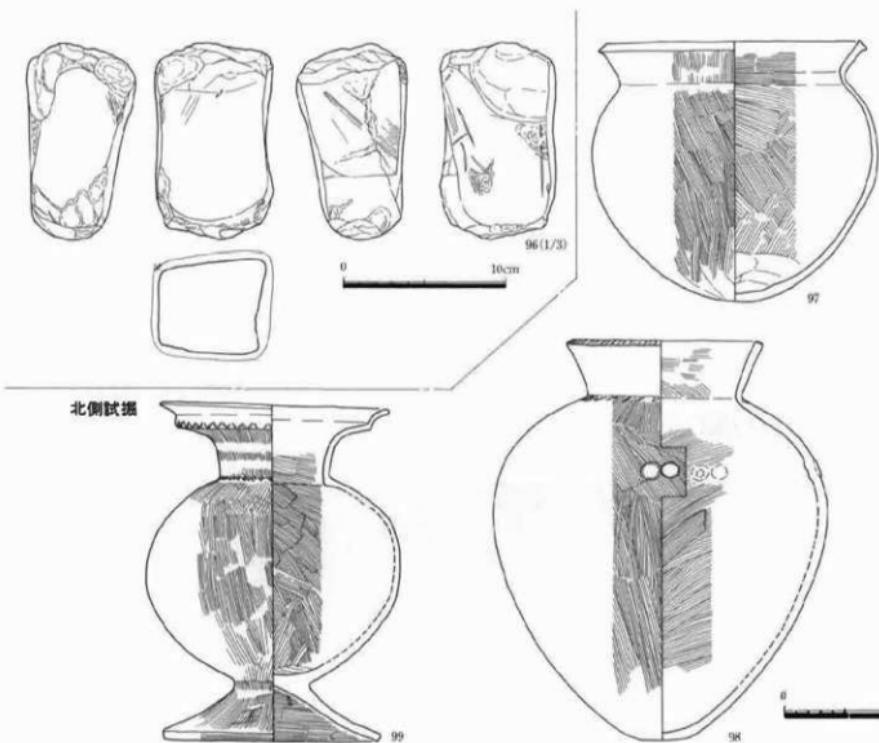


Fig.48 SD130出土遺物 (5) (S=1/3・1/4)

のである。97は甌。98は壺で、胴部上位には一対の浮文が施されている。99は脚付甌である。

SD110出土遺物

I層出土遺物 (Fig.49-1~3)

1・3は弥生土器の甌。2は弥生土器の器台である。

II層出土遺物 (Fig.49-4)

4は弥生後期の甌である。

その他の土器 (Fig.49-5~18)

5~6は弥生土器の甌である。7~14は弥生中期~後期の甌である。15~18は弥生土器の器台である。

SD125出土遺物 (Fig.50)

1~8は甌である。1は弥生終末。8は内外面にわずかにミガキの痕跡が見られる。2~7・9は甌である。5は弥生前期、その他は弥生中期のものである。

SX100出土遺物

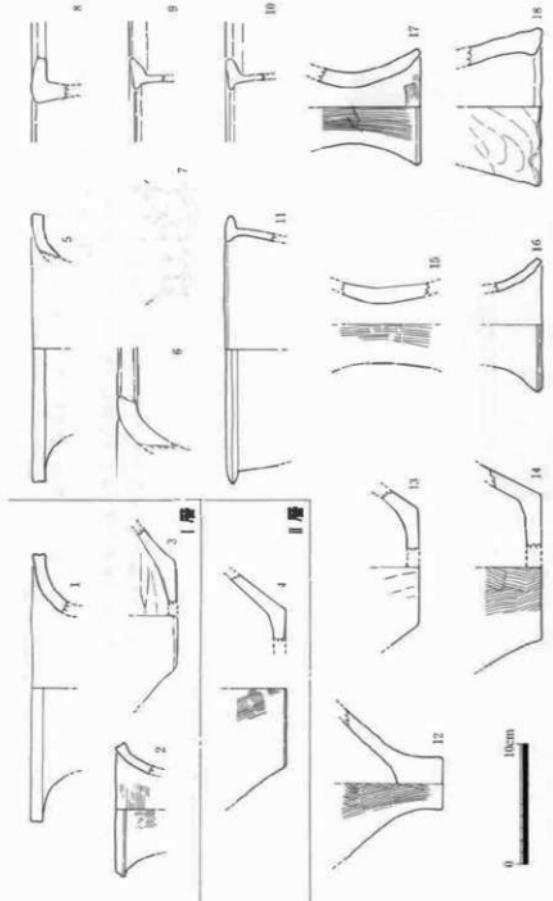


Fig. 49 SD110出土遺物 (S=1/4)

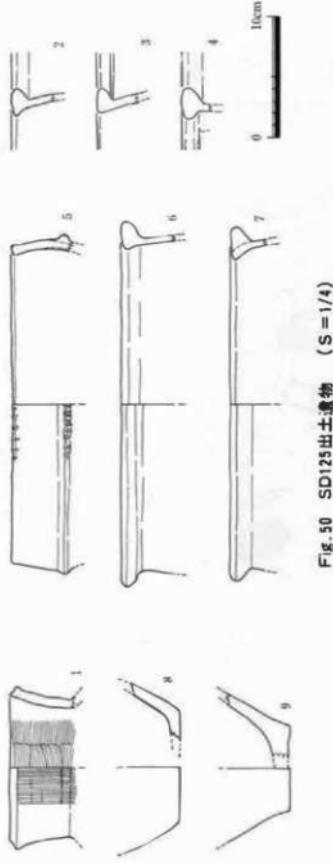


Fig. 50 SD125出土遺物 (S=1/4)

1層出土遺物 (Fig. 51、PL. 13-1)

1・4は縄で、1は弥生時代、4は古墳時代のものである。2～3は弥生土器の縁である。5～6は縄で、6は弥生時代、5は古墳時代のものである。7～8は弥生時代後期の縁で、7の底面にはハケ目が施されている。

2層出土遺物 (Fig. 51、PL. 13-2)

9～12は弥生土器の縁で、9～10は弥生後期後半、11～12は外側に内側りが施されている。13～18は

弥生土器の蓋で、17の底部にはハケ目が施されている。19は弥生後期の鉢である。20は弥生土器の蓋と思われる。21は弥生土器の高柄の脚部小片である。22~23は弥生土器の器台である。24は器種は不明だが、外面には半截竹管文が施されている。中船瀬戸内地方の弥生土器か。

昌磨出土遺物 (Fig. 52~53)

25~29は弥生土器の蓋である。25~28は中期のもので、29は後期前半。30~36は弥生土器の蓋である。33は外面丹塗り。43は肥後系の口縁部である。50は中央の高い脚部を有するもので、後期に属する。

1層

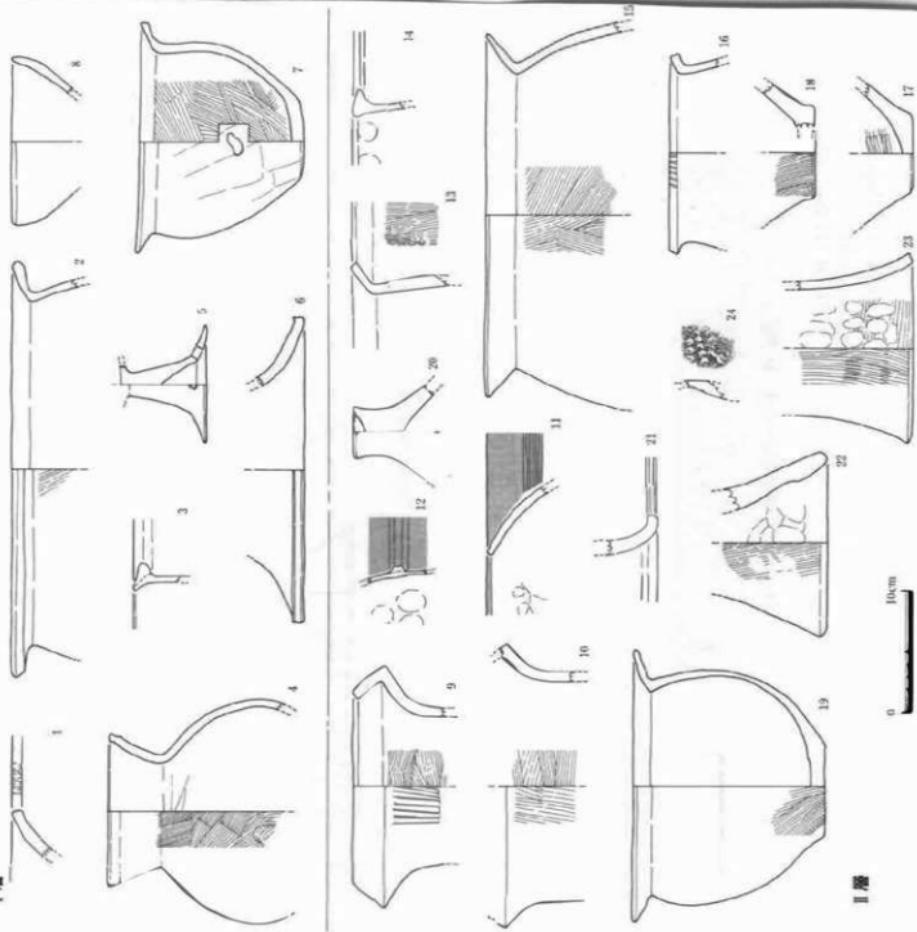


Fig. 51 SX100出土遺物 (1) (S=1/4)

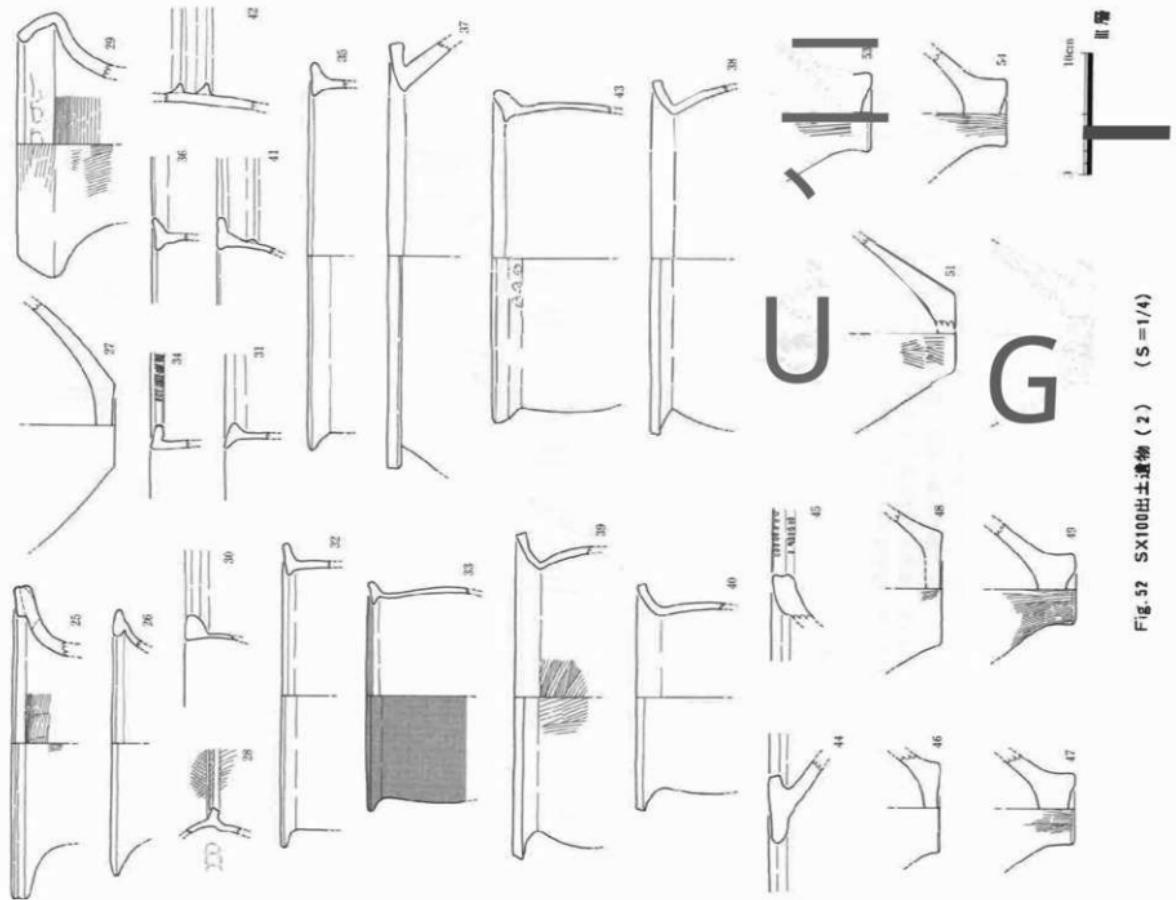


Fig. 52 SX100出土遺物(2) (S=1/4)

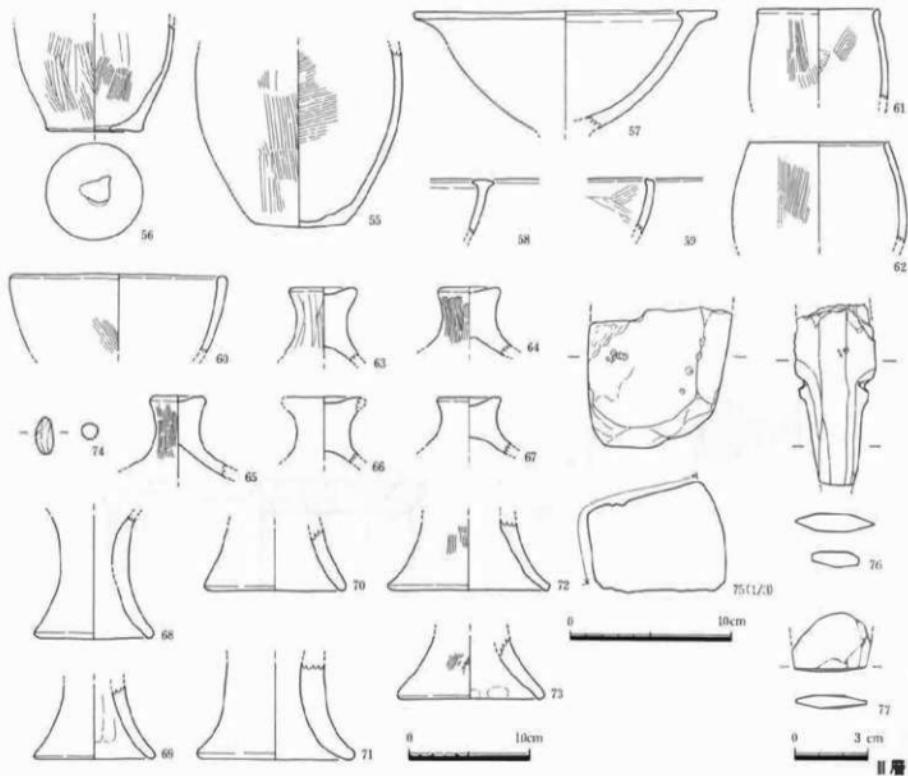


Fig. 53 SX100出土遺物 (3) (S=1/4・1/3・1/2)

56は焼成後、穿孔を施している。57は弥生土器の高環で、弥生中期。58~62は弥生土器の鉢で弥生後期。63~67は弥生土器の蓋である。68~73は弥生土器の器台で中期~後期前半。74は土製の投擲である。75は砥石で材質は砂岩。76~77は真岩製の磨製石剣の基部である。76は基部に抉りが施されているが、この部分に磨耗した様子は見られない。77は刃部がひどく、端部でかろうじて断面形を観察できる程度である。

東西ベルト上層出土遺物 (Fig. 54)

東西ベルトは調査の安全上最後に振り下げを行なった部分である。上層遺物はⅡ層、下層遺物はⅢ層に対応する。上層遺物には、包含層からの混入品の存在も否定できない状況である。78~81は弥生土器の壺で、中期から後期にかけてのものである。82~93は弥生土器の甕であり、中期のものである。94は土師器の甕で、古墳初頭のものである。95~96は弥生土器の高環で、弥生中期。97は弥生土器の蓋である。98は弥生土器の鉢である。弥生後期か。

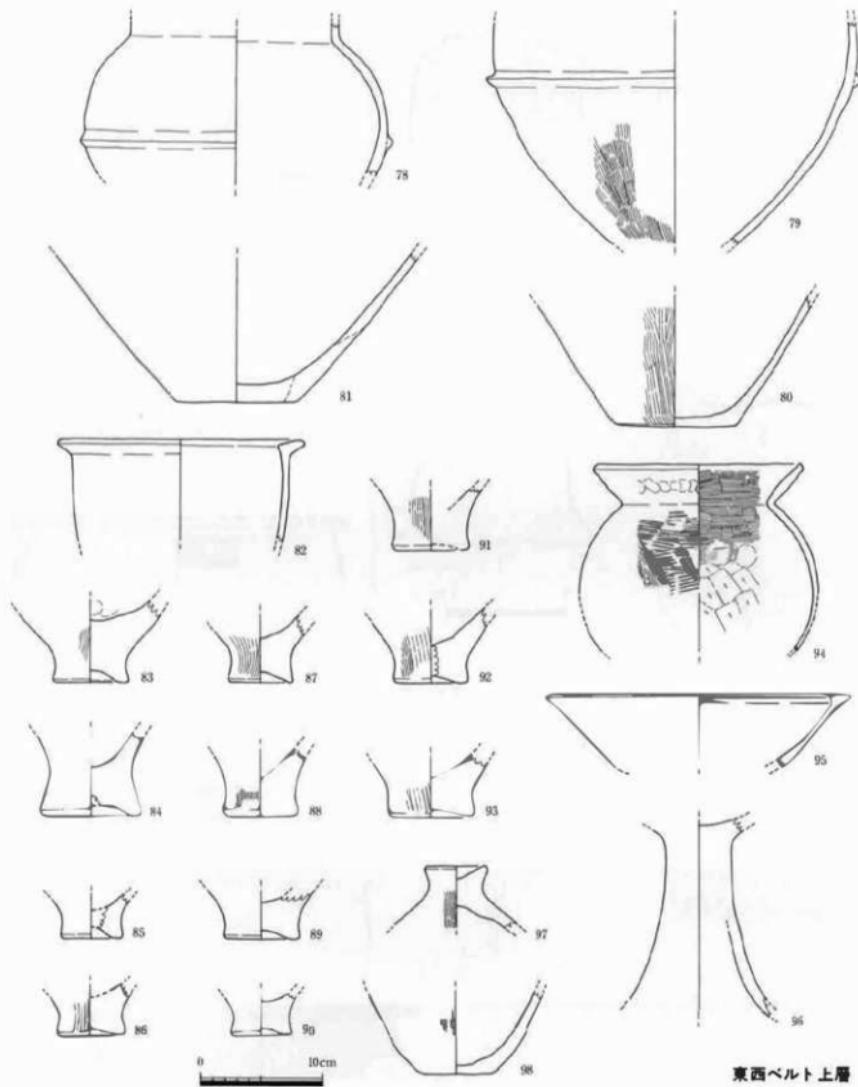


Fig.54 SX100出土遺物 (4) (S=1/4)

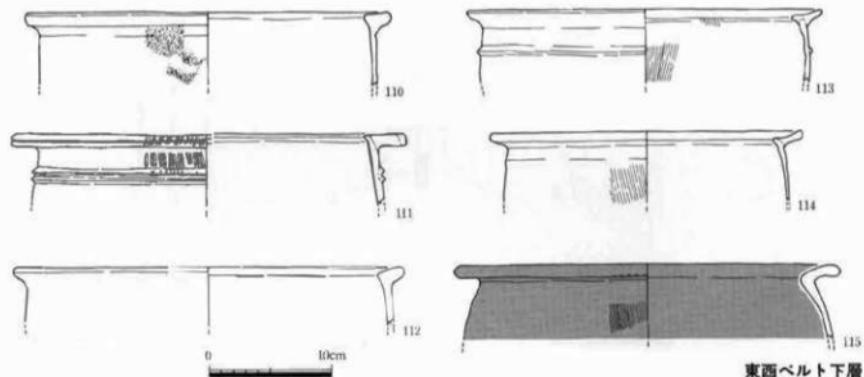
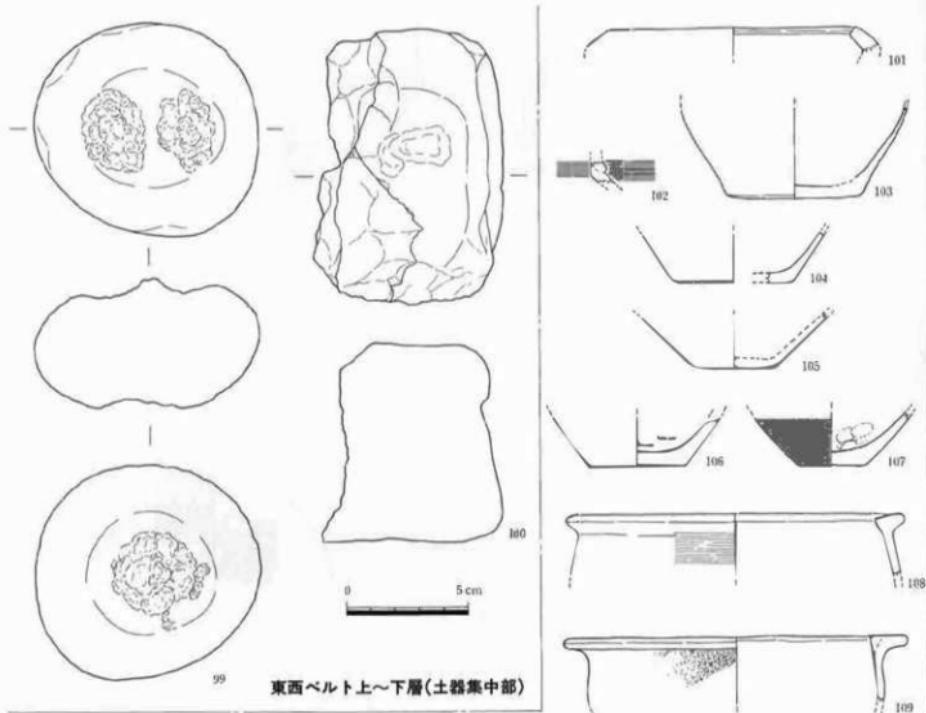
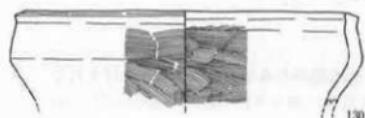
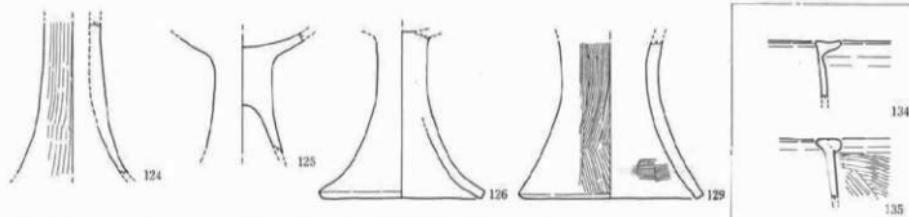


Fig.55 SX100出土遺物 (5) (S=1/2・1/4)



東西ベルト下層



0 10cm

東西ベルト最下層

Fig.56 SX100出土遺物 (6) (S=1/4)

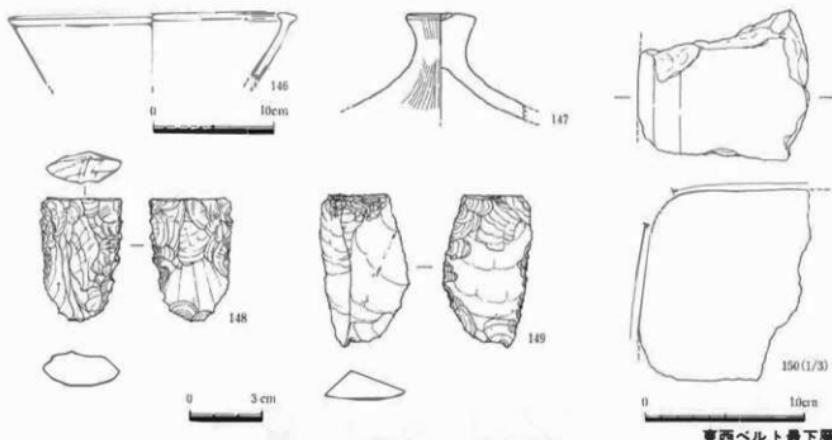


Fig. 57 SX100出土遺物 (?) (S=1/4・1/2・1/3)

東西ベルト上～下層（土器集中部）出土遺物（Fig.55）

東西ベルトの分層面では土器の集中廃棄が確認されたため、この部分のみでの遺物の取り上げを行なった。実測したのは石器1、石材1の2点のみである。99は両面に縦みを持つ敲石で安山岩製。100は全面に煤の付着した石材である。安山岩か。

東西ベルト下層出土遺物（Fig.55～56）

101～107は弥生土器の壺である。102・107には丹塗りが施されている。108～121は弥生土器の甕で、弥生中期から後期のものである。115には内外面とも丹塗りが施されている。122～123は弥生土器の鉢の細片である。124～126は弥生土器の高坏である。127～128は弥生土器の蓋である。129は弥生土器の器台で、後期のものである。

東西ベルト最下層遺物（Fig.56～57）

130～131は弥生土器の壺である。132～144は弥生土器の甕で、弥生中期から後期のものである。145～146は弥生土器の高坏で、弥生中期のものである。147は弥生土器の蓋である。148はサヌカイト製のスクレイパー、149はサヌカイトの二次加工剝片である。150は砾石である。

その他の出土遺物（Fig.58～74、PL.13-3・14）

151は中期前半の壺の肩部の小片である。152は中期前半の壺の口縁部か。153～166は広口壺である。158～161には暗紋が施され、157・158・162には丹塗りも施されている。153～155、157～162は弥生中期、156は弥生後期、163～166は終末期のものか。167～169は短頸壺である。169は終末期のものか。170～175は無頸壺である。174～175は弥生中期～後期にかけてのものか。176は二重口縁壺で、弥生後期。177は袋状口縁壺の胴部か。弥生中期。178～186は壺の肩部破片である。178・179・182・183は無形壺の174・175と同時期のものか。186は弥生後期。187～213は壺の底部である。

214～368は甕である。214～240は弥生前期後半～中期前半。241～247、258、265は弥生中期前半。この内245は丹塗りが施されている。248～257、259～261、266～286は弥生中期～後期初頭。この内251は丹塗り、283～285、は肥後系の脚付きの甕になると思われる。288～308は弥生後期。310～321は古墳初頭で、309～315は口縁端部に若干のつまみ上げが見られる。322～358は甕の底部である。

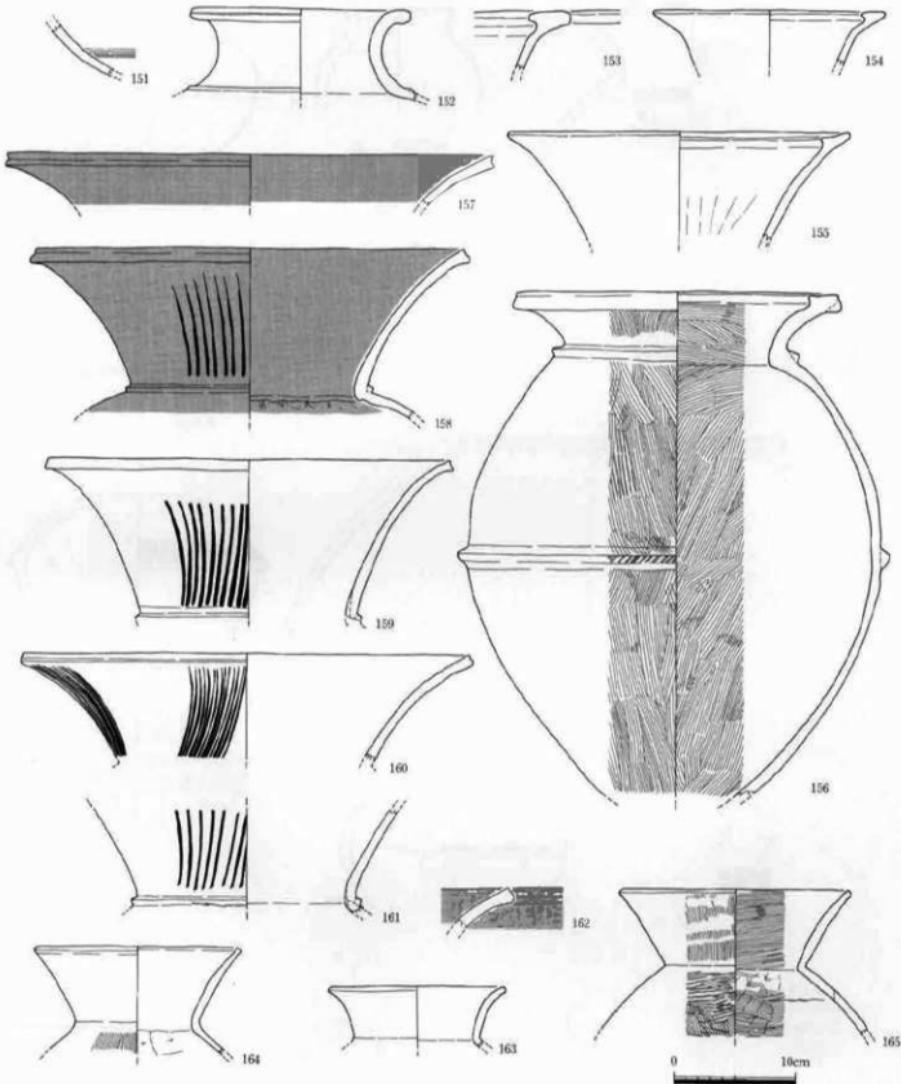


Fig.58 SX100出土遺物 (8) (S=1/4)

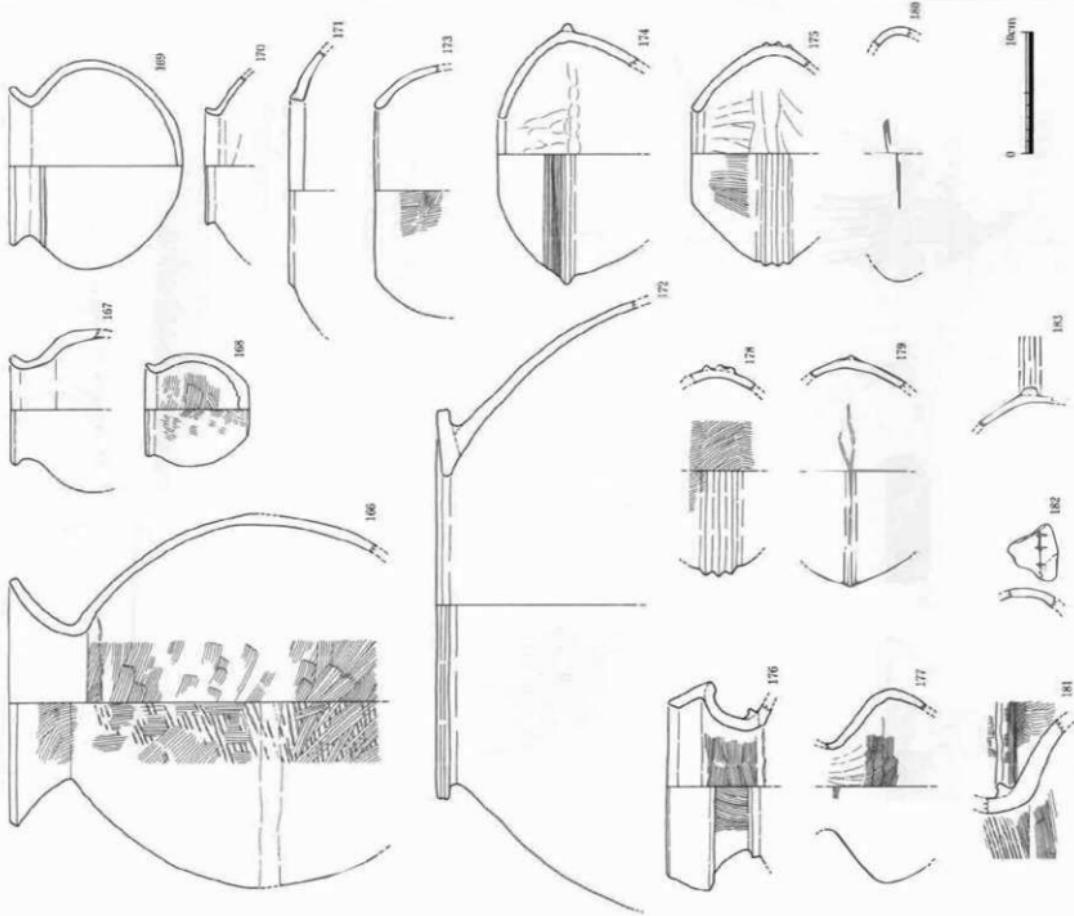


Fig. 59 SX100出土遺物(9) (S=1/4)

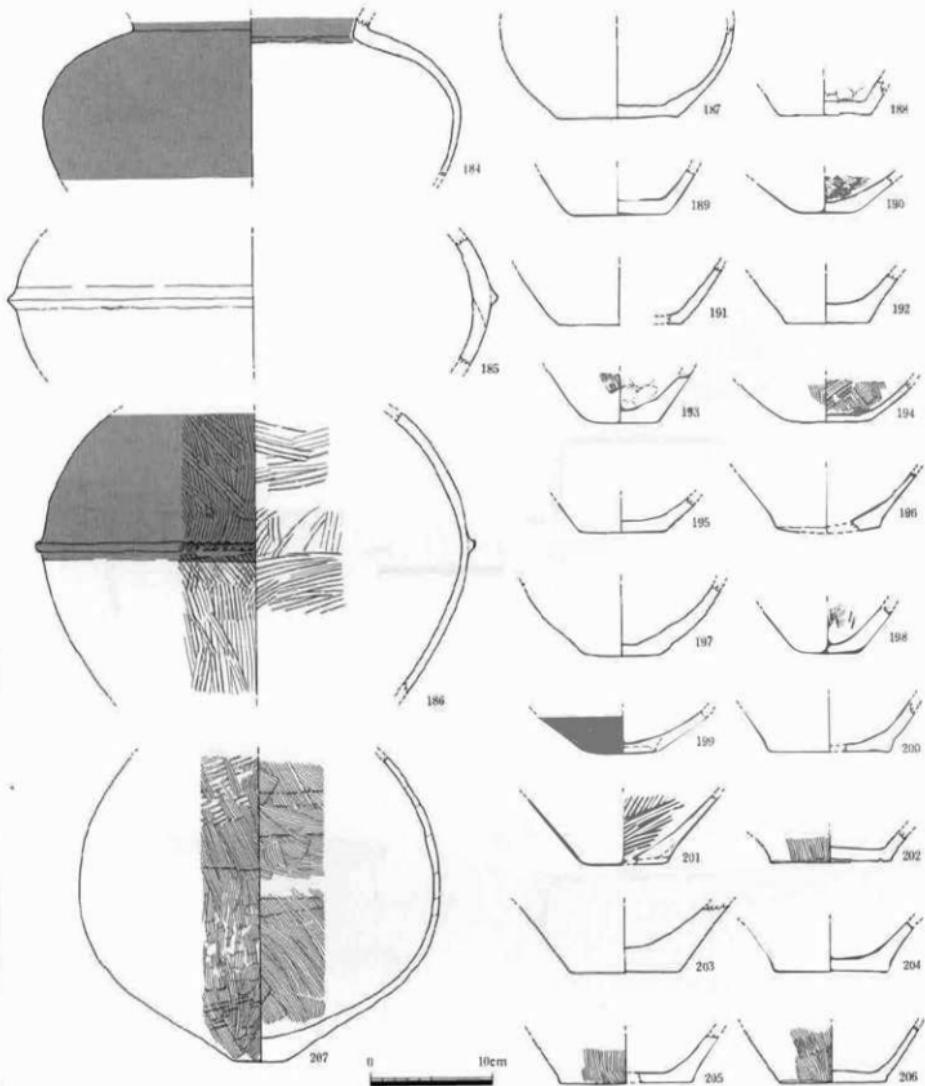


Fig. 60 SX100出土遺物 (10) ($S = 1/4$)

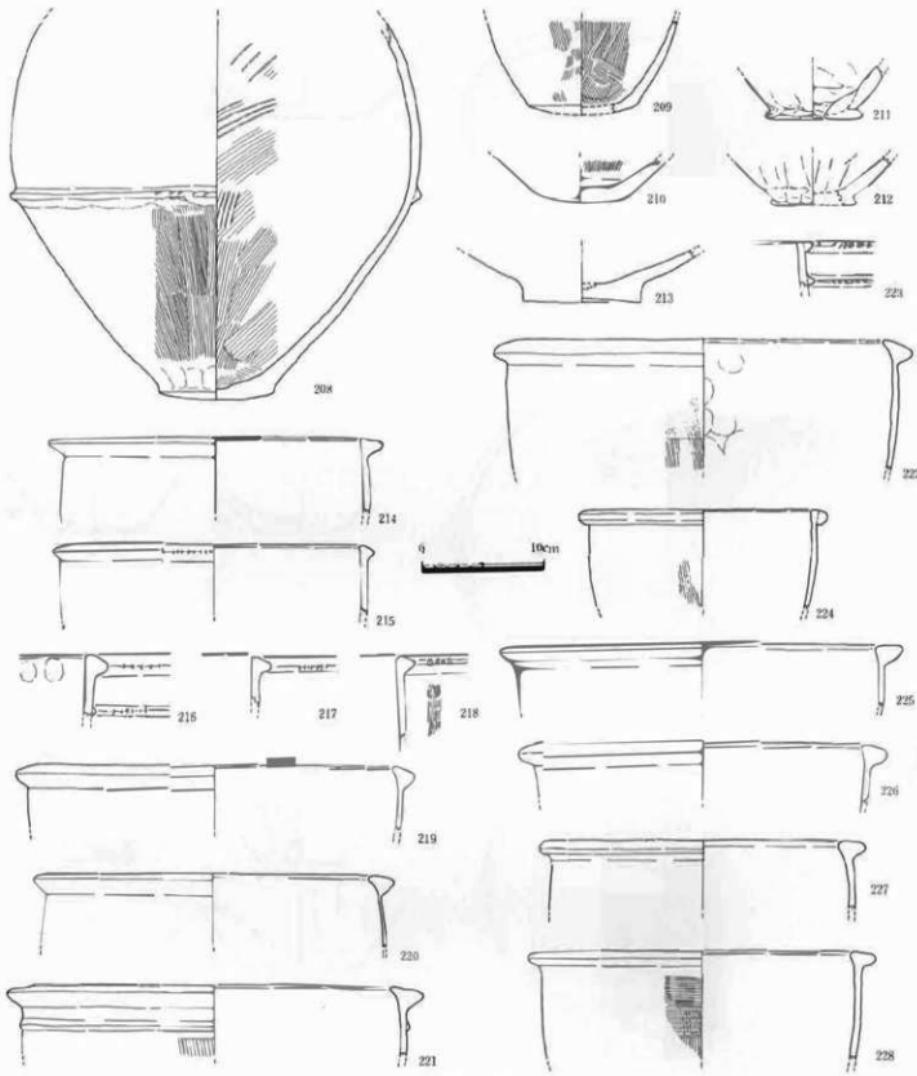


Fig.61 SX100出土遺物 (11) (S=1/4)

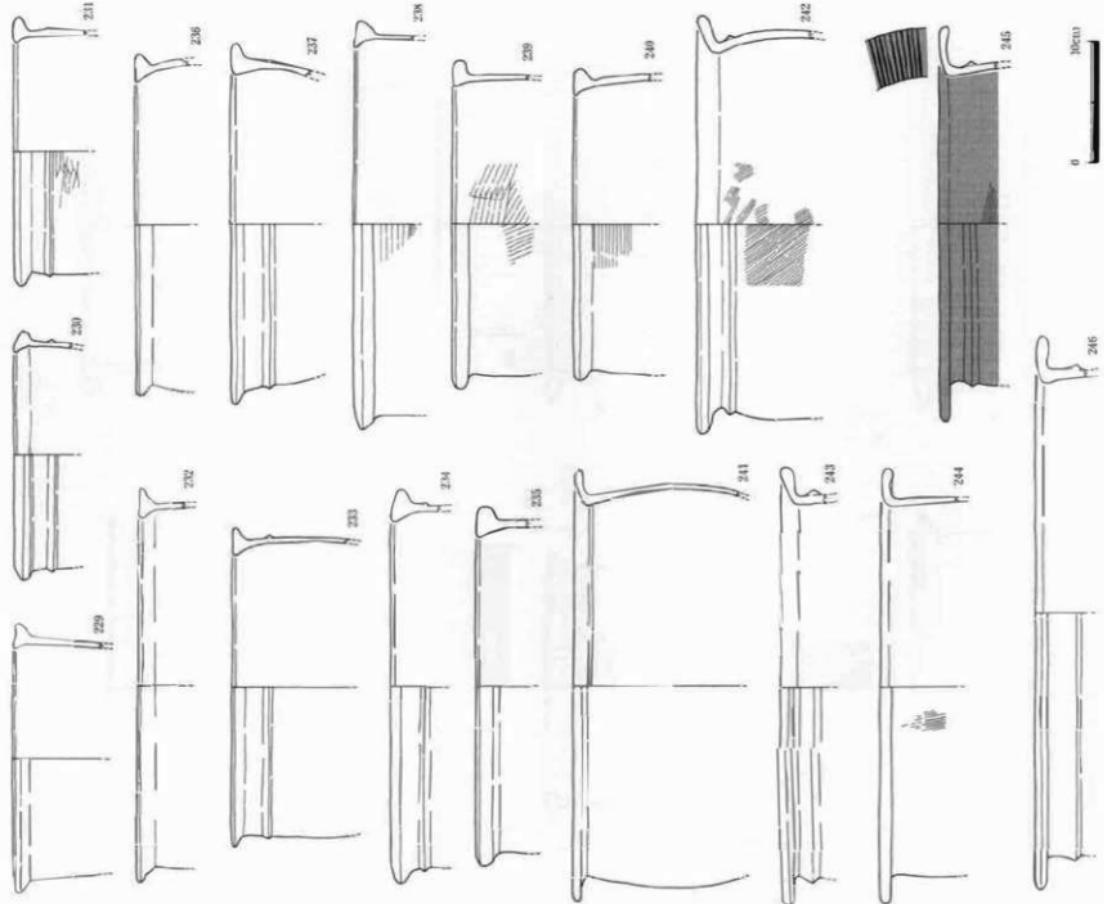


Fig. 62 SX1000出土遺物 (12) (S=1/4)

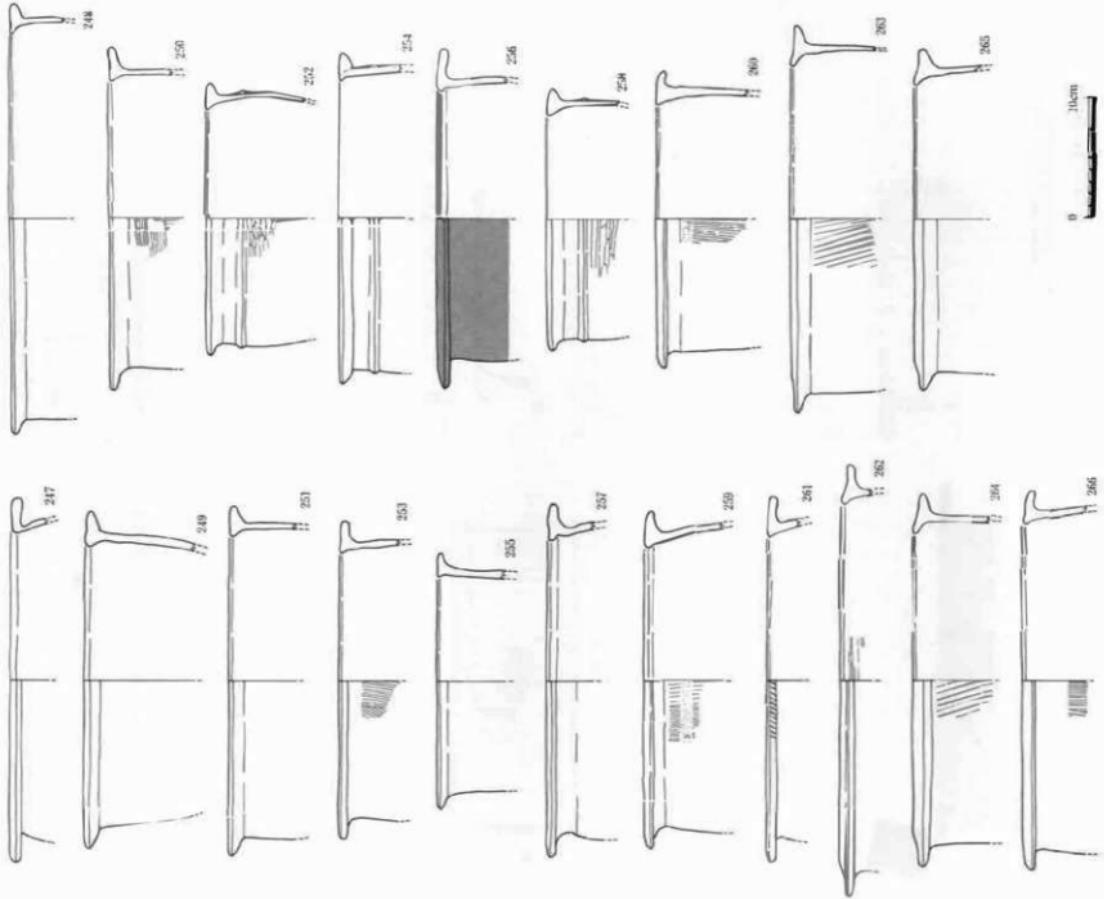


Fig. 63 SX100出土遺物 (13) (S = 1/1)

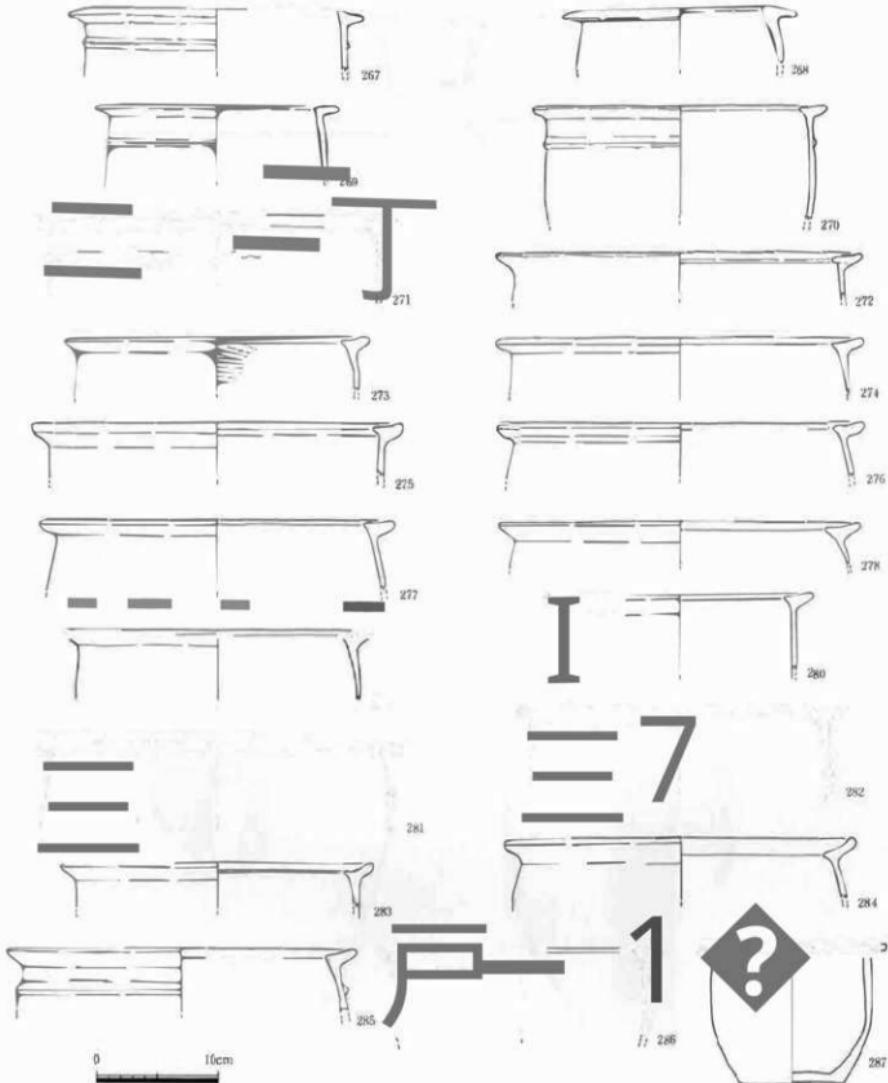


Fig. 84 SX100出土遺物 (14) (S=1/4)

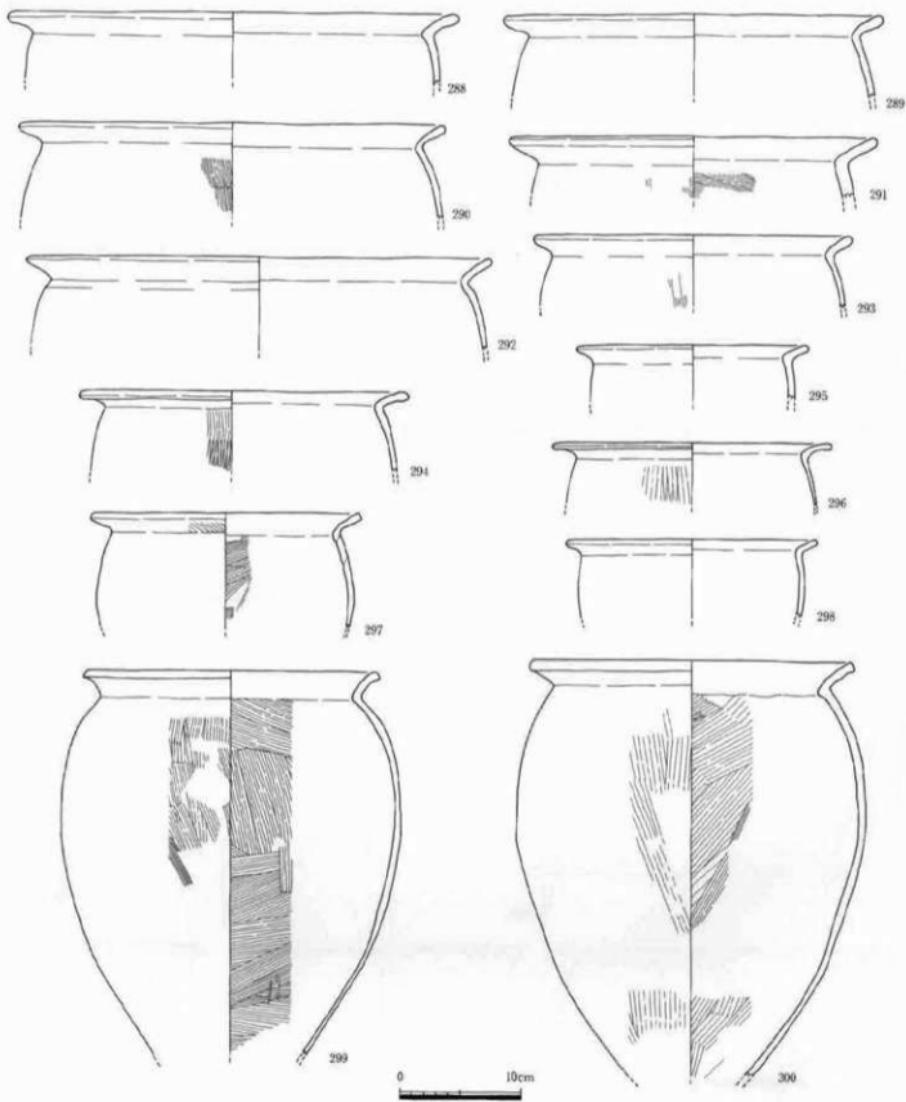


Fig.65 SX100出土遺物 (15) (S = 1/4)

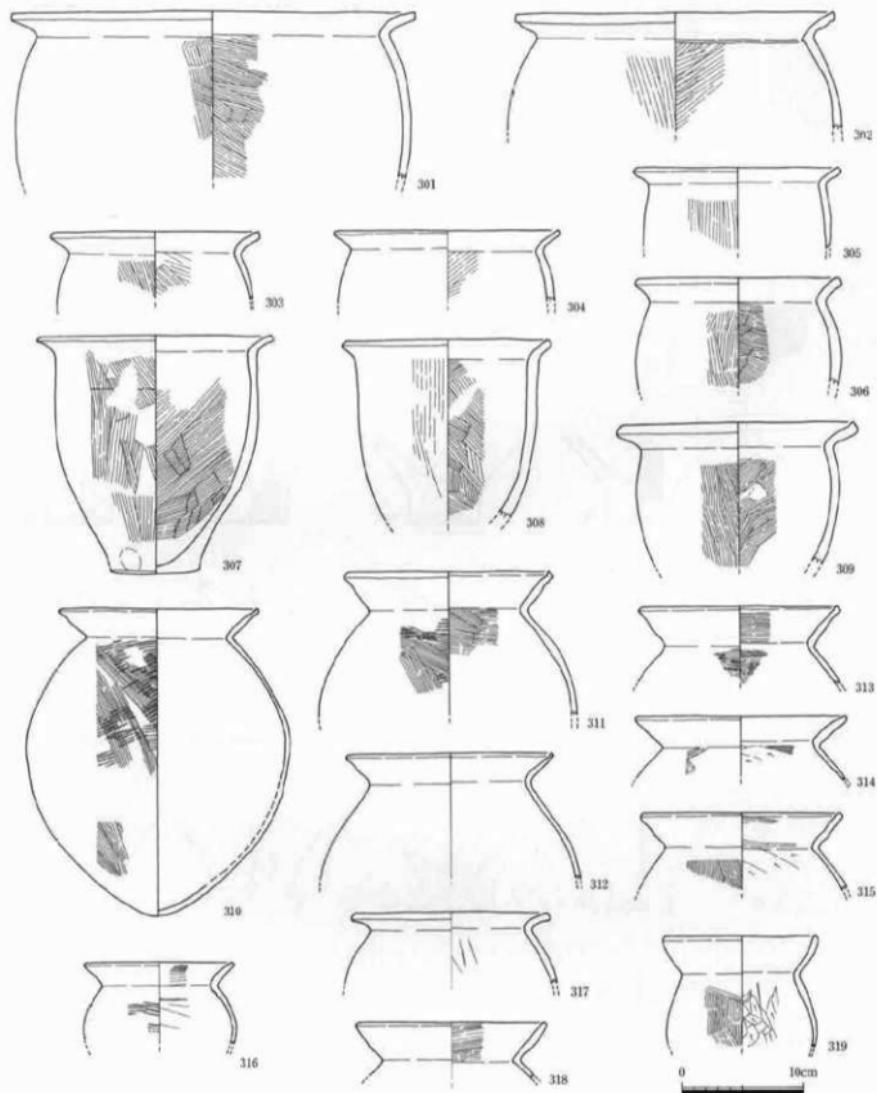


Fig. 66 SX100出土遺物 (16) (S=1/4)

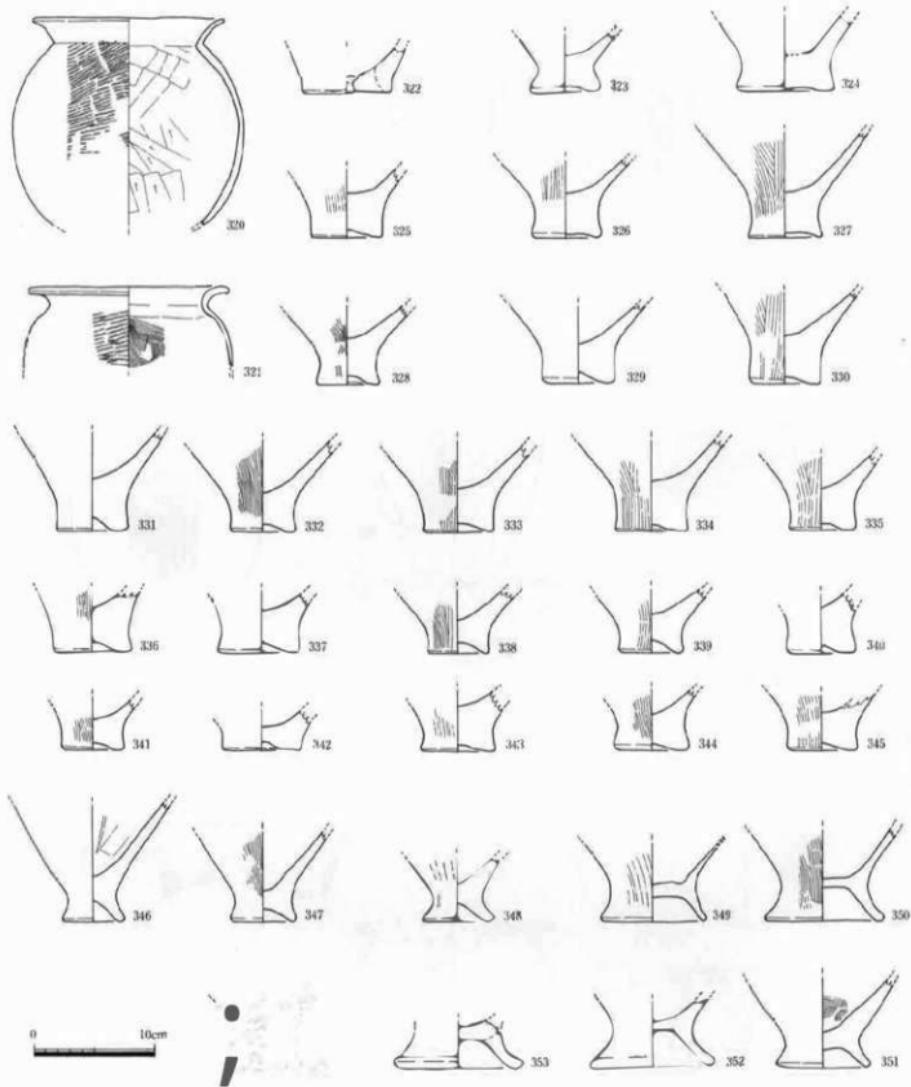


Fig. 67 SX100出土遺物 (17) (S=1/4)

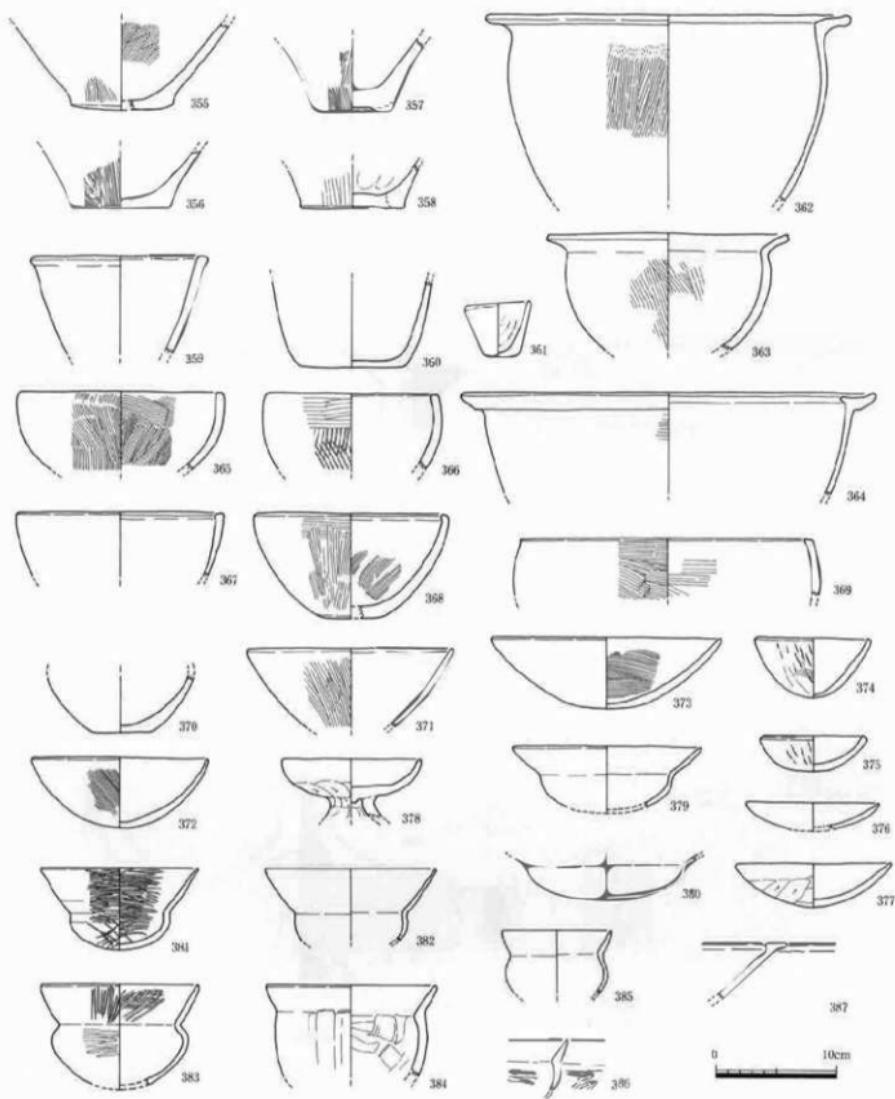


Fig. 68 SX100出土遺物 (18) (S=1/4)

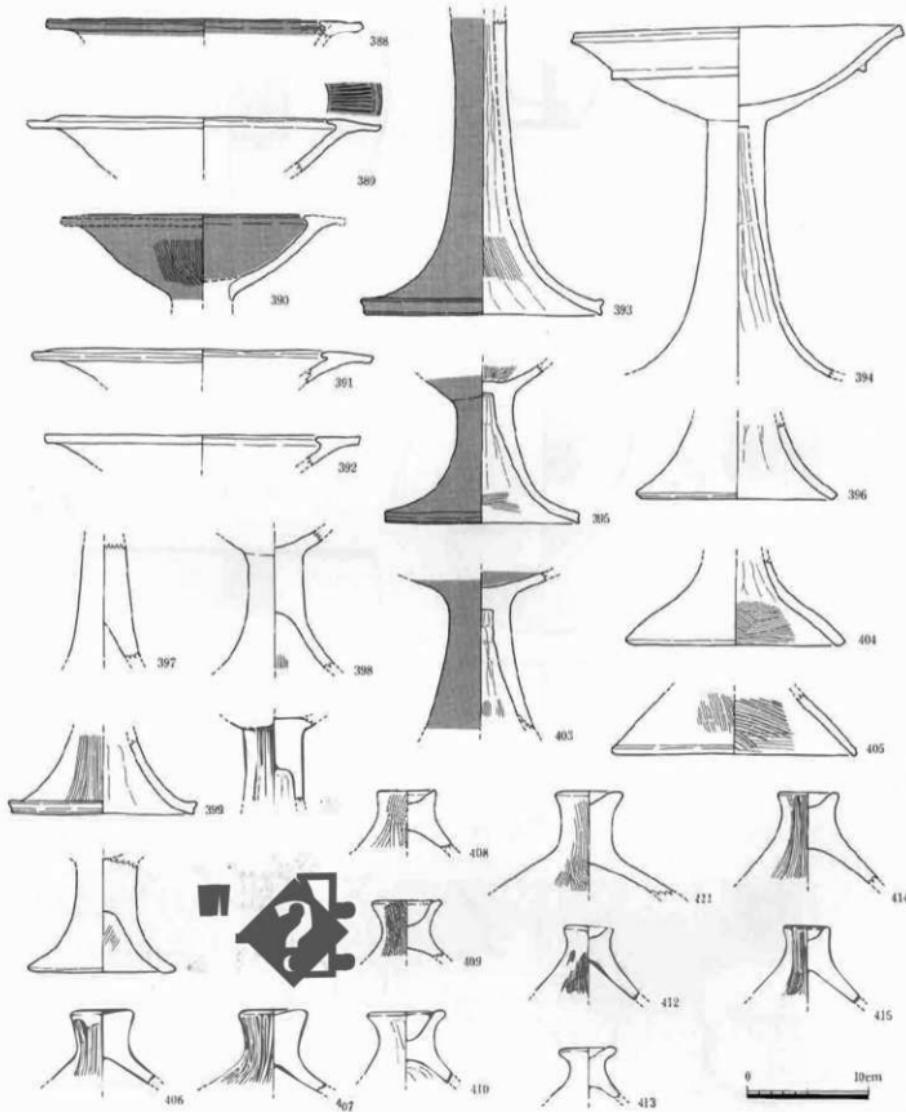


Fig. 69 SX100出土遺物 (19) (S=1/4)

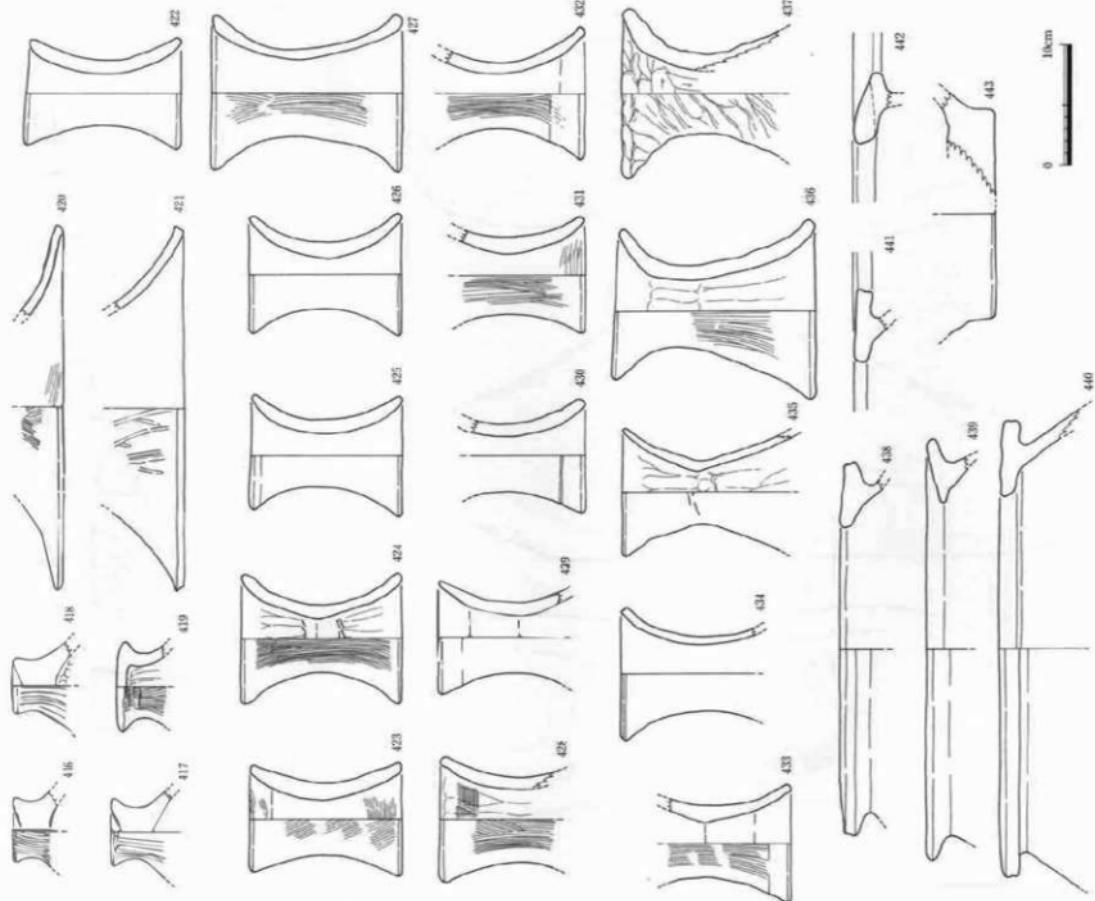


Fig. 70 SX100出土遺物 (20) (S=1/4)



Fig. 71 SX100出土遺物 (21) ($S=1/4 \cdot 1/3$)

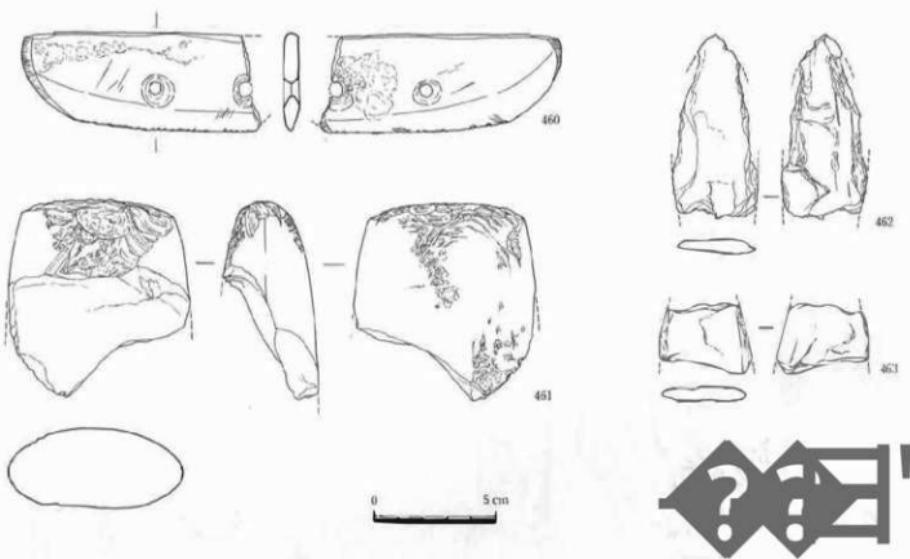


Fig.72 SX100出土遺物 (22) (S=1/2)

322は底部を焼成後穿孔。323~348は上げ底のもので、弥生前期後半~弥生中期。349~353は脚付きのもので、弥生後期前半の肥後地方からのものか。354は弥生後期前半の南筑後地方に見られる中実高脚のものである。355~358は弥生後期のものである。

359~380は鉢である。この内361は手づくりの、364は肥後系の反り返った口縁を有している。377は底部ケズリ。378は脚付きのものである。

381~386は辻である。

387~405は高环である。388、393、395は丹塗り、389は暗文が施され、丹塗りの痕跡が見られる。

406~421は蓋である。406~418は中実、419は中空のつまみ部分である。

422~437は器台である。422~433は弥生中期、434~437は弥生後期。

458~464は大型壺(甕)の小片である。

445~458は土製の特殊品である。445は小型の壺で、表面を沈線文で飾っている。446は一対の円形浮文を有する壺の小片である。SDI30-98と同時期か。447~448は無形壺もしくは鉢のミニチュアである。449~451は鉢のミニチュアで、451は脚付きである。452は高环のミニチュアの軸部である。453はⅢのミニチュアか。454は沈線で飾られた土器の小片である。455は鉢もしくはジョッキ型の土器である。456は表面に丹塗りの痕跡の残る土器片である。457は把手で丹塗りが施されている。458は粘土塊である。

459~464は石製品である。459は大型の砥石。460は中期~後期にかけての石包丁で輝緑凝灰岩製。461は磨製石斧の基部破片。462~463は片岩製の石剣破片。464は片刃石斧である。

465~468は木製品である。出土木には伐採痕が残るもののが多かったが、ここでは加工を施されたものだけを紹介する。465は木杭である。466~468は加工木で、いずれも組み合わせるための切り込みが施

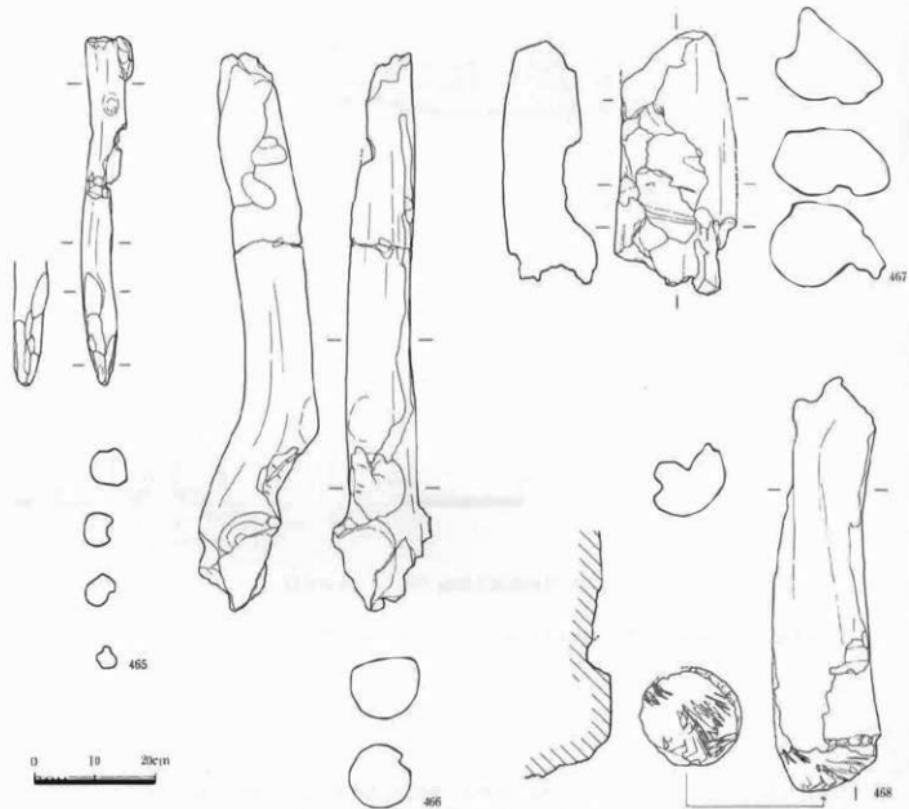


Fig. 73 SX100出土遺物 (23) (S = 1/8)

されている。建築部材か。469はイヌガヤ製の柄である。別物、柾目で、細かなノミ痕を持つ。470は桃の種子であるが、両側にエグリを持つ。小動物によるものか人為的な加工であるかは不明だが、浮子として利用可能なため掲載した。このような桃の種子は他にも数点出土している。

SD105出土遺物

I層出土遺物 (Fig. 75-1~4)

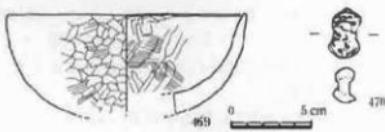


Fig. 74 SX100出土遺物 (24) (S = 1/3)

1～2は弥生土器の壺である。1は弥生後期。3は弥生土器の壺である。弥生中期。4は弥生土器の高壺である。弥生後期。

Ⅲ層出土遺物 (Fig. 75-5)

5は亀ノ甲タイプの壺である。弥生中期前半。

水口状遺構出土遺物 (Fig. 75-6～8)

6～7は弥生土器の壺である。弥生中期。8は砂岩製の砥石である。

その他の出土遺物 (Fig. 75-9～20)

9～10は弥生土器の壺で、9は丹塗りが施されている。11～20は弥生土器の壺である。11～16、20は弥生中期、17～19は弥生後期である。

SX150出土遺物

1層出土遺物 (Fig. 76～77, PL. 15-1)

1～2は縄文土器の深鉢で、2は内外面に刺突文が施されている。後期。3～12は弥生土器の壺で、弥生前期後半～中期初頭にかけてのものである。13は土師質の壺で、時期不明。14～40は弥生土器の壺で、15は弥生前期前半、21は弥生中期後半、36は弥生後期、それ以外のものは弥生前期後半のものである。41は蓋。42はミニチュアの鉢。43は土製の幼獣車である。44は砂岩製の砥石である。

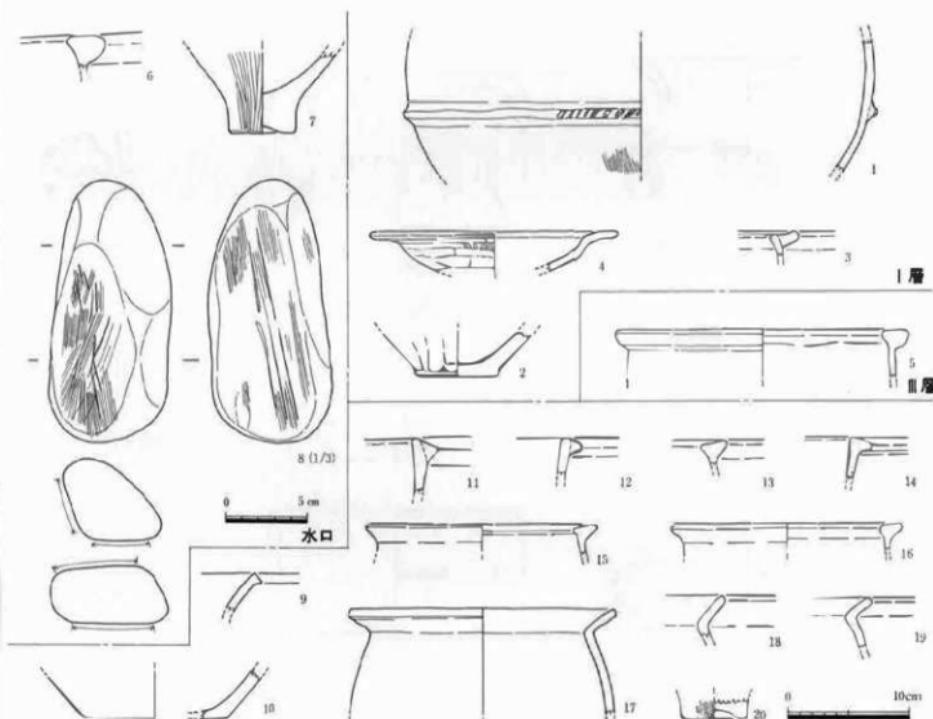


Fig. 75 SD105出土遺物 (S=1/4・1/3)

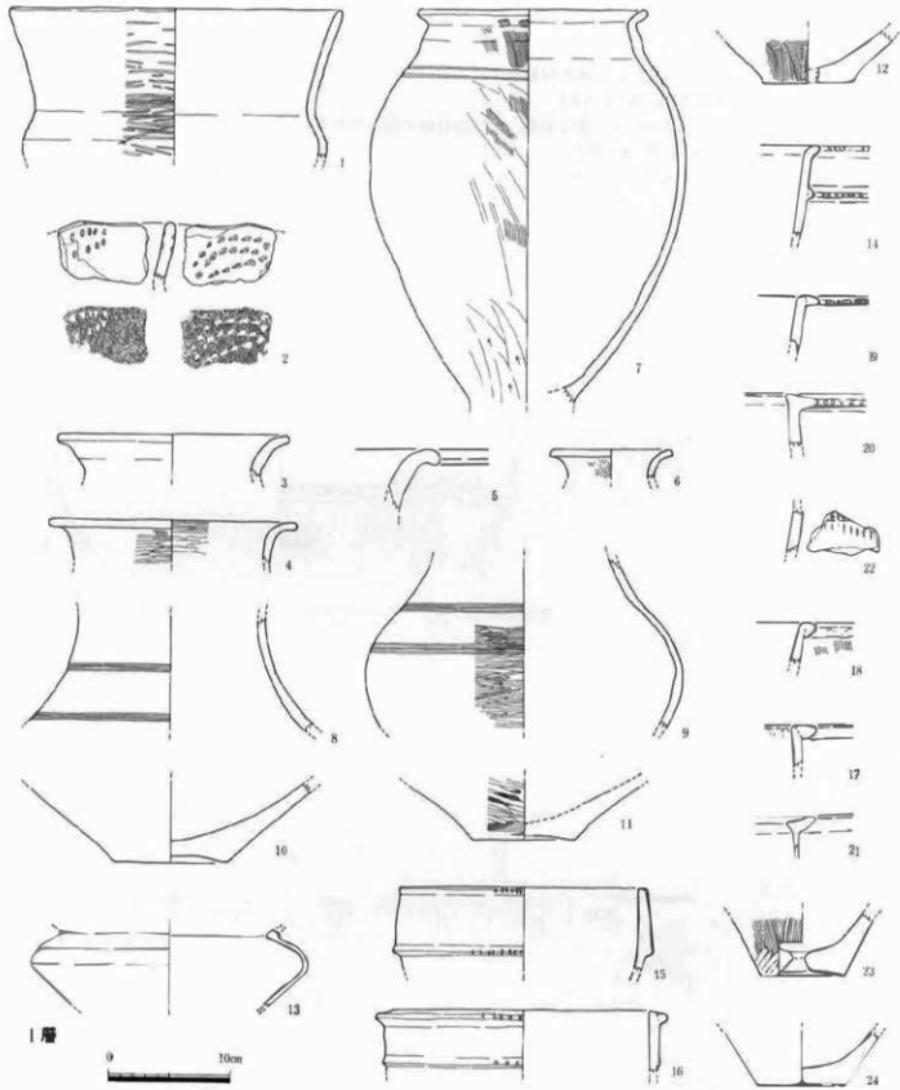


Fig.76 SX150出土遺物 (1) (S=1/4)

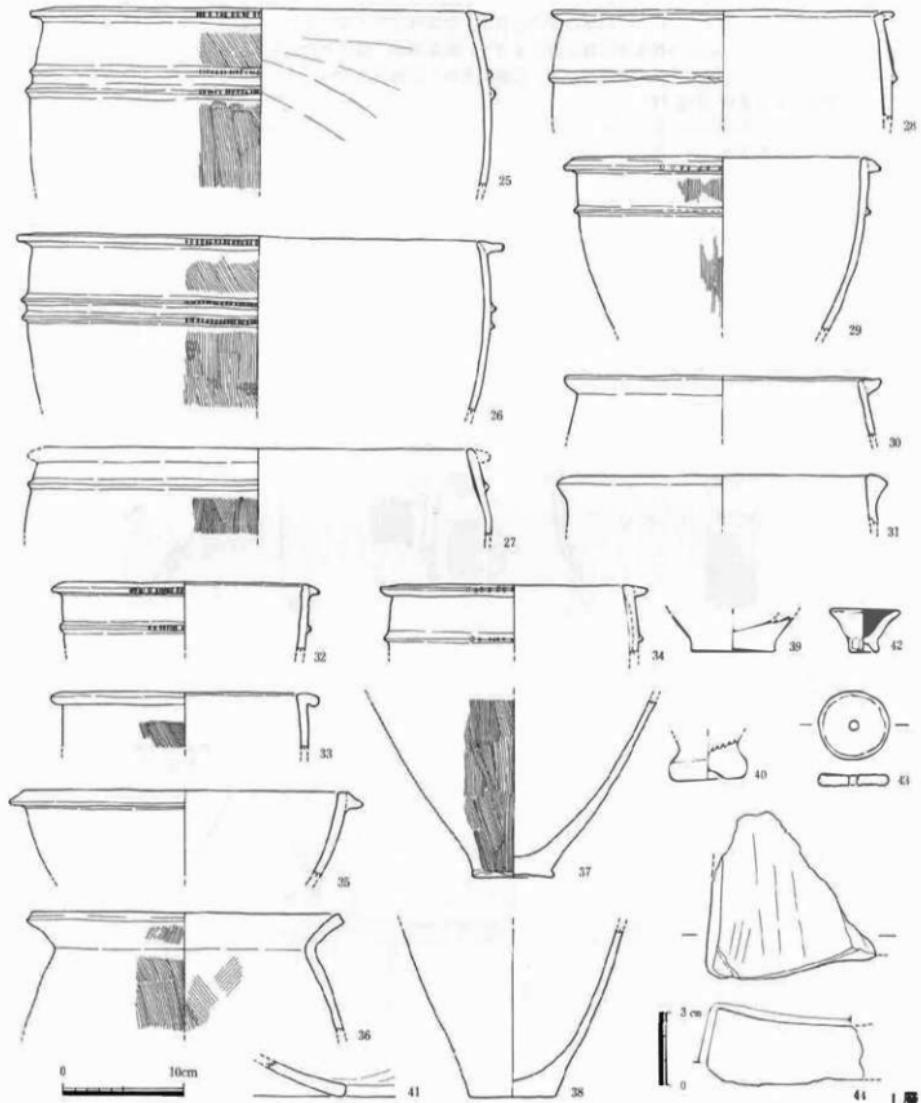


Fig. 77 SX150出土遺物 (2) ($S=1/4 \times 1/2$)

Ⅱ層出土遺物 (Fig. 78)

45は弥生土器の壺の口縁で、内面に突帯を有す。中國地方の土器の影響か。弥生前期。46~47は弥生土器の壺である。46は口唇部と突帯に刻目を有す。弥生前期。47は小片であり、時期の特定にはいたらない。48は弥生土器の高环の脚部細片で、外面に丹塗りが施されている。

底部直上出土遺物 (Fig. 78)

49は弥生土器の高環の小片である。

その他の出土遺物 (Fig. 78~81、PL. 15-2)

50~52は縄文土器である。50~51は縄文後期の鐘ヶ崎式の鉢の小片、52は晩期の壺の口縁か。53~78は弥生土器の壺である。53~54は板付系の口縁で前期、55~61は城ノ越系の口縁で前期後半~中期前半、67は二重口縁壺の口縁で後期のものである。79~118は弥生土器の壺である。79は夜白系の口縁、

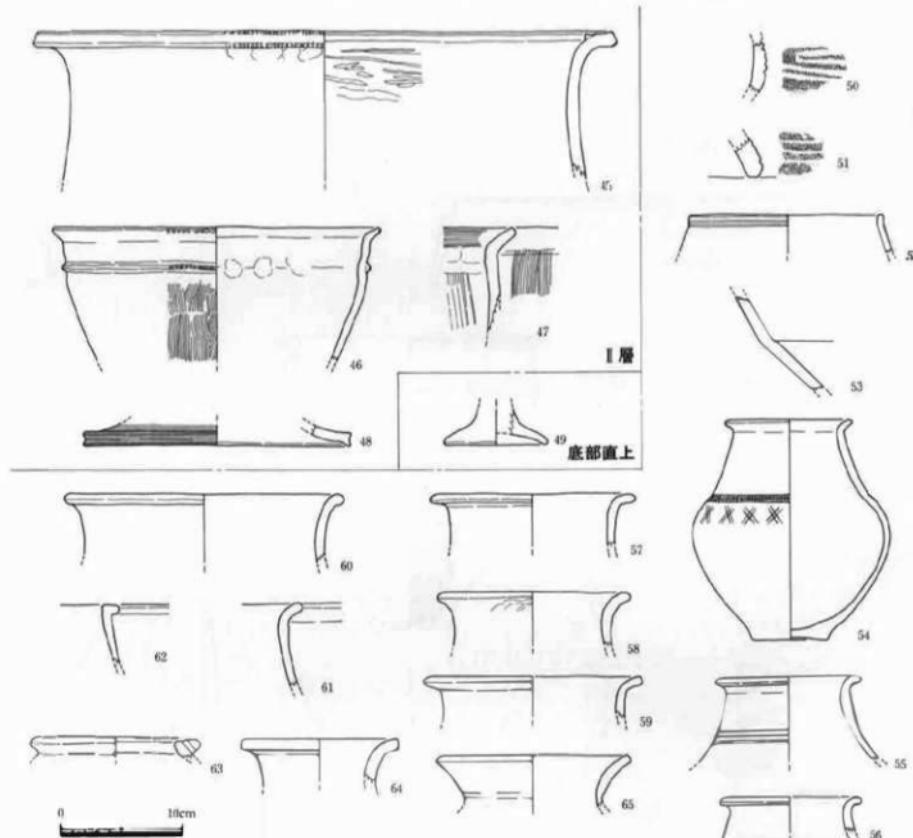


Fig. 78 SX150出土遺物 (3) (S = 1/4)

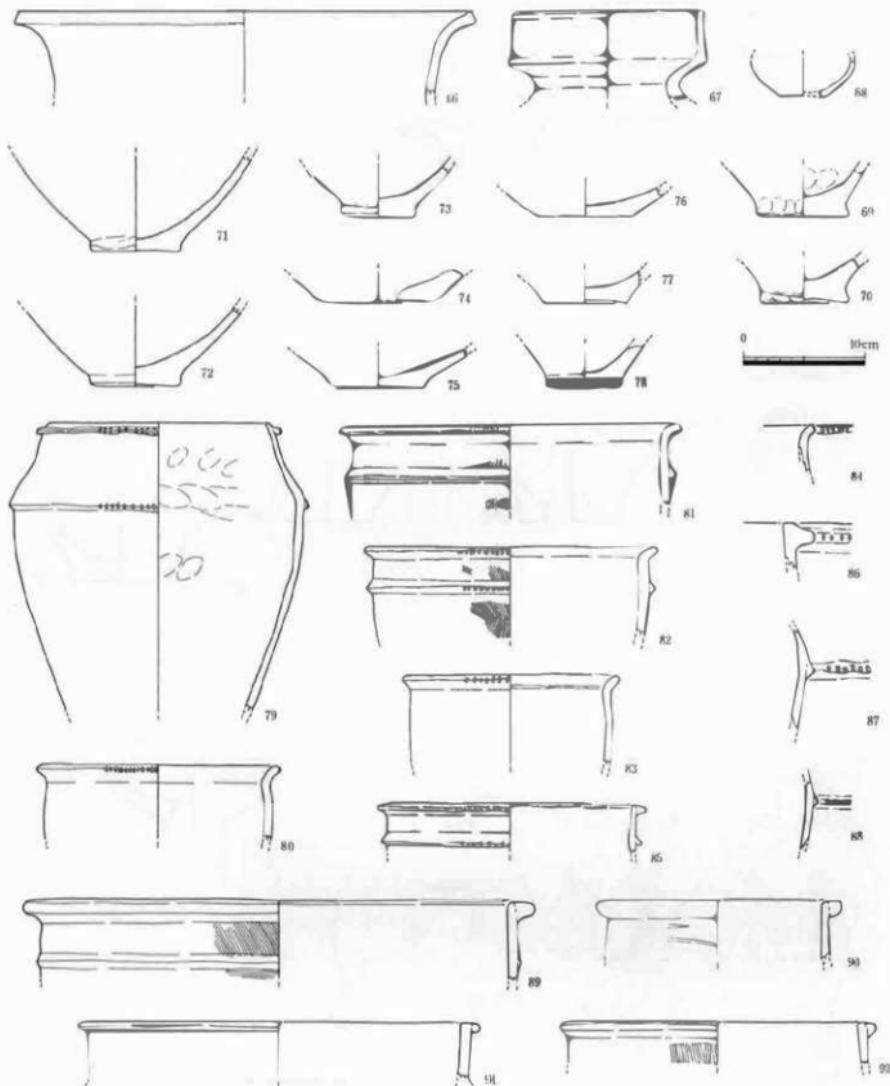


Fig. 79 SX150出土遺物 (4) (S=1/4)

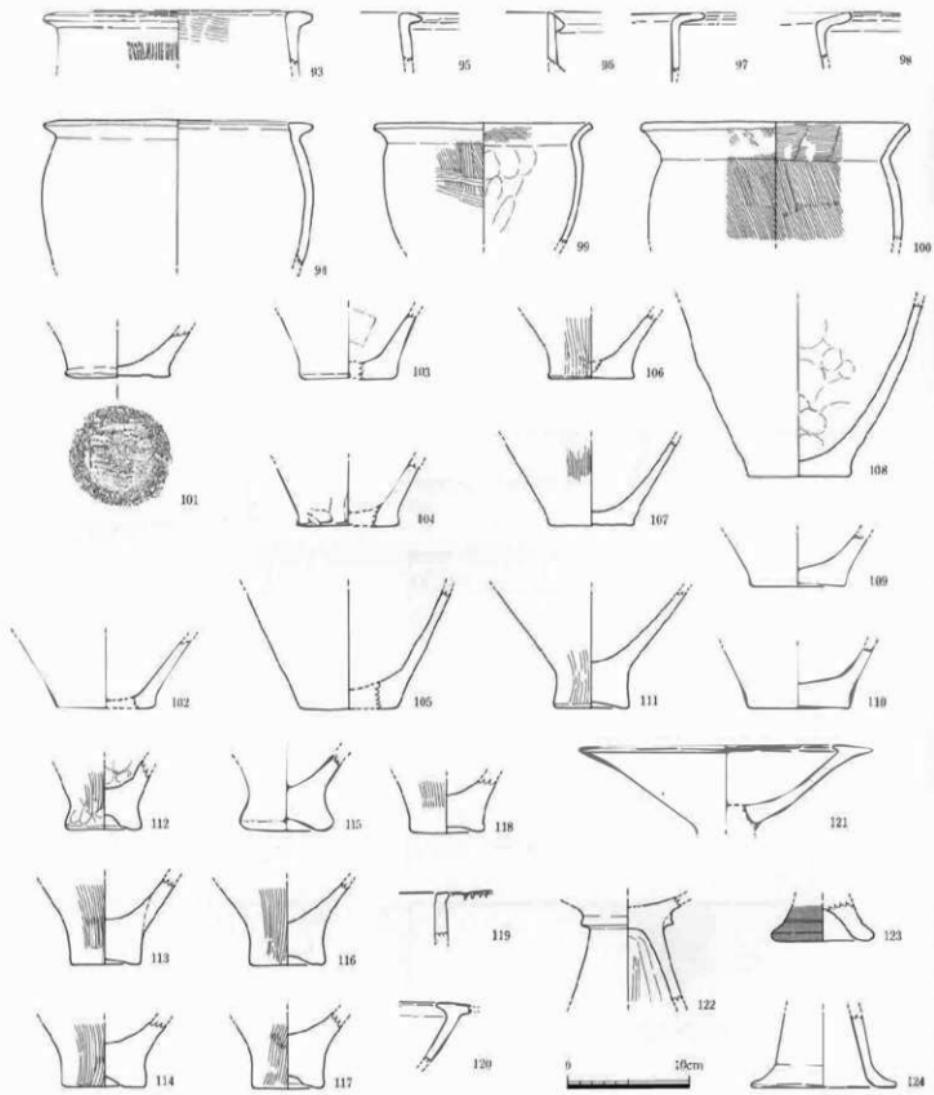


Fig. 80 SX150出土遺物 (5) (S=1/4)

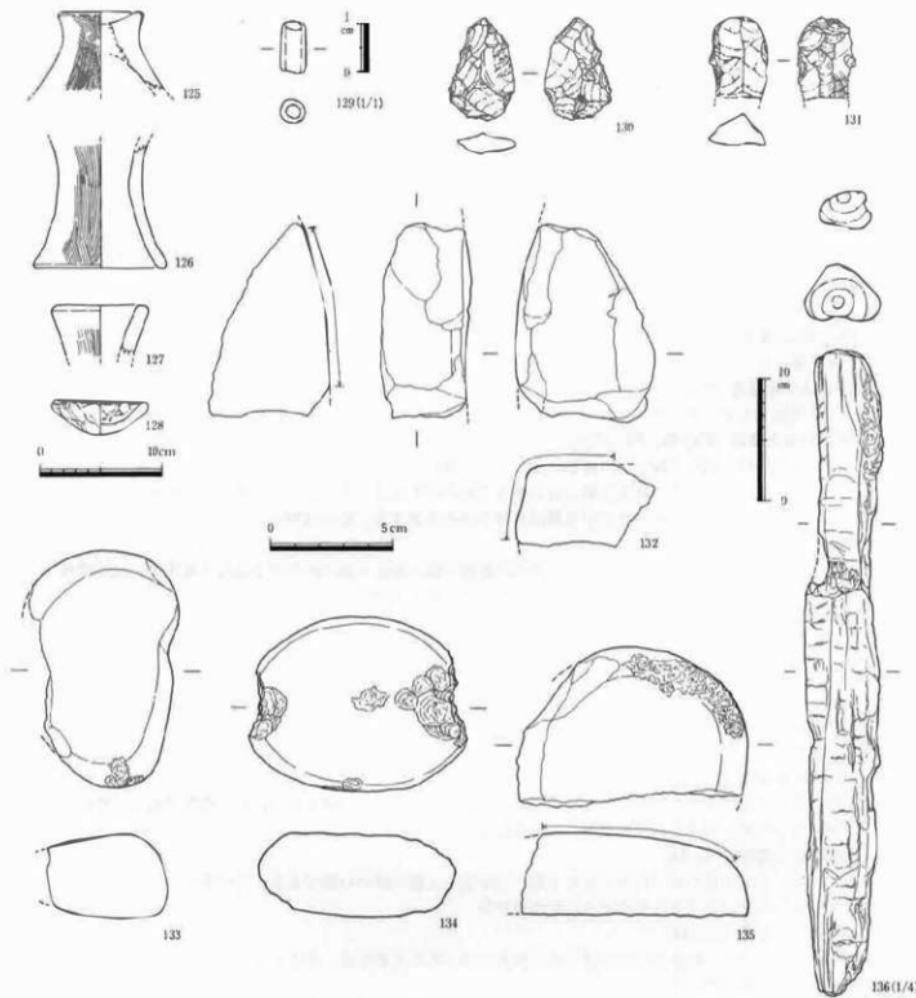


Fig. 81 SX150出土遺物 (6) ($S = 1/4 \cdot 1/1 \cdot 1/2$)

80～84は板付系の口縁でともに弥生前期、85～86、89～96は亀ノ甲系の口縁で前期後半～中期前半、97～98は城ノ越系で中期前半、99～100は高三瀬式で後期のものである。甕の底部は大きく平底(101～108)と上げ底(109～118)に分かれる。101の底部には製作時に使われた敷物らしき痕跡が残る。119

は弥生土器の鉢と思われる小片で、口唇部に刻目を有している。120～124は弥生土器の高杯で、123は外面に舟彫りが施されている。125は弥生土器の蓋の小片である。126～127は弥生土器の器台である。128はミニチュアの手づくね鉢である。129は碧玉製の管玉で摩滅が激しい。130は石鏡の木製品でサヌカイト製。131は二次加工剝片でサヌカイト製。132は砾石で、風化が激しい。砂岩製。133は安山岩製の石錐か。134は安山岩製の石錐である。135は安山岩製の磨石である。136は木製の枕である。

柱穴群出土遺物

SP102出土遺物 (Fig.82)

1～2は弥生土器の甕の口縁である。2は裏込め土からの出土。ともに弥生中期後半。

SP108出土遺物 (Fig.82)

3は弥生土器の甕の口縁である。弥生中期。4は柱根で痛みが激しい。5は柱根の下から出土した木材である。柱根断面が斜めとなるため、安定させるために入れたものか。

SP109出土遺物 (Fig.82)

6は弥生土器の鉢の口縁部小片である。弥生後期か。

SP154出土遺物 (Fig.82)

7は亀ノ甲タイプの甕の口縁、8は城ノ越式の甕の口縁である。共に弥生中期前半。

SP140b出土遺物 (Fig.82, PL.16-1)

9は礎板である。断面カマボコ状で中央側面に切り込みを持つ。弥生後期か。

SP140c出土遺物 (Fig.82, PL.16-2)

12は弥生土器の甕の口縁で、口縁部にはわずかに刻目が残る。弥生前期か。10は柱根で、周囲は面取りを施された痕跡があり、底面に組み合わせるための切り込みを有する。11は礎板で、底面は「ハ」の字状になるが、断面カマボコ状で中央側面に切り込みを有する。弥生後期か。

SP140e出土遺物 (Fig.83)

13は柱根で、周囲は面取りを施され、底部は礎板と組み合わせるための切り込みを有する。14は礎板で、断面カマボコ状で中央側面に切り込みを有する。弥生後期か。

SP140f出土遺物 (Fig.83, PL.16-3)

15は弥生土器の短頸甕で、外面および内面上部に舟彫りが施されている。16は弥生土器の甕の口縁部小片である。共に弥生中期。17は礎板で、底面が「V」字状になるが、断面カマボコ状で中央に切り込みを有する。弥生後期か。

SP147出土遺物 (Fig.83)

18は礎板で、半裁された木材の上部を平坦に加工している。

SP198出土遺物 (Fig.84)

19は弥生土器の甕の小破片である。20は弥生土器のミニチュアの鉢である。21は礎板である。断面カマボコ状で中央に切り込みを有する。弥生後期か。

SP202出土遺物 (Fig.84)

22～23は弥生土器の甕の口縁で弥生中期。24は弥生土器の鉢の口縁である。25は礎板である。断面カマボコ状で中央に切り込みを有する。弥生後期か。

SP203出土遺物 (Fig.84)

26は礎板である。断面カマボコ状で中央側面に切り込みを有する。弥生後期か。

SP211出土遺物 (Fig.84)

27は弥生土器の短頸甕の口縁である。28は弥生土器の甕の脚部で、弥生後期。29は弥生土器の鉢の口縁部小片である。礎板は安全上取り上げることはできなかったが、断面カマボコ上で中央側面に切り込みが施されていた。弥生後期か。

SP217出土遺物 (Fig.84)

30は礎板である。枝打ちされた太めの枝をそのまま利用しており、加工を施した痕跡は特に見受けられない。

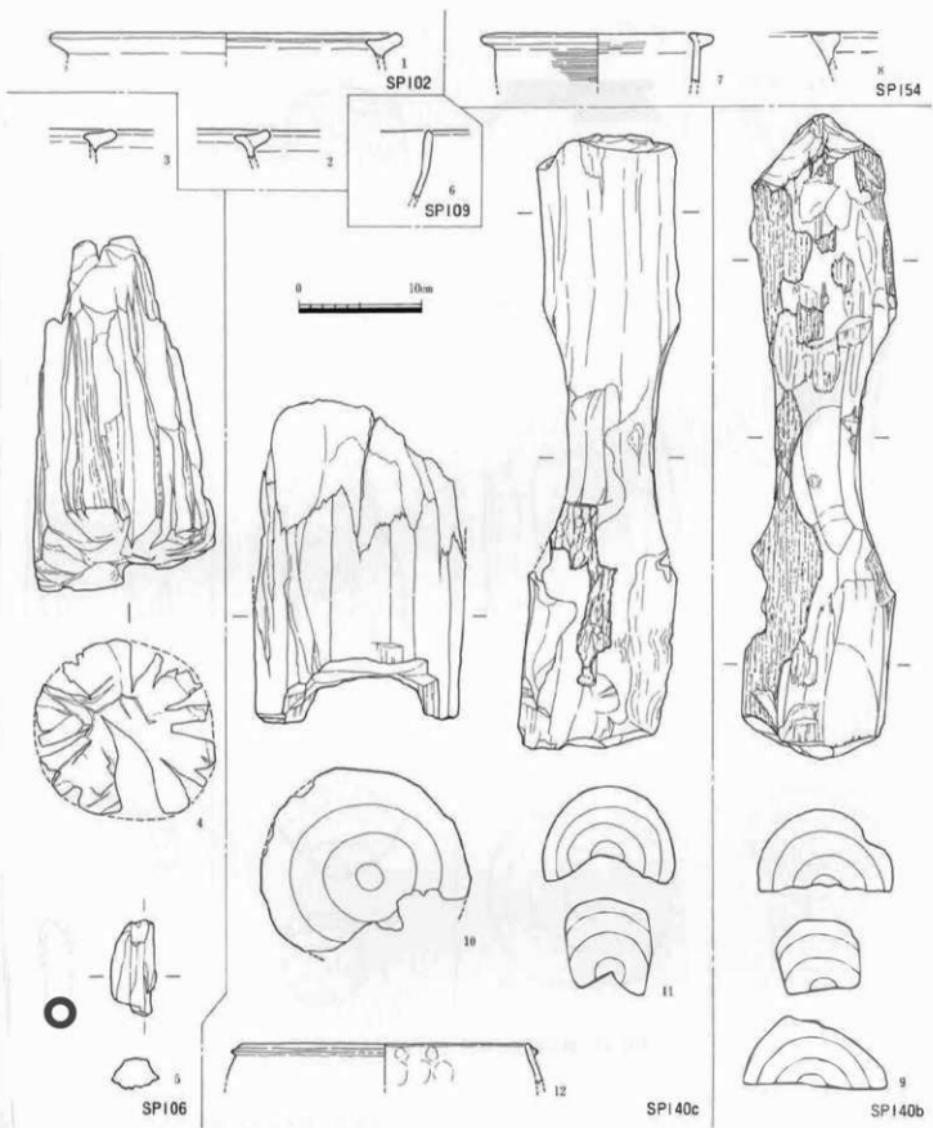


Fig. 82 柱穴群出土遺物 (1) (S=1/4)

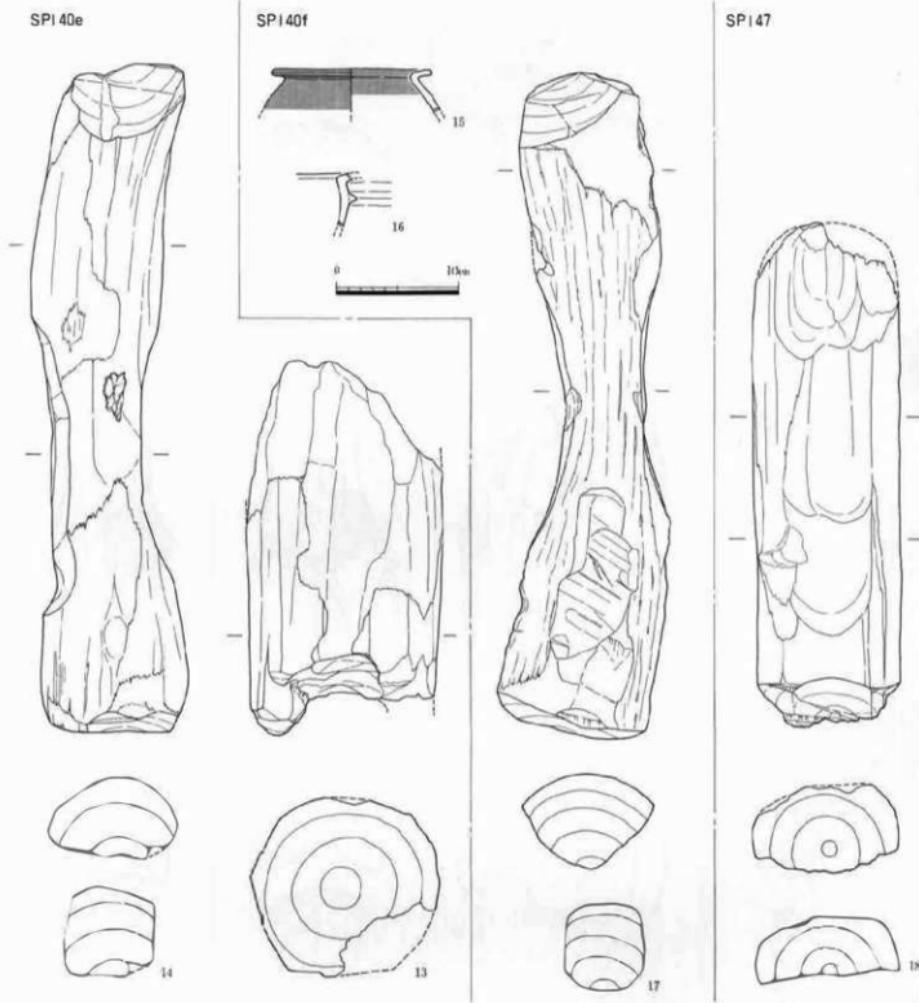


Fig. 83 柱穴群出土遺物 (2) (S=1/4)

SP218出土遺物 (Fig. 84)

31は礎板である。柱根と組み合わせるために中央上面および両側面に切り込みが施されている。弥生後期か。

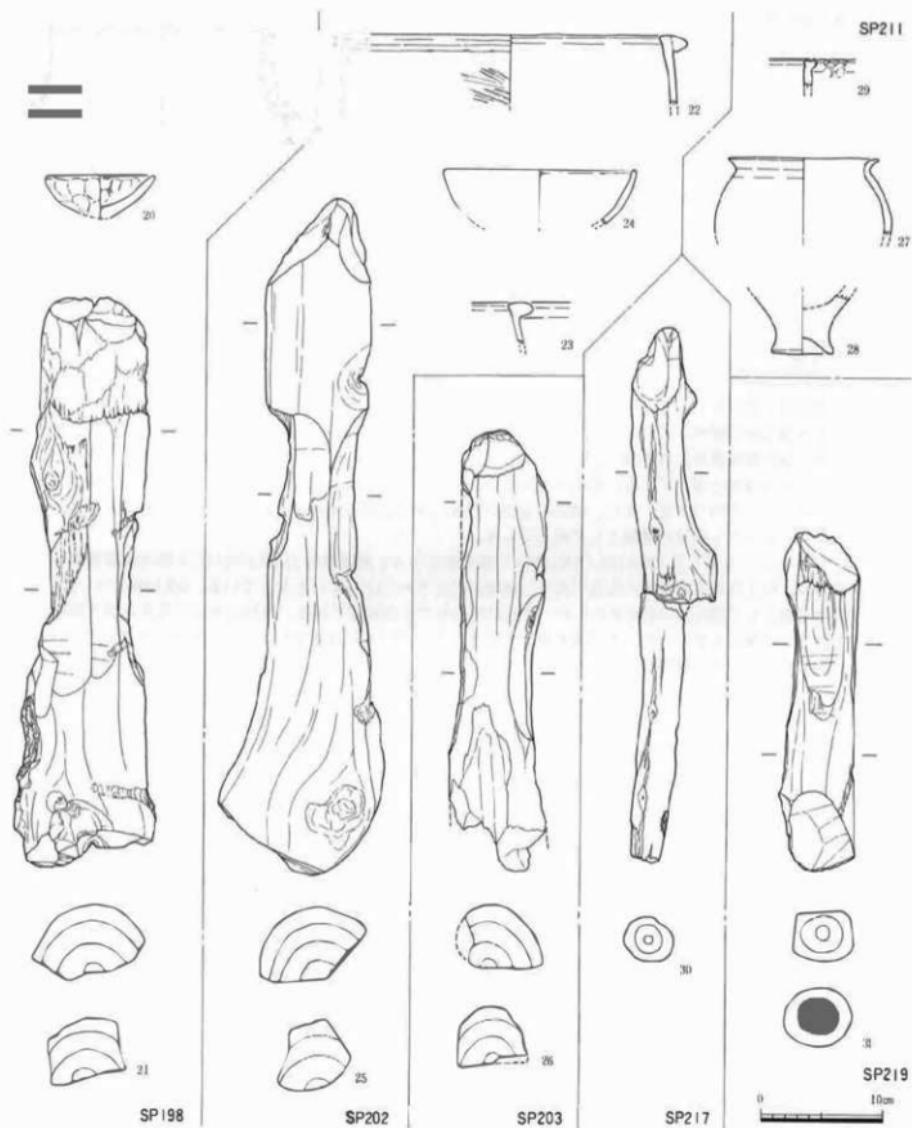


Fig. 84 柱穴群出土遺物 (3) (S=1/4)

遺物包含層

今回の調査区には遺構面上に多くの遺物を含んだ包含層が確認されている。遺物の報告は今回は出来ないが、どのような遺物を採取したのかを報告しておく。

734-735工区

主に中期の弦土器、古式土師器、石製品を採取した。特に土師器にはショッキ型土器の地手と思われる破片が見られた。

735-736工区

主に中期～後期の弦土器、古式土師器、石製品などを採集した。弦生土器は時期幅は広く、縄文時代と見えそうなものも含まれる。石製品には石劍などが見られた。

736-737工区

主に弦生土器、古式土師器、石製品などを採集した。弦生土器は時期幅は広く、縄文時代と見えそうなものも含まれる。石製品には石劍などが見られた。

5. 小結

734-737工区の調査では、調査前に想定されていたよりも多くの成果を得ることが出来たが、いくつかの課題も残されている。
組み合わせ式焼板はSX150周辺の、特に湿度の多い東側を中心に確認することが出来た。これは「西都第2地区遺跡群II」の考察で詳しく述べられており、津島九反神遺跡のものも同時的にはこれと同じく弥生時代後期とおさえている。建物の規模を確認するために北側を試掘した。切り合いが多く、埴物群の規模などは不明である。また、焼板の有無が遺構の築造年代の若からくるのか、地盤の湿度、地軸の若からくるのかも今後の課題として残っている。

今回解剖遺構としてSX100、SX150の2基を報告した。時期的にはSX150は弥生時代前期後半、SX100は弥生時代中期後半の築造であり、同時に利用されてはいないと考えている。SX100については水槽設としてSD105が想定されたが、これ以外のものは未確認である。周辺において弥生水田を確認したという報告もないため、水の流れがどのようにになっているかは想定にくい。今後、水をどのように利用していくかを確認することが残されている。

第3節 737-738工区の調査

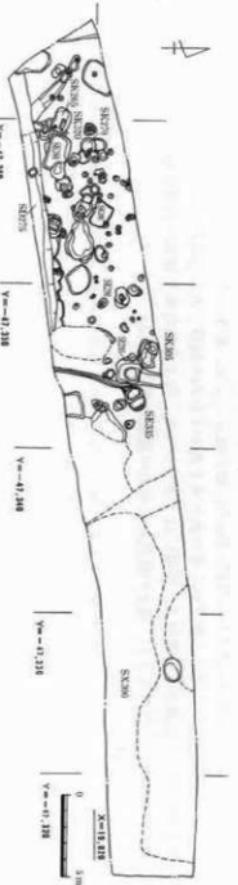


Fig. 85 737-738工区 全体図 ($S=1/300$)

1. 総要

737-738工区は、筑後市大字津島字三ヶ町に所在する。調査面積は約300m²である。調査は全体を遺構突出部まで掘り下げ、東側の掘り込み部分(SX300)については、馬頭の帶合上ある程度まで瓦礫により振り下げてから調査を行なった。調査の結果、中世と思われる井戸2基とこれらに附隨する溝1条、弥生時代～古墳時代初期の墓1条、弥生時代の土器多数、時期不明の落し穴1基、ピット多数を確認した。調査は12月11日から始められ、12月27日にこれを終了した。

2. 挖出遺構
- 井戸

SE275



SE335

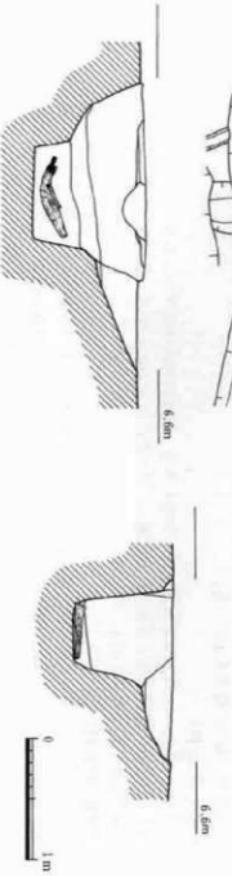


Fig. 86 SE295・335 ($S=1/40$)

SE295 (Fig. 86、PL.17-2)

CR55グリットから確認された井戸である。平面形は幅東西約1.3m、南北約1.6mの隅丸方形。上部は描鉢状に広がり、約0.6mほどから径約0.8mの円形の端となる。全体の深さは約0.9mである。北東部のコーナーから延びる溝は、井戸から溢れ出た水を逃がすための施設である可能性が高い。北側に接続する溝については調査区の関係上、明確にはできなかった。出土遺物は弥生後期～古墳初頭の土器・石器、時期不明の木材であるが、埋土の状況から中世の遺構と考えられる。

SE335 (Fig. 86)

CQ55～CR55グリットにかけて検出された土壙で、井戸になる可能性が高い。平面形は東北～南西間で約1.5m、北西～南東間で約1.2mの隅丸長方形。断面形は上方にわずかに開き、東側は約0.2mほどのテラス状となる。全体の深さは約0.8mである。南側に接続する溝との関係は明確に出来なかった。出土遺物には弥生後期の土器、時期不明の木材がある。埋土の状況から中世の遺構と考えられる。

溝状遺構

SD275 (Fig. 85)

CS53～CX53グリットから検出された遺構で、736-737工区のSD130と一連のものとも考えられる。約15.8m分を確認した。東側は擾乱により破壊され、南側・西側は調査区外へと続いている。断面形は逆台形状となり、深さは約0.5mを測る。SD130のような二段掘りの痕跡は認められなかった。出土遺物は弥生後期～古墳初頭の土器を出土している。

土壙

SK265 (Fig. 87、PL.18-1)

CW53～54グリットから検出された土壙で、東側のSK320を切っている。隅丸長方形の平面プランを有し、長軸約1.5m、短軸約1.0m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN-77°Wを測る。埋土は不規則的な埋没をしており、3・4層中に若干の炭化物を含み、さらに3層には焼土が見られた。遺構壁面には焼かれた痕跡は認められない。遺物は弥生中期前半の土器片、サヌカイト製のスクレイバーを出土した。

SK266 (Fig. 87)

CW53～CW54グリットから検出された土壙で、東側のSK285に切れられ、西側のSK320に切られている。基本的には隅丸長方形の平面プランを有し、長軸約2.1m、短軸約1.5m、深さ約0.35m。主軸の傾きはN-68°Wを測る。埋土は自然埋没であり、4層中に黄茶色の焼土を確認したが、遺構壁面には焼かれた痕跡は認められない。出土遺物は弥生中期前半の土器片、サヌカイト製のスクレイバーを出土した。

SK280 (Fig. 87、PL.18-2)

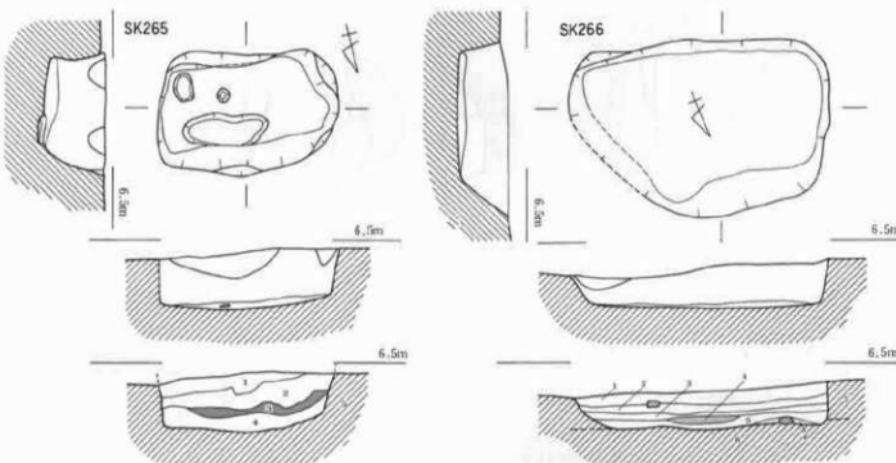
CU54グリットから検出された土壙である。隅丸長方形の平面プランを有し断面形は南側のみフ拉斯コ状となる。法量は長軸約1.5m、短軸約1.05m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-61°Wを測る。埋土は自然埋没であり、4層中に焼土を確認したが、遺構壁面には焼かれた痕跡は認められない。出土遺物は細文土器片、弥生土器片を出土した。

SK270 (Fig. 88)

CU54～CV54グリットから検出された土壙である。ほぼ円形の平面プランを有し、径約0.8～0.95m、深さ約0.35m。主軸の傾きはN-53°Eを測る。埋土的には人為的な埋没と思われる。遺物は弥生前期～中期前半までの土器片を出土している。

SK305 (Fig. 88)

CR55～CS55グリットから検出された土壙で、南東側のコーナーをSK295に切られている。隅丸長方形の平面プランを有するが、断面は北西側のコーナーに向かって描鉢状に落ち込んでゆく。北西コーナー一部はピット状に一段低くなっている。法量は長軸約1.7m、短軸約1.1m、深さは北西コーナー部分で約0.4m。主軸の傾きはN-77°Wを測る。埋土は切り合いの可能性を示すものではなく、人為的な埋没と思われる。出土遺物は弥生土器の小片がある。



- SK265**
- I-1 暗灰色粘質土 (地山土多く混入)
 - 2 黒灰色粘質土 (地山土多量混入)
 - II-3 赤褐色粘質土 (炭化物少量、燒土多量に混入)
 - III-4 黑色粘質土 (地山ブロック混入)
 - IV-5 白灰色シルト (地山)

- SK266**
- I-1 淡茶色粘質土 (7層土混入)
 - 2 黑茶色粘質土 (1層より茶色は頃、7層土混入)
 - 3 深茶色粘質土 (7層土混入)
 - II-4 深茶色粘質土 (黄茶色地土多く混入)
 - III-5 黄褐色粘質土 (7層土混入)
 - 6 細灰白色粘質土 (7層土混入)
 - IV-7 淡茶灰白色粘質土 (地山)
 - 8 淡茶灰白色シルト (3重田)

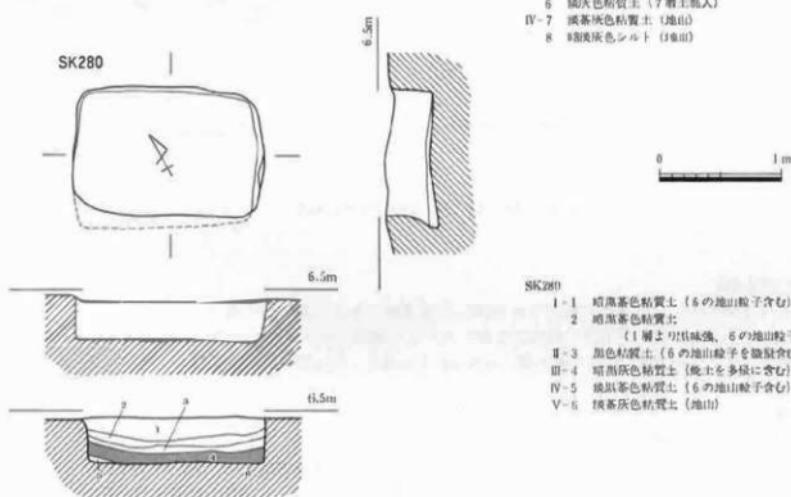


Fig.87 SK265・266・280 (S=1/40)

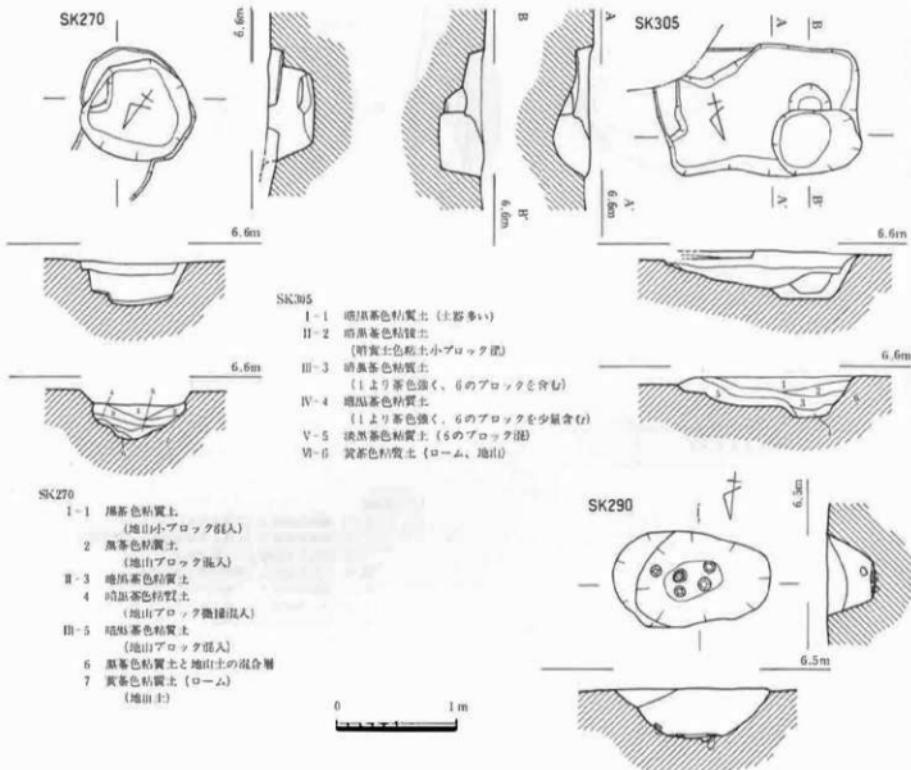


Fig. 88 SK270・305・290 (S = 1/40)

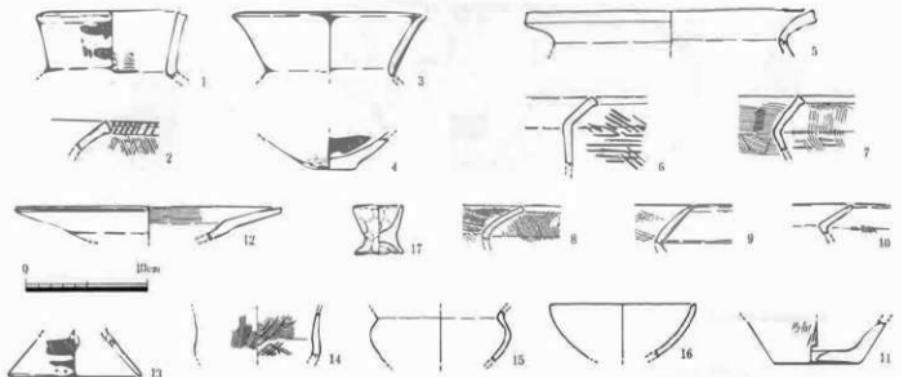
SK290 (Fig. 88)

CS55～CT55グリットにかけて検出された落し穴状遺構である。房型の平面プランを有し、断面形は擂鉢状で上方に広く開いており、純然たる落し穴として機能したとは考えにくい。法量は長軸約1.3m、短軸約0.8m、深さ約0.4m。主軸の傾きはN-82°-Eを測る。出土遺物には弥生中期の土器片がある。

不明遺構

SX300 (Fig. 85, PL. 19)

CR54グリット以来で確認された、地形の落ちに伴うものである。北東側は調査対象地外まで続いている。当初は湧水地でもあり、土器を多く出土したため遺構としていたが、人为的な痕跡を持たないため自然地形であると判断した。土器は弥生後期～古墳初頭にかけてのものであり、西側の落ち込み付近からの出土が大半である。この他の出土遺物には木材、石器などがある。



3. 土出遺物

この調査区からは弥生土器、土師器を多く出土した。弥生土器の多くは遺構から、土師器の出土はSX300からの出土が主である。

SE295出土遺物 (Fig. 88, PL. 20-1)

1～4は弥生土器の壺で、弥生後期～終末期のものである。5～10は甕の口縁部の破片で、5は弥生後期。6～7は弥生終末期。8～10は古墳時代初頭のものである。11は弥生土器の甕の底部で、底の部分には焼成後、穿孔が施されている。12～13は高环、12は弥生時代後期、13は古墳時代のものである。14～15は土師器の壺である。16は弥生土器の鉢である。17はミニチュアの脚付き鉢である。18は石包丁の破片で粘板岩製。19はスクレイバーで黒曜石製である。

SD275出土遺物 (Fig. 90～91)

1～5は弥生土器の壺の口縁部～肩部にかけての破片で、弥生後期～古墳初頭。6は弥生土器の壺の底部である。7～15は弥生土器の大型壺の口縁部である。8～13・14は二重口縁、その他は広口の壺である。16は弥生土器の小型壺である。17～24は甕の口縁部である。17は弥生中期。18～20は弥生終末。21～24は古墳時代初頭。25～27甕の底部で、25～26は弥生中期、27は弥生終末期。28は弥生土器の大型甕である。29～31は弥生後期～古墳初頭にかけての鉢である。32は鉢のミニチュアである。34は土師器の高环である。

SK265出土遺物 (Fig. 92)

I 層出土遺物

1は弥生土器の壺である。2～4は弥生土器の甕の口縁部で、弥生時代中期前半。6は弥生土器の甕の底部である。58は弥生土器の短頸壺で、弥生中期。7はサスカイト製のスクレイパーである。

II 層出土遺物

8は弥生土器の甕の口縁部小片で、弥生中期前半。

III 層出土遺物

9は弥生土器の甕の口縁で、弥生中期前半。

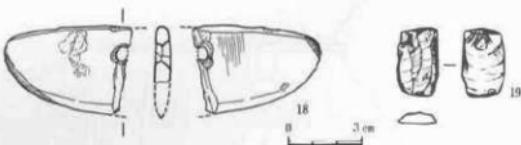


Fig. 89 SE295出土遺物 (S=1/4・1/2)

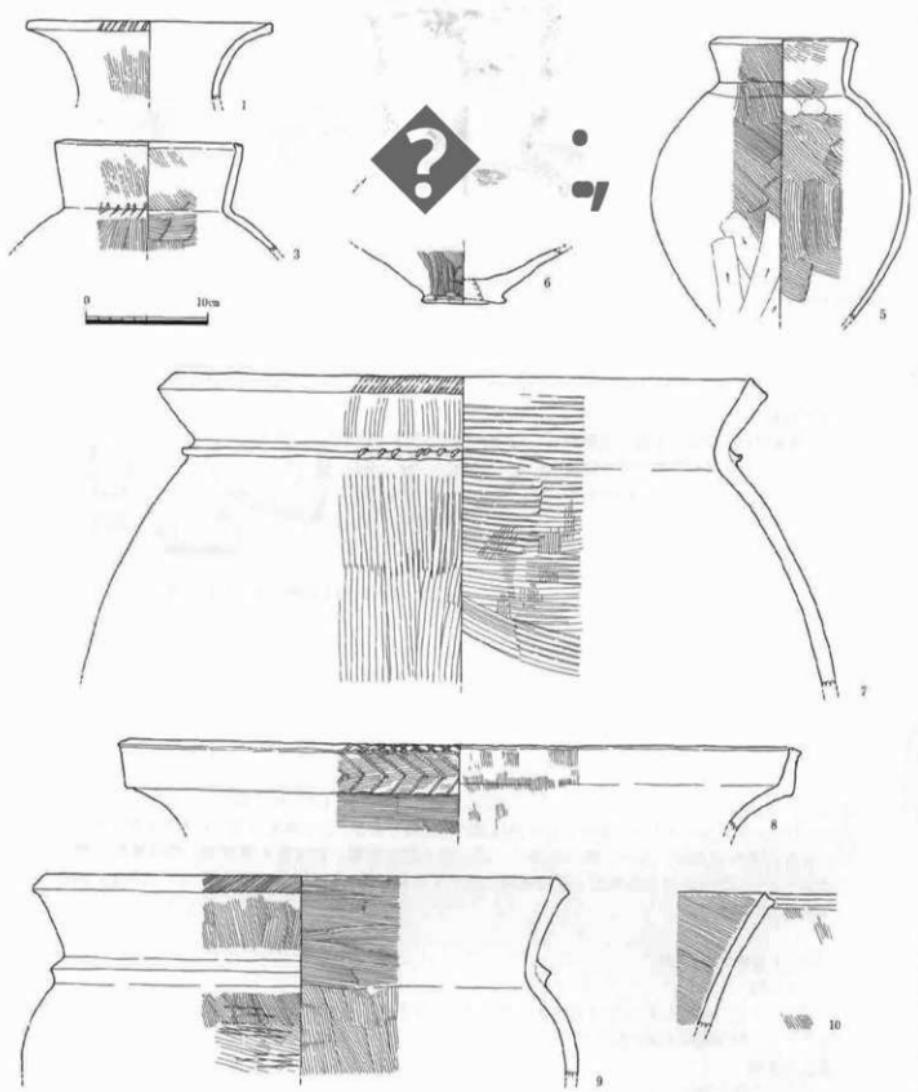


Fig. 90 SD275出土遺物 (1) ($S=1/4$)

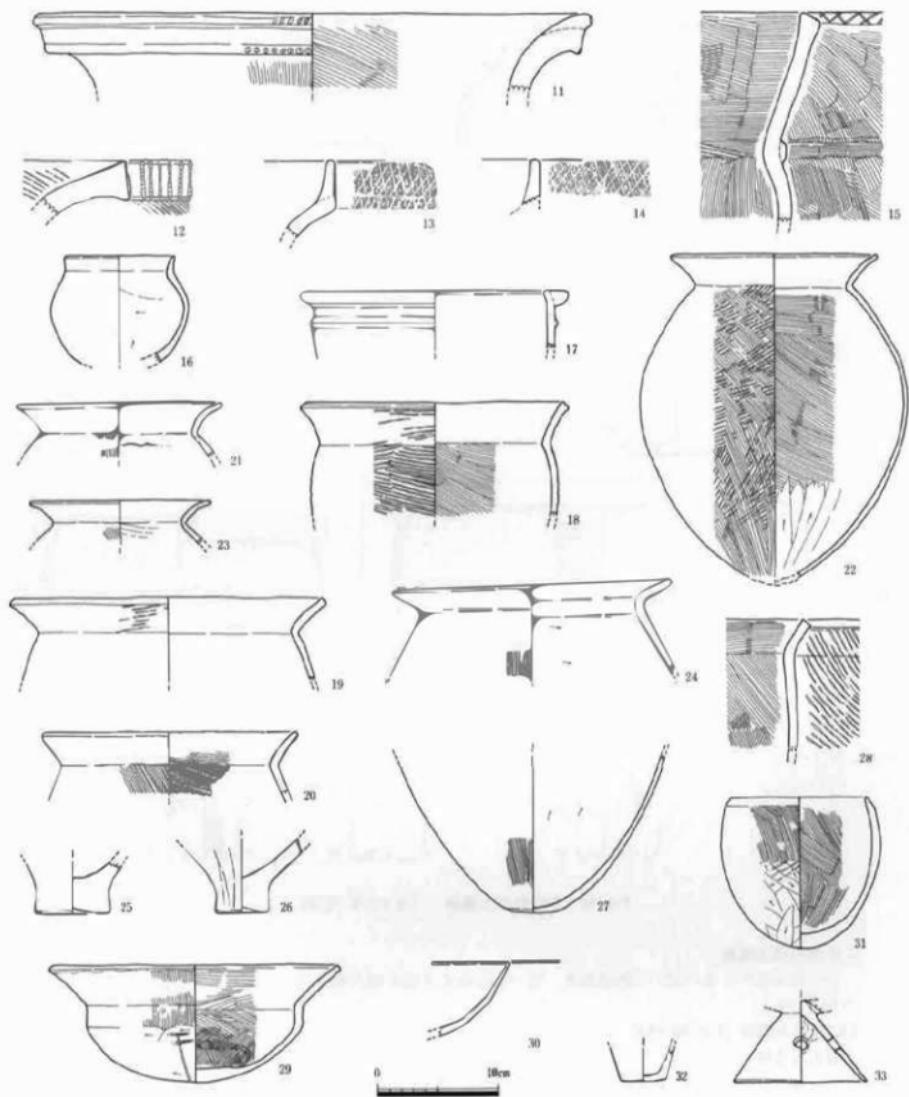


Fig. 91 SD275出土遺物 (2) (S=1/4)

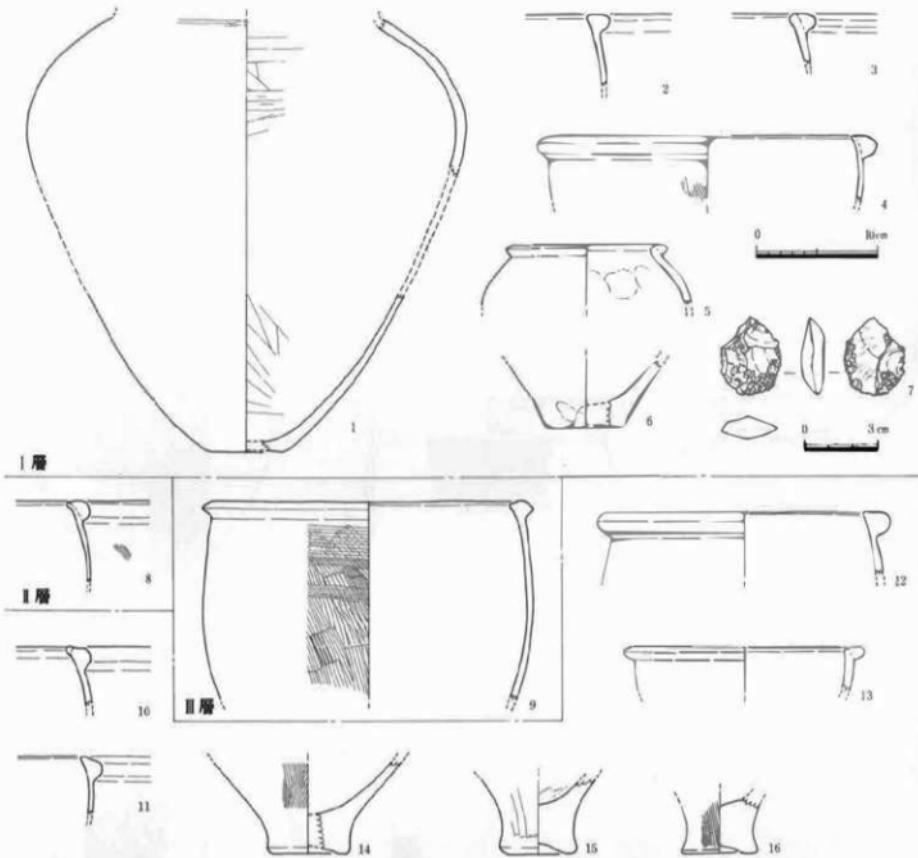


Fig. 92 SK265出土遺物 (S = 1/4・1/2)

この他の出土遺物

10~13は弥生土器の甕の口縁部破片、14~16は弥生土器の甕の底部で、いずれも弥生時代中期前半のものである。

SK266出土遺物 (Fig. 93~94)

I層出土遺物

1は弥生土器の甕の口縁部である。2は弥生土器の甕の底部である。3~11は弥生土器の甕の口縁部で、弥生中期前半。12~13は弥生土器の甕の底部で弥生中期。14~15は弥生土器の鉢で、14は三角形にせり出した口縁部分に孔を設けている。

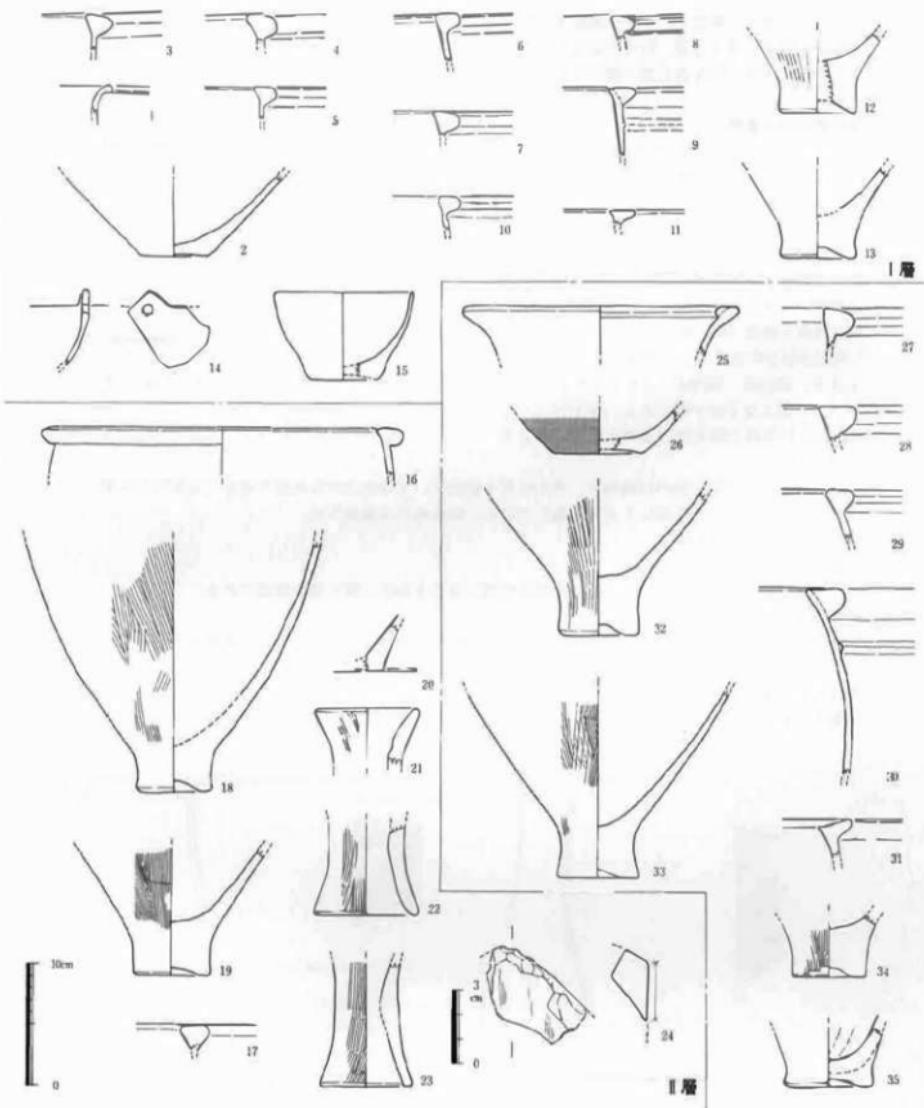


Fig. 93 SK266出土遺物 (1) (S = 1/4 + 1/2)

II層出土遺物

16~17は甕の口縁部で、弥生中期前半。18~20は甕の底部で弥生中期。21~23は弥生土器の器台で弥生中期。24は砂岩製の砥石の破片である。

その他の出土遺物

25は弥生土器の広口壺の口縁部で、弥生時代中期中頃。26は弥生土器の壺の底部で、外面の一部に丹塗りが残っている。27~31は弥生土器の甕の口縁部で、弥生時代前期後半~中期後半。32~36は弥生土器の甕の底部で、弥生時代中期。37~38は弥生土器の器台で、弥生時代中期。39はサヌカイト製のスクレイバーか。

SK320出土遺物 (Fig. 95)

SK320はCW53グリットで検出された土壤であるが、SK265、SK266により大半を失われ、プランや埋土などは不明である。推定復元ではSK265と同規模の隅丸長方形の土壤であると考えられる。

1~3は弥生土器の甕の口縁部で、弥生時代中期前半。4は弥生時代の甕の底部で弥生時代中期。5は弥生土器の鉢で、内外面にミガキを施している。弥生時代中期前半か。

SK280出土遺物 (Fig. 96)

I層出土遺物

1は弥生土器の壺の底部である。2は刻目突帯を有する弥生土器の甕の胴部である。

その他の出土遺物

3は縦文土器で、口唇部に刻目突帯を有する鉢の破片である。4は弥生土器の胴部破片で、三角突帯を有している。5は弥生土器の甕の底部で、弥生時代前期。

SK270出土遺物 (Fig. 96)

I層出土遺物

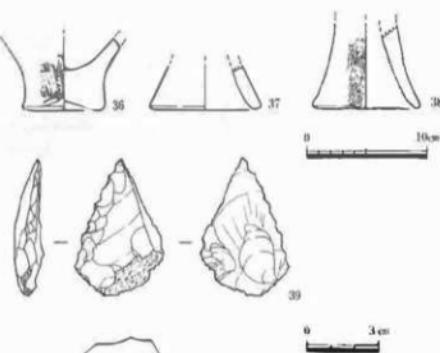


Fig. 94 SK265出土遺物 (2) ($S = 1/4 \cdot 1/2$)

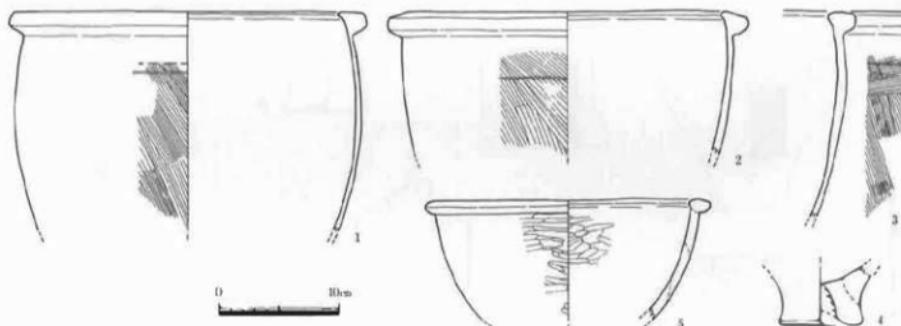


Fig. 95 SK320出土遺物 ($S = 1/4$)

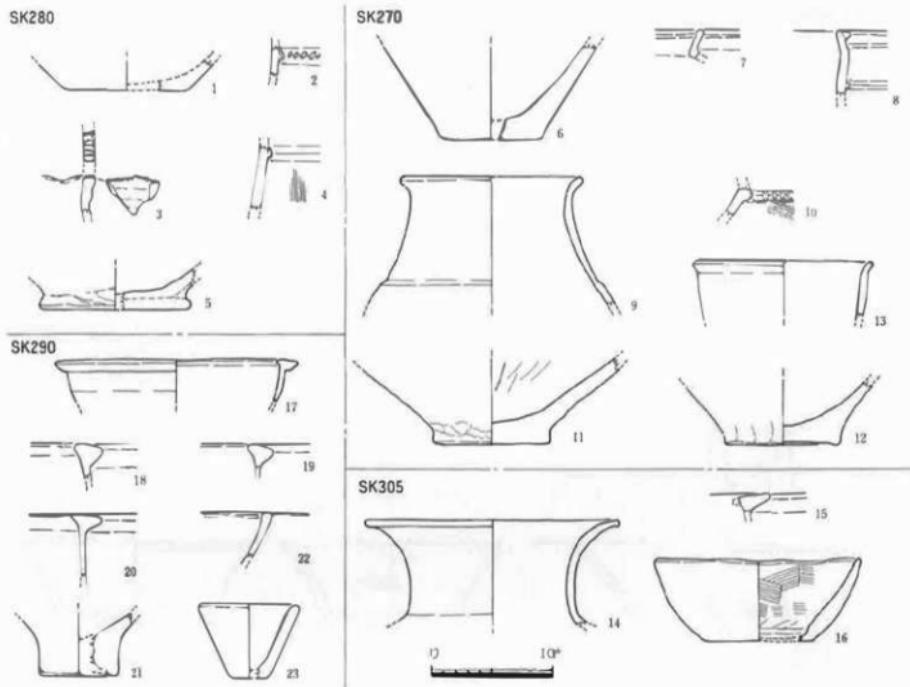


Fig. 96 SK280・270・305・290出土遺物 (S=1/4)

6は弥生土器の壺の底部である。

I層出土遺物

7は口縁部破片で、内外面に1条の沈線を施している。弥生土器の壺か。8は弥生土器の壺の口縁部である。

その他の出土遺物

9は弥生土器の壺の口縁部で、肩部に弱い段を残す。弥生前期前半。10は弥生土器の胴部小片で、張り出した部分に刺目突帯を有する。11～12は弥生土器の壺の底部で、弥生時代前期。13は弥生時代の壺の口縁部で、弥生前期。

SK305出土遺物 (Fig. 96)

I層出土遺物

14は弥生土器の広口壺。15は弥生土器の壺の口縁部で弥生中期。

その他の出土遺物

16は弥生土器の鉢である。

SK290出土遺物 (Fig. 96)

17～20は弥生土器の壺の口縁部で弥生時代中期前半～中頃。21は弥生土器の壺の底部で、弥生時代中期か。22～23は弥生土器の鉢である。

SX100出土遺物 (Fig. 91~103, PL. 20-2)

1～2は弥生中期の壺の肩部で、1は弥生中期。2は弥生後期。3は弥生土器の広口壺の口縁部である。4～5は弥生終末期の壺の口縁部である。6～13は弥生終末～古墳初期の壺の口縁部である。14～15は弥生終末～古墳初期の壺の肩部である。16～17は古式土師器の壺の口縁部である。18は古式土師器の壺の口縁部か。19～24は弥生土器の壺の底部である。25は土師器の壺の底部である。26は弥生土器の壺の底部か。

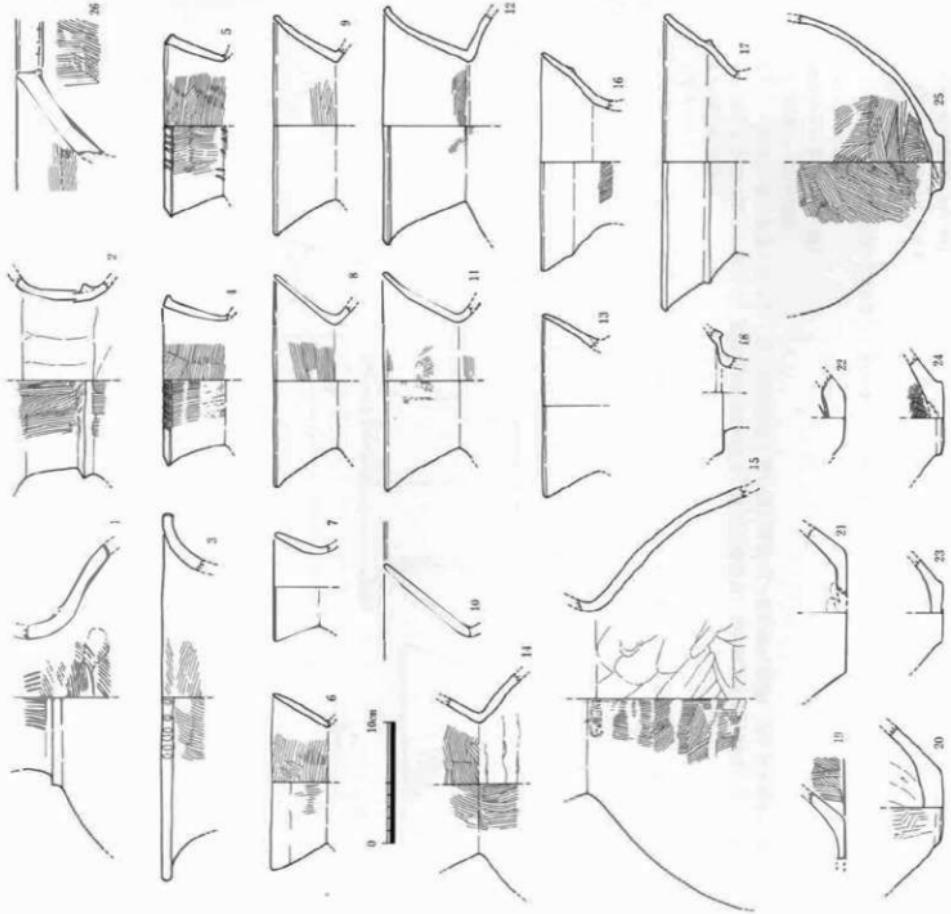


Fig. 97 SX100出土遺物 (1) (S=1/4)

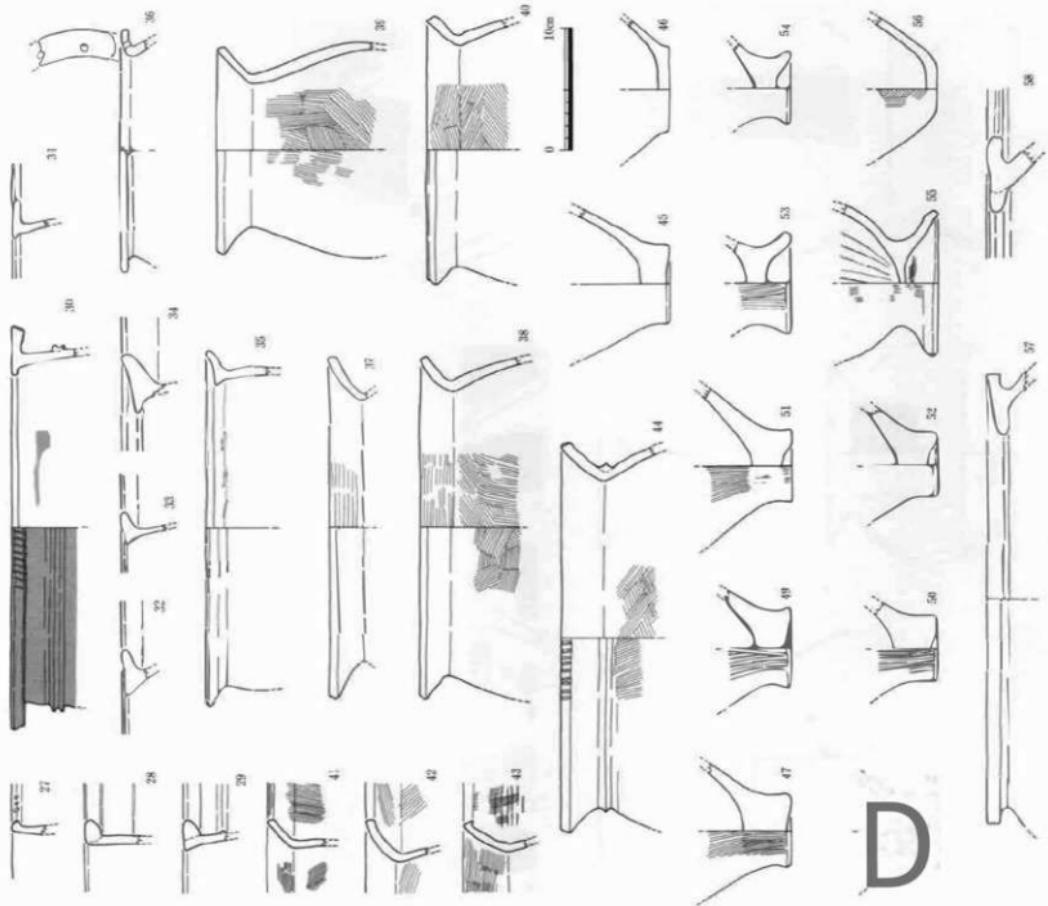


Fig. 98 SX100出土遺物(2) (S=1/4)

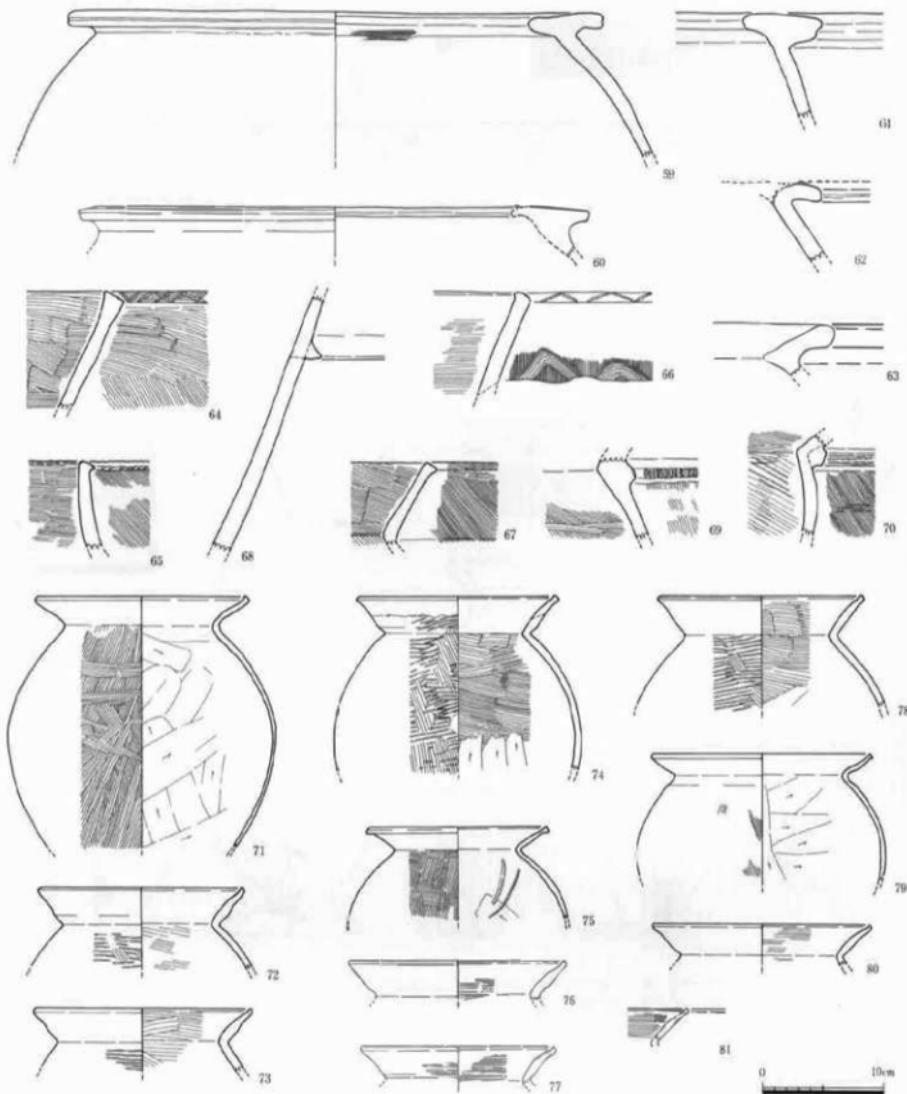


Fig. 99 SX300出土遺物 (3) ($S=1/4$)

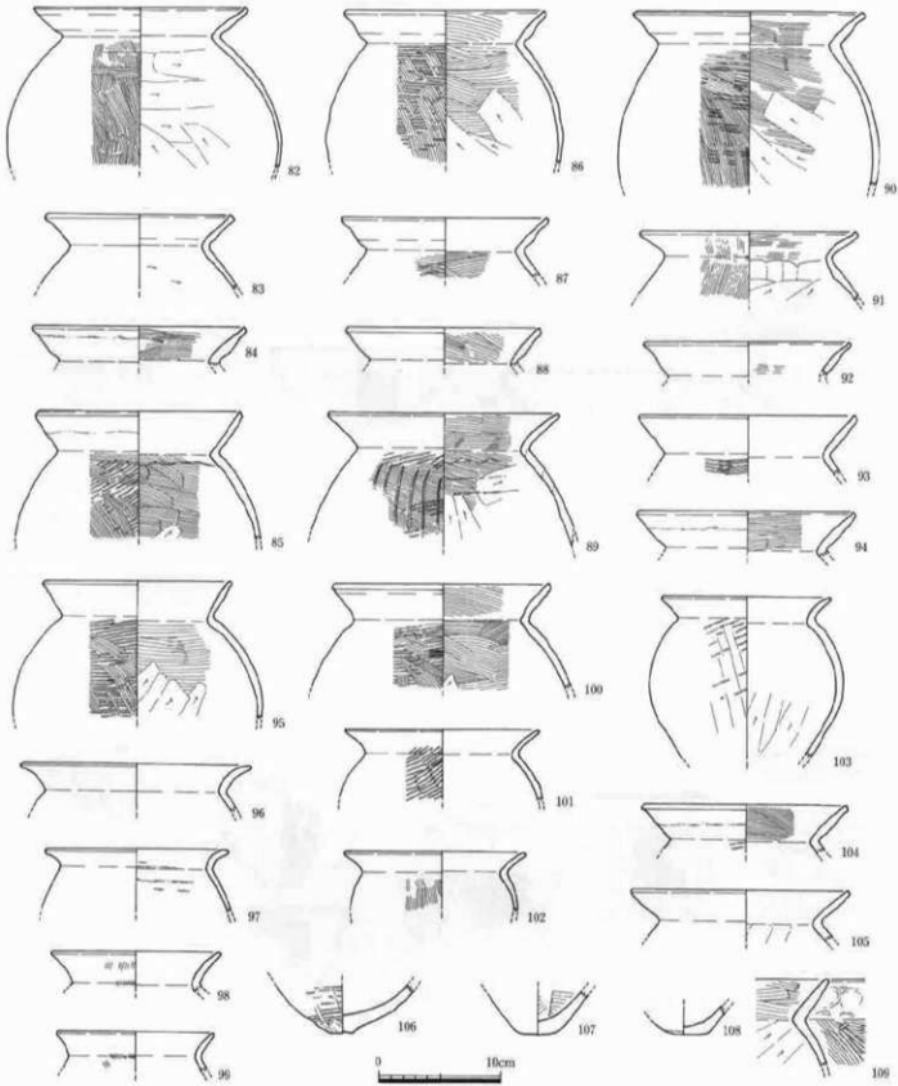


Fig. 100 SX300出土遺物 (4) (S=1/4)

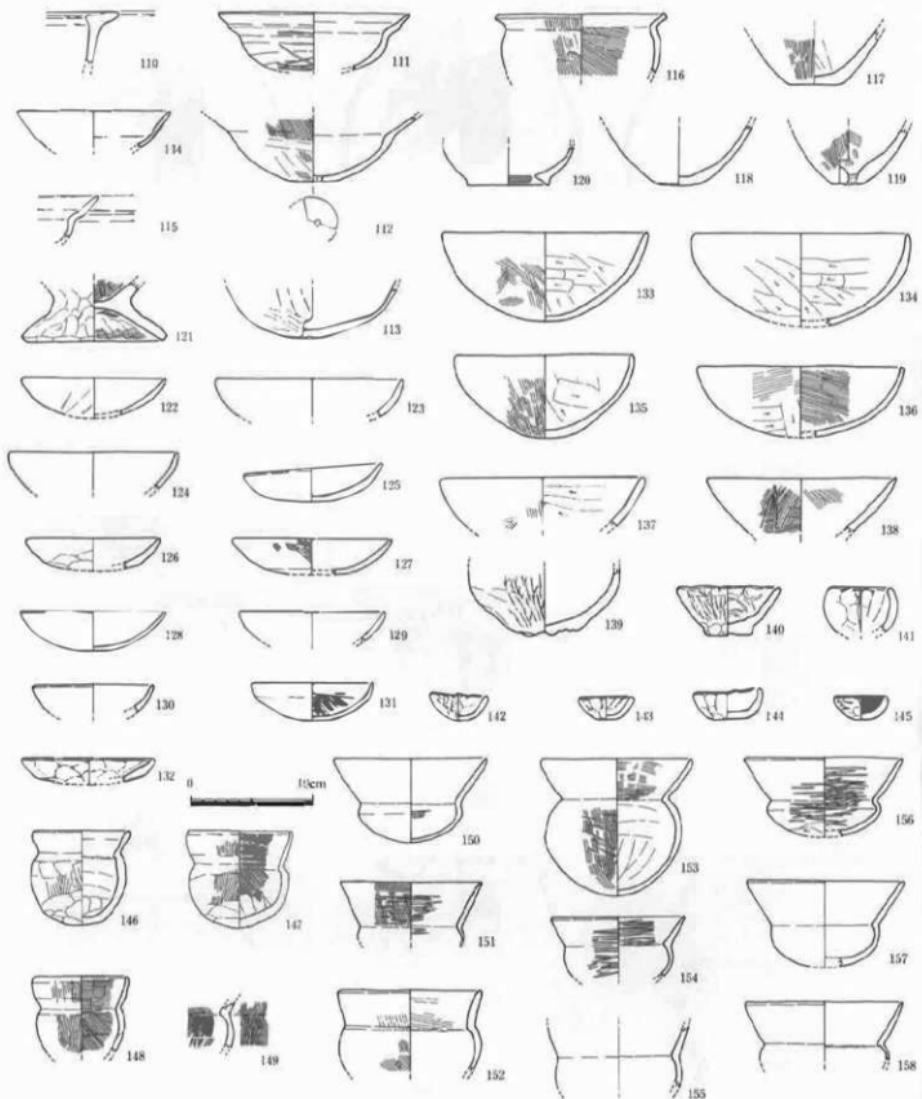


Fig. 101 SX300出土遺物 (5) (S=1/4)

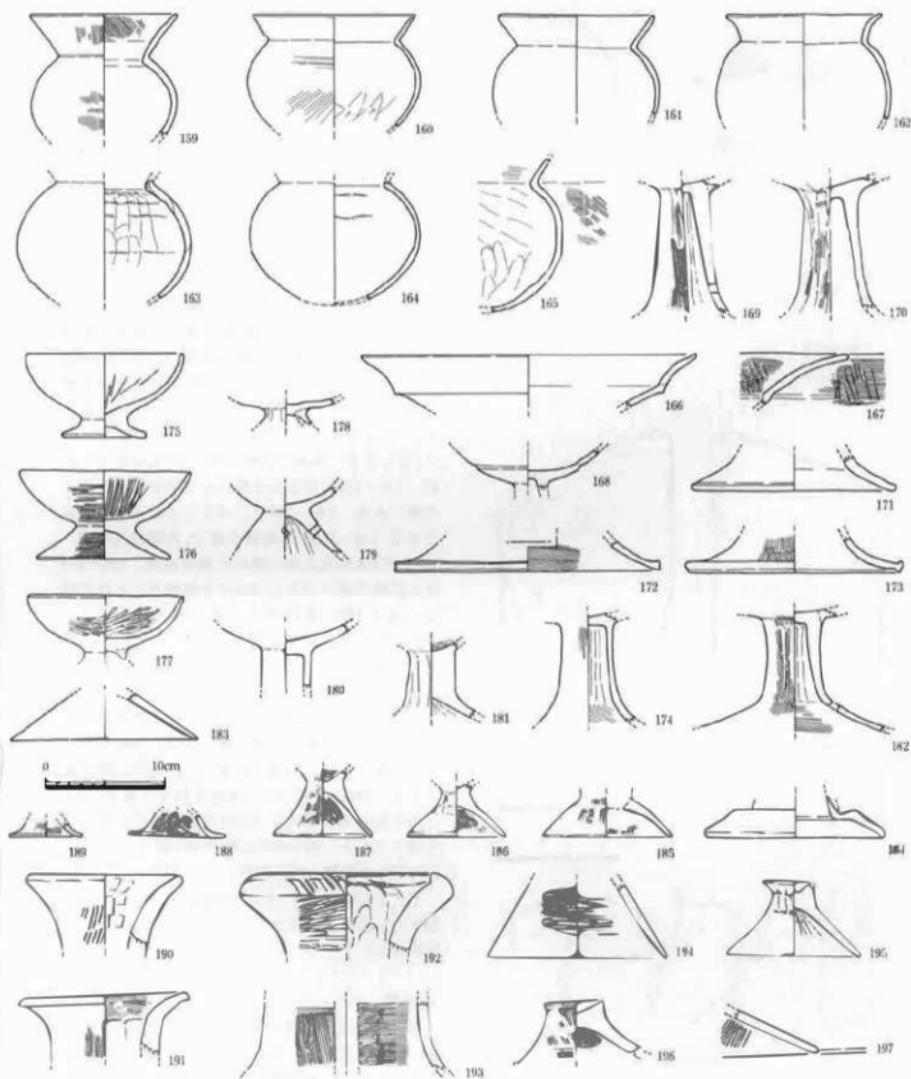


Fig.102 SX300出土遺物(6) (S=1/4)



Fig. 103 SX300出土遺物 (1) (S=1/4・1/2)

器の大型甕である。27~42は弥生土器の甕の口縁部である。27は弥生前期か。28は弥生前期後半。29は弥生時代中期前半。30~33は弥生時代中期中頃。34~35は弥生時代中期後半。36は口縁部の二ヶ所に孔を確認した弥生中期の短頸甕である。37~42は弥生時代後期。43~44は弥生時代終末期である。45~56は弥生土器の甕の底部である。45~46は弥生前期。47~52は弥生中期。53~55は弥生中期後半~弥生後期前半で、肥後系統のものか。56は終末期のものである。57~67は大型の甕の口縁部で、57~63は鶴先口縁系、64~67は「く」の字形口縁系のものである。68は甕棺の胸部破片である。69~70は大型甕の肩部破片である。71~105・160~165は古式土師器の甕で、古墳時代初頭。106は古式土師器の甕の底部か。107~108は弥生時代後期の甕の底部か。110~120は弥生土器の鉢である。111・119は底部穿孔。120は底部欠落。121は弥生土器の脚付き鉢か。弥生後期。122~132は古式土師器の浅鉢(皿)で132は手づくね品。133~139は弥生終末期から古墳初頭にかけての鉢である。140~145はミニチュアの手づくね鉢である。146~159は土師器の皿で、古墳時代初頭。166~174は弥生土器の高环で弥生後期。175~183は土師器の高环である。184は中国地方からの影響か。185~189は高环のミニチュアと思われる。190~191は弥生中期の器台である。192は弥生終末期の器台である。193~194は土師器の器台で、193の腹部中央には透かしが施されている。195~197は弥生土器の蓋である。198~199は弥生土器の腹部片で、沈線文が施されている。200~202は弥生土器の手づくね甕である。201は土製の模造鏡である。204は黒曜石の二次加工剥片である。205は砂岩製の砥石である。206は木製のヘラと思われる破片である。207~208は板材の小破片である。

SD272出土物 (Fig. 104)

1~2は弥生土器の甕の口縁部で、1は弥生中期前半、2は弥生中期後半。3はアメリカ式石鋸か。黒磨石製。

4. 小結

737-738工区は当初北側に位置する津島北石伏遺跡、津島貝ヶ町遺跡と同時期の遺跡と考えて調査を行なってきたが、時期的にこれらより遅る弥生中期の遺構群を検出した。規模は明確にはできなかったが、津島地区にも常用遺跡と同時に人々が活動し

ていた痕跡を確認したことは734-737工区の瘤井状遺構の検出と共に大きな成果である。

特殊な遺物としてはSD272出土のアメリカ式石鎌がある。この石鎌は本調査区の北に所在する水田杉ノ木遺跡でも数点出土している。遺構自体の残りは悪いがこの遺構の出土遺物は弥生中期であり、水田杉ノ木遺跡のものと時期的にもほぼ一致する。水田杉ノ木遺跡（常用遺跡）の人々の生活を復元するための一助となり得るかは今後の周辺調査の実施を待つしかない。

今調査における問題点としてはSX300の出土遺物の解釈がある。時間的な制約上、埋土を重機により掘り上げての遺物採集という手法をとったが、土製模造鏡やミニチュアの手づくね品などが数多く出土し、水辺祭祀が行なわれていた可能性が出てきている。今後この地区で調査が行なわれる際にこの点を確認しなければならない。

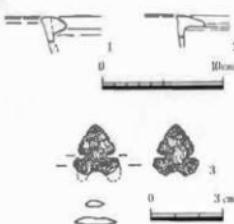


Fig. 104 SD272出土遺物
(S=1/4・1/2)

第4節 732-734工区の調査

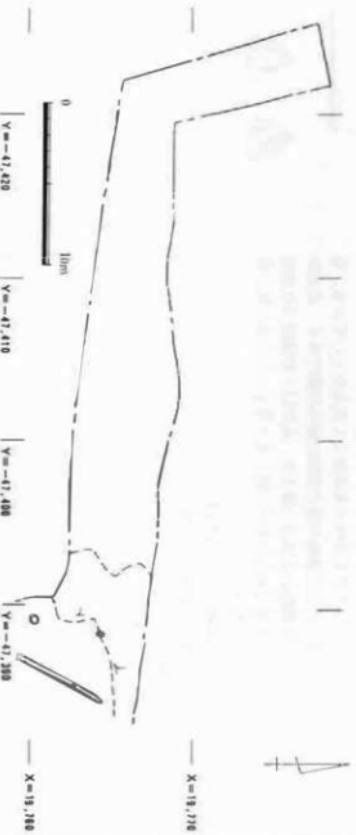


Fig. 105 732-734工区 全体図 ($S=1/300$)

1. 概要

732-734工区は、茨城市大字津島字大曾里に所在する。調査面積は約1500m²である。調査は最初に重機により道構面まで掘り下げ、構造面を確認した。道構面は灰褐色の砂混じりの粘土で、道構の埋土は黒色粘土である。しかし、道構面である層が薄く、基盤層である砂礫層からの湧水によりこれが剥離、さらに周辺からの土圧により作業面に波状に変形してしまった。このため道構埋土を含む粘土を重機により除去し、その後測量を行ない、周間に危険が及ぶ範囲を早急に埋め戻すこととなつた。調査は8月25日に開始、9月7日に測量を行ない、翌日より危険箇所の埋め戻しを行ない、これの終了をもって調査を終了した。

2. 小結

この調査区は調査がほとんど行なえなかっただけで、海拔5m前後という深さから道構を確認できた。調査主管者によると、この埋土は発生時代の道構の埋土に似ているが、重機により掘り上げた埋土の中からは遺物の採集はなかったとのことである。この道構の性格付けは今後の調査を得なければならない。

第5節 766-767工区の調査

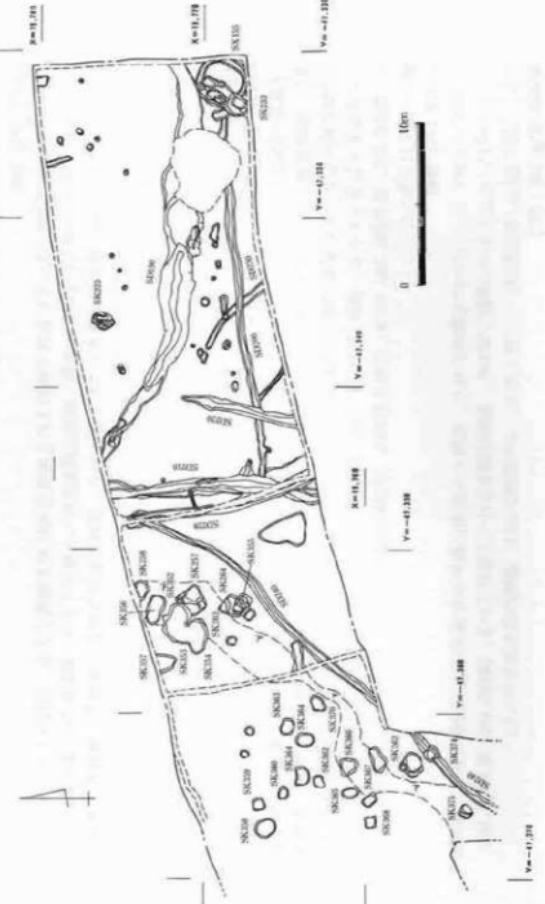


Fig.106 766-767工区 全体図 (S=1/300)

1.概要

766-767工区は、筑後市大字津島字大曾屋に所在する。調査面積は約1435m²である。調査は重機の都合上東側部分および西側部分を先に掘り下げ、南側の調査区の作業終了後、中央部分を掘り下げるなどとなった。調査当初は東側調査が順次地区と隣接することから発生時代の遺跡の存在が想定されたがこの時期の遺構は意外に少なく、調査の結果、削7条、土壁24基以上、周辺状況等1基を検出した。調査は10月6日より始められ、12月18日にこれを終了した。

2.検出遺構

sondage

SD190 (Fig.106・107, PL.22-2)

CJ38~CR40グリットにかけて検出された、東から西北へと走る遺構で、途中を近代の大きな複合杭により切断される。また、弥生時代のSK233、SX55を切っており、時期は決定できないが、弥生時代よりは新しい遺構である。幅約2.1m、深さ約0.35m、検出した長さ約25m。東側へ向かう斜浅くなり、①轟区の境・下場塙遺跡でできない限りになるが、両側で観察すると、断面は緩やかなV字状となる。埋土は自然堆積であるが、流水の痕跡は確認できなかった。②遺構が、らは朝文時代のものと思われる石礫と弥生土器片を出土している。

SD200 (Fig.108)

CM37~CR26グリットにかけて検出された、東から西へと走る遺構で、東側を大規模な近代焼瓦坑に、

西側をSD210・220に切られており、西側ではこの続きとなりそうな遺構は確認されていない。幅約0.5m、深さ約0.1m、検出した長さ約17.5m。断面形は逆台形状となる。遺物は弥生土器片、黒曜石片を出土したが、時期の特定に至るものではない。

SD210 (Fig.106)

CS39～CR38～CS35グリットにかけて検出された南北方向に走る遺構である。SD35Iをなぞるように切っており、SD228に切られている。北側、南側は調査区外へと延びており、幅約0.5m、深さ約0.2m、検出した長さ約12.5m。断面形は緩やかなU字状となる。遺物は弥生土器片、陶器片、磁器片、黒曜石片などを出土したが、時期の特定に至るものではない。

SD220 (Fig.106)

CQ36～CQ38グリットにかけて検出された、北北東から南南西に走る遺構である。SD200を切り、南側は調査区外へと走る。幅約0.6m、深さ約0.15m、検出した長さ約7m。断面形は緩やかなU字状となる。遺物は黒曜石片を出土したが時期の特定に至るものではない。

SD228 (Fig.106)

CR35～CS39グリットにかけて検出された南北方向に走る遺構である。当初は北側と南側の一部を検出し、別の遺構としていたが、調査区の拡張に伴い一連の遺構であることが確認されたため、名称をSD228に統一した。それ以前に調査区脇に排水の為の溝を掘削しており、結果、遺構自体に大きなダメージを与えてしまっている。遺構はSD220・240・SX160を切り、北側、南側は調査区外へと延びている。幅約0.5m、深さ約0.2m、検出した長さ約12m。断面形は緩やかなU字状となる。この遺構からは、遺物の出土はなかった。

SD230 (Fig.106)

CO36～CP38グリットにかけて検出された、北西から南東に緩やかな弧状に走る遺構である。SD200と共に平行に存在する小土壙群に切られ、南側は調査区外へと延びている。幅約0.4m、深さ約0.1m、検出した長さ約7m。断面形はレンズ状となる。この遺構からは、遺物の出土はなかった。

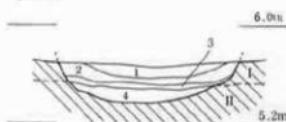
SD240 (Fig.106・107)

CT39～CW34グリット、CX33グリットからCY32グリットにかけて検出した、北東から南西に走る遺構で、北側をSD228に、南側の一部を土壙により切られている。幅約0.4m、深さ約0.2m、検出した長さは途中で切れる部分もあるが約25m。断面形は緩やかなU字状となる。出土遺物には弥生後期の土器片、土師器片、陶器片があるが、時期の特定に至るものではない。

水さらし土壙群

水さらし土壙群は、調査区の西側にあたる谷地形の落ち込み部分、水の湧き出る青灰色粘土に掘り込まれ、埋土も地山土がわずかに変色している程度であった。このため遺構検出は困難を極め、周辺より

SD190



SD240



- 1 淡灰褐色粘土（酸化鉄少量含）
- 2 深灰褐色粘土（1層より稍性、酸化鉄量大）
- 3 深灰褐色粘土（酸化鉄多量含）
- 4 灰褐色粘土（地山土埋入）
- I 前褐色粘土（地山）
- II 深灰褐色粘土（地山）

- I-1 淡灰褐色粘土
- 2 黑色粘土
- II-3 深灰褐色粘土（地山の青灰色粘土ブロックを多く含む）

Fig.107 SD190・240土層断面図 (S=1/40)

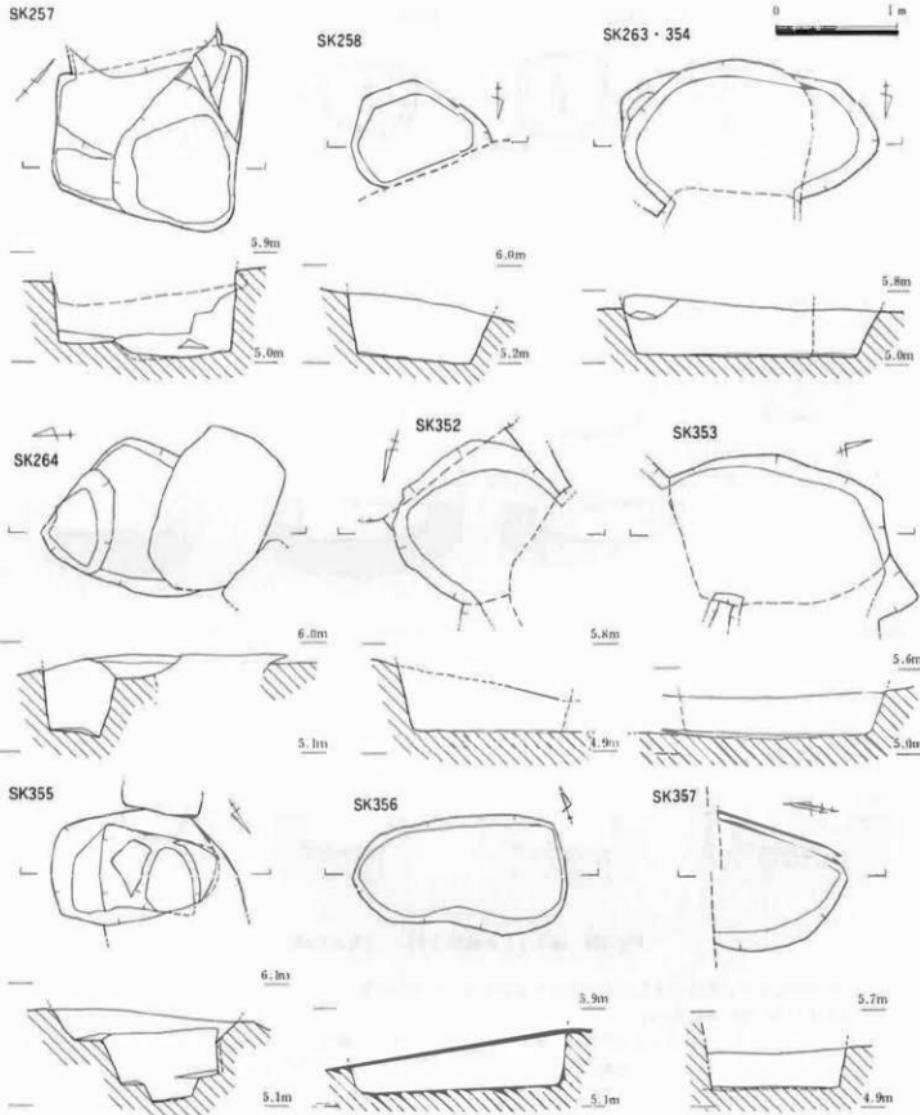


Fig.108 水さらし土壙群(1) (S=1/40)

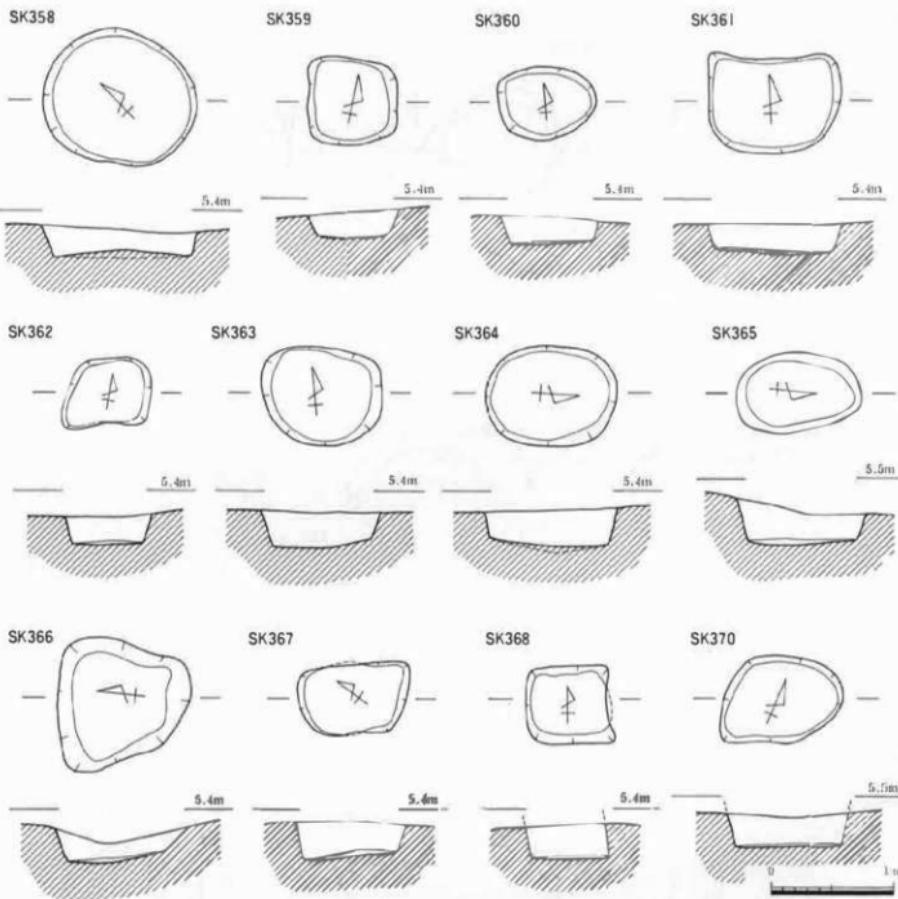


Fig.109 水さらし土壙群(2) (S=1/40)

も粘土が柔らかい部分を捜し出して作業を進めるような状況であった。

SK257 (Fig. 108, PL. 22-1)

CU38グリットから検出された隅丸台形の平面プランを有する土壙で、グリットから北西側をSK352に切られている。長軸約1.5m、短軸0.9~1.5m、床面は最も下がる部分で深さ約0.65m。主軸の傾きはN-50°E。壁面はほぼ垂直に立っている。この道構からは弥生土器が出土している。

SK258 (Fig. 108)

CU39グリットから検出された土壙で、上部北側が調査区外に走るが、ほぼ楕円形の平面プランを有す

ると思われる土壙である。調査時点での法量は長軸約1.15m、短軸約0.8m、深さ約0.5m。東西方向に主軸を持ち、断面形は逆台形状となる。この遺構からは弥生土器が出土している。

SK263 (Fig.108)

CU38グリットから検出された楕円形の平面プランを有すると思われる土壙で、西側のSK354を切り、北側のSK353に切られている。検出時点の状況を含めての法量は長軸約1.5m、短軸約1.1m、深さ約0.5m。東西方向に主軸を持ち、断面形は逆台形状となる。この遺構からは弥生土器が出土している。

SK264 (Fig.108)

CU37グリットから検出された不定型の平面プランを有する土壙で、南側のSK355を切る。長軸約7m、短軸約1.2m。床面は南側はSK355に破壊され不明だが、中央部分は浅く深さ約0.2m、北側は落ち込んでおり深さ約0.6mを測る。主軸は南北方向に持つ。この遺構からは弥生土器が出土している。

SK352 (Fig.108)

CU38グリットから検出された土壙で、北側をSK353に、南側をSK257に切られている。残存部分での長軸約1.15m、短軸約1.2m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN-75°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK353 (Fig.108)

CU38グリットから検出された不定型の平面プランを有する土壙で、東側のSK352、南側のSK263を切っている。長軸約1.7m、短軸約1.2m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-20°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK355 (Fig.108)

CU37グリットから検出された楕円形の平面プランを有する土壙で、北側のSK264に切られている。長軸約1.4m、短軸約0.8m、深さ約0.7m。主軸の傾きはN-58°-W。断面形は逆凸字状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK356 (Fig.108)

CU38～39グリットから検出された楕円形の平面プランを有する土壙である。長軸約1.8m、短軸約1.0m、深さ約0.4m。主軸の傾きはN-71°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK357 (Fig.108)

CV38グリットから検出された土壙で、北側は調査区外へと延びている。調査部分での長軸約1.1m。短軸約1.1m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-12°-W。断面形は逆台形状になると思われる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK358 (Fig.109)

CZ36～DA36グリットにかけて検出された円形の平面プランを有する土壙である。長軸約1.3m。短軸約1.1m、深さ約0.25m。主軸の傾きはN-47.5°-W。断面形は上方に開く逆M字状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK359 (Fig.109)

CZ36～CZ37グリットにかけて検出された隅丸方形の平面プランを有する土壙である。長軸約0.7m、短軸約0.6m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-77°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK360 (Fig.109)

CZ36グリットから検出された楕円形の平面プランを有する土壙である。長軸約0.8m、短軸約0.6m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-86°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK361 (Fig.109)

CX36～CY37グリットにかけて検出された不定型の平面プランを有する土壙である。長軸約1.1m、短軸約0.8m、深さ約0.25m。東西方向に主軸を持ち、断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

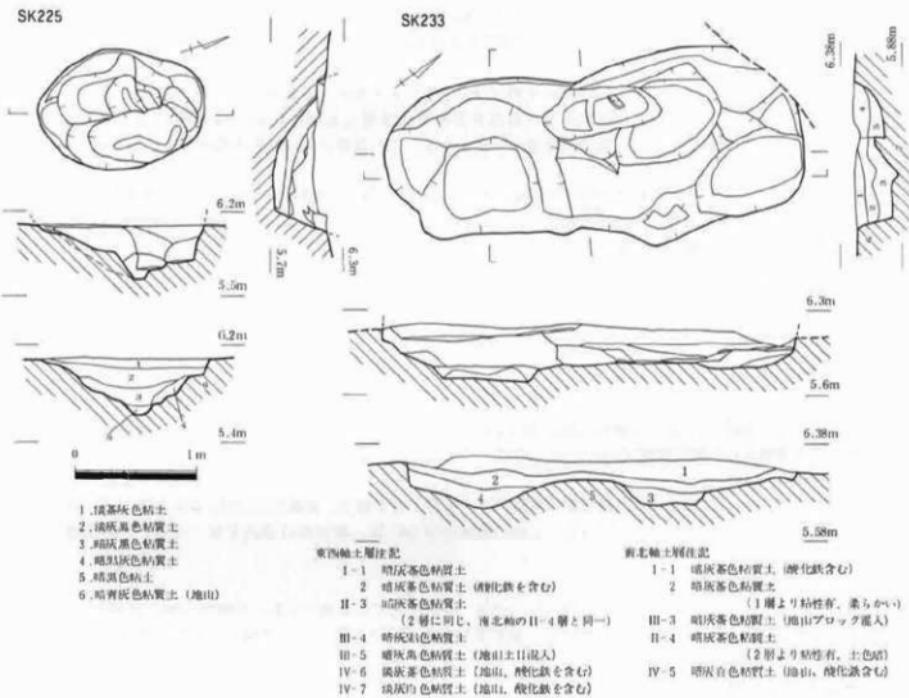


Fig.110 SK225・233 (S=1/40)

SK362 (Fig.109)

CX36～CY36グリットにかけて検出された不定型の平面プランを有する土壇である。長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-79°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK363 (Fig.109)

CW36～CX36グリットにかけて検出された楕円形の平面プランを有する土壇である。長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-84°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK364 (Fig.109)

CX35～CX36グリットにかけて検出された楕円形の平面プランを有する土壇である。長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-4°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK365 (Fig.109)

CY34～CY35グリットにかけて検出された楕円形の平面プランを有する土壇である。長軸約1.0m、短軸約0.6m、深さ約0.4m。主軸の傾きはN-55°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺

物はなかった。

SK366 (Fig.109)

CY35グリットから検出された不定型の平面プランを有する土壙である。長軸約1.1m、短軸約1.1m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-6°-W。断面形は上方に大きく削く逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK367 (Fig.109)

CY34グリットから検出された隅丸長方形の平面プランを有する土壙である。長軸約0.9m、短軸約0.6m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-37°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK368 (Fig.109)

CY34グリットから検出された隅丸方形の平面プランを有する土壙である。一片約0.65m、深さ約0.3m。東西方向に主軸を持ち、断面形は平行四辺形となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK370 (Fig.109)

CW35グリットから検出された不定型の平面プランを有する土壙である。長軸約1.0m、短軸約0.7m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN-67°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

その他の土壙

SK225 (Fig.110)

CO40グリットから検出された楕円形の平面プランを有する土壙である。長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さ約0.6m。主軸の傾きはN-18°-E。断面形はほぼ擂鉢状となるが、床面は小さな段差が多い。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK233 (Fig.110, PL.21-2)

CJ37～CK38グリットにかけて検出された不定型の平面プランを有する土壙である。北側の一部をSD190に切られているが、長軸約3.5m、短軸約1.6m、深さ約0.45m。主軸の傾きはN-36°-Eを測る。断面形は長軸、短軸とともに擂鉢上となる。当初は廐棄土壙として調査を進めだが、北側と南側に分割できそうな感触もあり、性格を明確にはできなかつた。この遺構からは石錨が1点出土している。

周溝状遺構

SX155 (Fig.111, PL.23-1)

CJ37を中心に検出された遺構で、西側をSK233により大きく破壊されている。現状で長軸約3.1m、深さは北側で0.05m、南側で0.2m。主軸の傾きはN-29°-Eを測る。この遺構からの出土遺物はなかった。

3. 出土遺物

この調査区は削平を受けているためか出土遺物は少ない。

SD190出土遺物 (Fig.112)

1はサヌカイト製の長脚錨である。脚部が若干鋤型となる。绳文時代のものか。

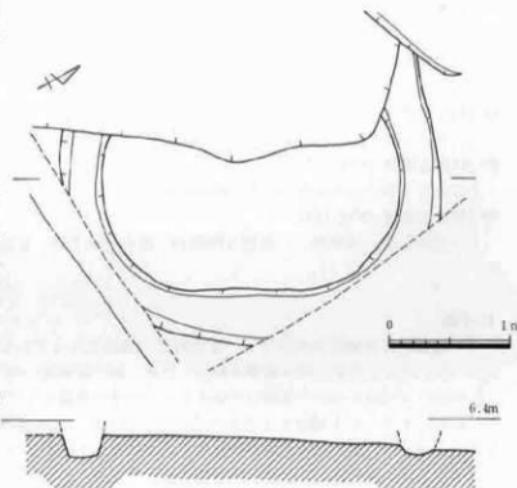


Fig.111 SX155 (S=1/40)

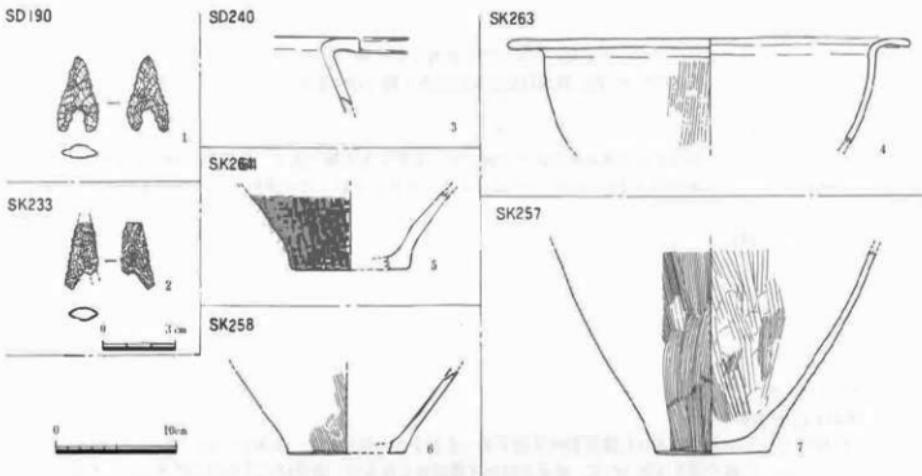


Fig. 112 766-767工区 出土遺物 (S=1/2・1/4)

SD240出土遺物 (Fig. 112)

3は弥生土器の口縁部小片である。中期頃のものか。

SK257出土遺物 (Fig. 112)

7は弥生土器の甕の底部である。弥生後期。

SK258出土遺物 (Fig. 112)

6は弥生土器の甕の底部である。弥生後期。

SK263出土遺物 (Fig. 112)

4は弥生土器の甕の口縁部である。弥生後期か。

SK264出土遺物 (Fig. 112)

5は弥生土器の甕の底面である。外面丹塗り。

SK233出土遺物 (Fig. 112)

2は黒曜石製の磨削器で、先端と脚部の一方を欠損する。石は佐賀保周辺のものか。細文後期～晩期か。

4. 小結

この調査区は遺物が大変少なく、弥生時代の遺構であっても東側調査のH地区との関係は明確に出来なかった。また、多数の溝状遺構を検出したが、圃場整備前の地形と一致するようなものは何一つなく、これらがいつ頃のものかを明確にさせることができない課題として残されている。

本報告で水さらし土壤群とまとめた遺構は、湧水量の多い部分を選んで掘り込まれているが蘿果類などの出土ではなく、調査主管者も可能性として挙げているにすぎない。

このように本調査区は、今後への課題を多く残すこととなった。

第6節 767-769工区の調査

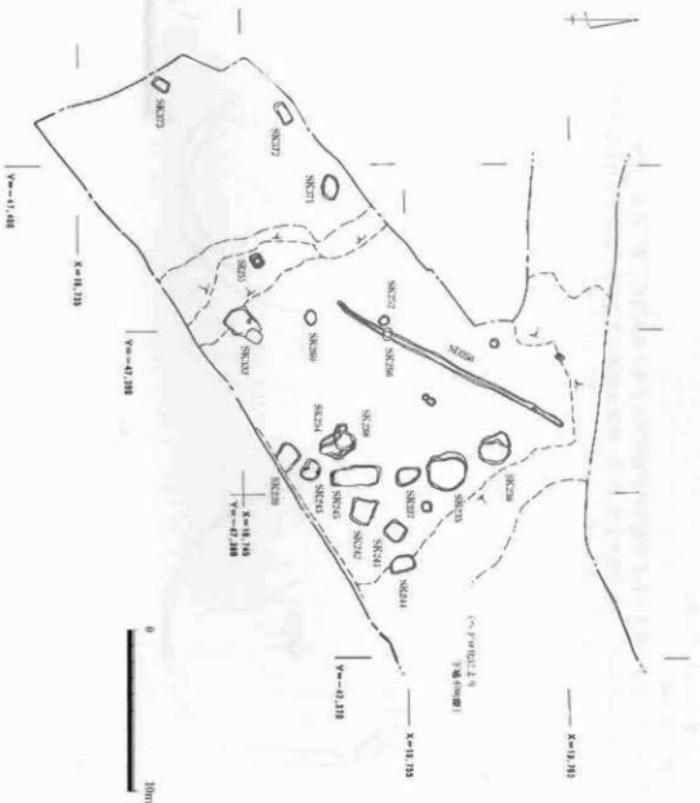


Fig. 113 767-769工区 全体図 ($S = 1/300$)

1. 概要
767-769工区は、筑後市大字津島字大曾里に所在する。割石面積は約520m²である。調査の結果、南から舌状に延びる台地上で滑坡選択1条、土壌20基、ピット4基を、西側の砂礫層から土壌3基を確認した。調査は10月16日に開始し、12月24日にこれを終了した。

2. 掘出遺構

滑状選択

SD250 (Fig. 113)

DE36-DH31グリットにかけて検出された、北から南に走る選択で、SK250を切る。幅約0.4m、深さ約0.2m、全長約15.5m。断面形は連合形状となる。この選択からの出土遺物はなかった。

土壤
SK235 (Fig. 114)

DD33～DE33グリットにかけて検出された、不定型の平面プランを有する大型の土壙である。長軸約2.3m、短軸2.3m、深さ約0.85m。主軸の傾きはN-2°5'W。断面形は逆台形状となる。この遺構からは発生器が出土している。

SK238 (Fig.114)

DE34グリットから検出された不定型の平面プランを有する大型の土壙である。長軸約2.1m、短軸約1.8m、深さ約0.85m。主軸の傾きはN-45°E。床面に段差を有するが、断面形はほぼ逆台形状となる。この遺構からは1層よりサカイト製のスクレイバーが出土している。

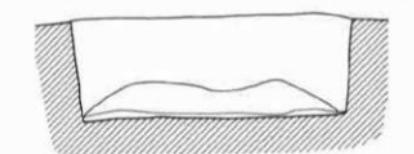
SK237 (Fig.115)

DD32～DD33グリットから検出された不定型の平面プランを有する土壙である。長軸約1.6m、短軸約

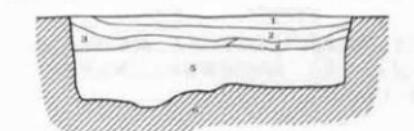
SK235



6.0m



6.0m



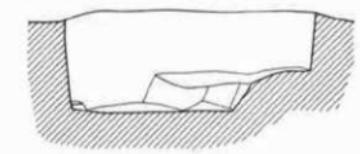
6.0m

- I-1 塗灰白色粘土〔若干の鉄分を含む〕
- 2 塗灰白色粘土〔上層より色調浅い〕
- II-3 漆黒灰色粘土
- 4 塗灰白色粘土
- II-5 漆黒灰色粘土〔3層より色調暗い、埴山小ブロック層〕
- 6 細白色粘土〔埴山〕

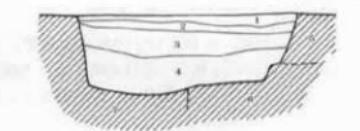
SK236



0 1 m



6.0m



- I-1 塗灰白色粘土〔若干の鉄分を含む〕
- 2 塗灰白色粘土
- II-3 塗灰白色粘土〔7の小ブロックを少量含む〕
- 4 漆黒灰色粘土〔7の小ブロックを少量含む〕
- II-5 漆黒灰色粘土〔埴山〕
- 6 漆黒灰色粘土〔鉄分多い、埴山〕
- 7 塗灰白色粘土〔埴山〕

Fig.114 SK235・236 (S=1/40)

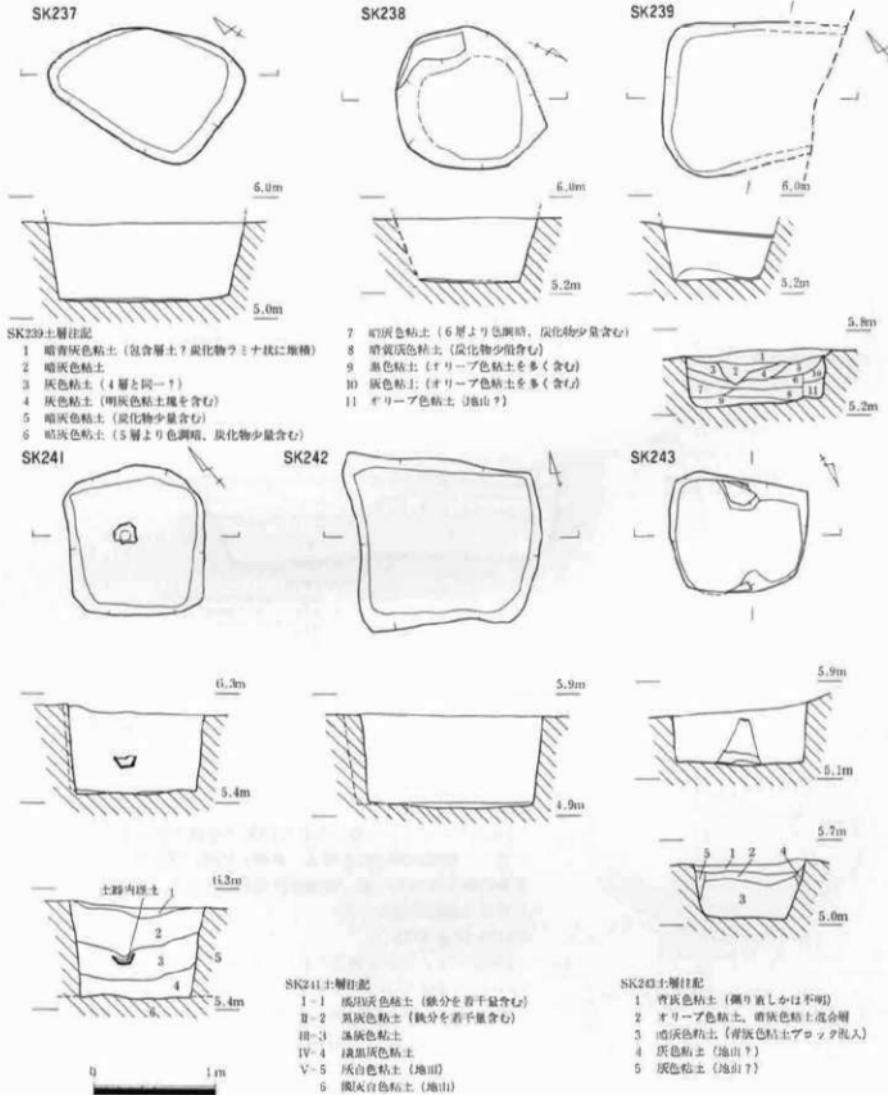


Fig.115 SK237・238・239・241・242・243 (S=1/40)

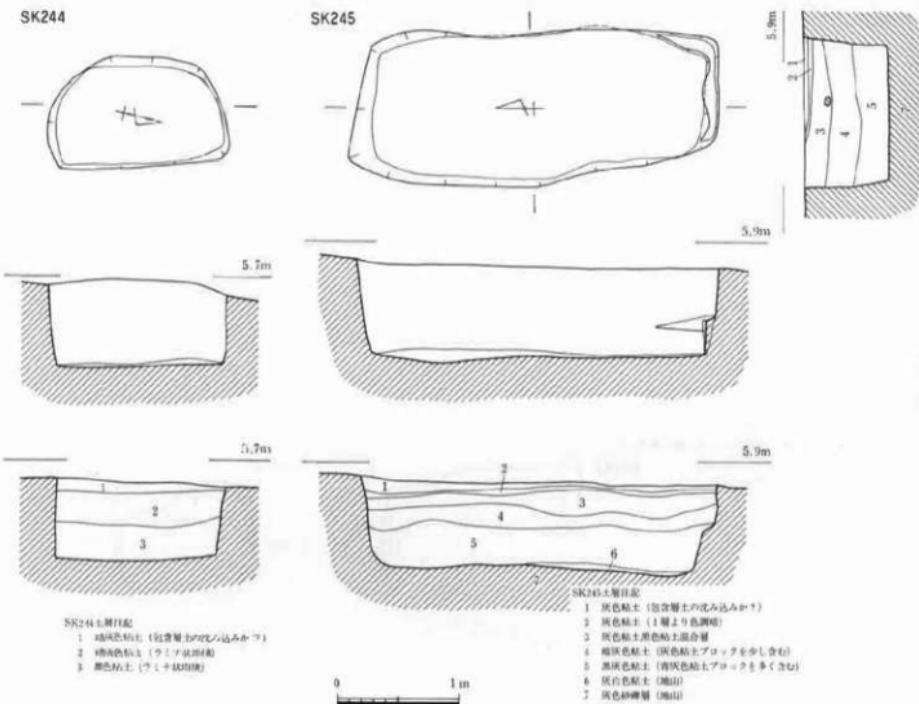


Fig.118 SK244・245・254 (S=1/40)

傾きはN-47°5'-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からは、III層の廃土中に発生後期の邊の底部が壊された形で出土した。手漉いから内部物を掘り出してしまったことは不明であるが、土器内には植物遺体が見られ、土器に施された植物性の蓋が残ったため、上部の埋土が陥没したと思われる跡跡が見られた。これらのことから、調査主任者はこれを、土壤の陥没時に行なわれた祭祀に利用された遺物と見ていている。この他には甕生土器の甕が出土している。

SK442 (Fig. 115)

DC31～DC32グリットから検出された堅丸形の平面アランを有する土壙である。長軸約1.5m。短軸約4 m。深さ約0.8m。主軸の傾きはN-72°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からは甕生土器の甕が出土している。

SK443 (Fig. 115)

DI30～DE31グリットから検出された堅円形の平面アランを有する土壙である。長軸約1.25m、短軸約1.0m。深さ約0.5m。断面形は逆台形状となるが、土器観察からは袋状土壙となる可能性もある。この遺構からの遺物の出土はなかった。

SK444 (Fig. 116)

DB32～DC33グリットから検出された堅円形の平面アランを有する土壙である。長軸約1.5m、短軸約0.9m、深さ約0.7m。主軸の傾きはN-13°-W。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土物はなかった。

SK445 (Fig. 116)

DD31～DD32グリットから検出された、隅丸長方形の平面アランを有する大型土壙である。長軸約2.9m、短軸約1.25m、深さ約0.8m。主軸の傾きはN-14°W。断面形はほぼ逆台形状となる。この遺構からの遺物の出土はなかった。

SK454 (Fig. 116)

DE31グリットから検出された、不定型の平面アランを有する土壙で、北側をSK238に切られている。調査時点での長軸約1.2m、短軸約1.5m、深さ約0.6m。主軸の傾きはN-21°5'-W。断面形は窓状部分はほぼ逆台形状、長軸側では両壁が大きく抉れている。この遺構からは甕生土器が出土している。

植物遺体出土土壙

この調査区では廻の設営も際で植物遺体を人為的に散き詰められたと考えられる土壙が2基確認された。どのような植物が何のために散き詰められたのかは不明である。

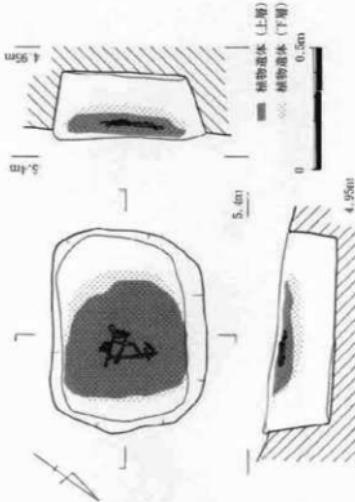
SK455 (Fig. 117, PL. 25)

DH29～D130グリットにかけて検出された隅丸長方形の平面アランを有する土壙である。長軸約0.8m、短軸約0.6m、深さ約0.25m。主軸の傾きはN-52°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からは目の大きさを細み物状の植物遺体が確認され、その下からさらには2面の植物遺体層を確認した。これらは人為的に散き詰められたものと考えているが、埋土である粘土と密着しており、全体像を研究するには至らなかつた。この遺構からは他の遺物は確認されなかつた。

SK453

DC29～30グリットにかけて検出された隅丸長方形の平面アランを有する土壙である。この遺構からは互に散き詰めた。

Fig. 117 SK455 (S=1/10)



SK373

SK372

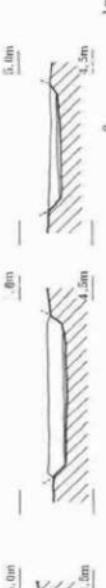


Fig. 118 水さらし土壌群 (S=1/40)

れたに植物遺体を出土したが、SK255と同様の理由によりその全形圖は不明である。この道構からは他の遺物は確認されなかった。

水さらし土壌群 (Fig. 118)

本調査区の西側は深い谷地形であり、地山は海水妙礫層である。東側の谷地形の地山が水の染み出る灰色粘土層であるのは対照的である。ここからは土壌が3基ほど確認された。調査主任者はこれらを7667-12Kの西側で確認された土壌群と同様、水さらしの為の道構と考えている。しかし、台地の東側に当たる灰色粘土の地山部分ではこのような道構は確認されなかった。

SK371 (Fig. 118)

DJ31アリットから確認された幅円形の平面プランを有する土壌である。長軸約1.5m、短軸約1.0m、深さ約0.1m。主軸の傾斜はN.-10°-E.。断面形は逆台形状となる。この道構からの出土遺物はなかった。

SK372 (Fig. 118)

DK30-DI.30アリットにかけて検出された長方形の平面プランを有する土壌である。長軸約3.0m、短

SK254

SK263



Fig. 119 磨石道構 (S=1/20)

軸約0.6m、深さ約0.15m。主軸の傾きはN-30°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK373 (Fig.118)

DL27～DL28グリットにかけて検出された台形の平面プランを有する土壙である。長軸約1.1m、短軸約0.7m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN-61°-E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

集石遺構

この調査区からは石組み炉と思われる集石遺構が3基確認された。埋土は周囲の地山土がわずかに変色している程度で検出しにくい状況であった。

SK252 (Fig.119、PL.26-1)

DG32グリットから検出された、不定型の平面プランを有する石組である。長軸約0.6m、短軸約0.5m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN-66°5'-W。断面形は変型した逆台形状となる。石材は周辺河川に多く見られる安山岩が主で、火を受けたことにより赤色化したものが見られた。この遺構からは弥生土器が出土している。

SK256 (Fig.119)

DG32グリットから検出された、楕円形の平面プランを有する石組炉で、中央部をSD250に切られている。長軸約0.75m、短軸約0.55m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN-3°-W。断面形は皿状となる。石材は周辺河川に多く見られる安山岩が主で、火を受けたことにより赤色化したものが見られた。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK260 (Fig.119、PL.26-2)

DG31～DH31グリットにかけて検出された楕円形の平面プランを有する石組炉である。長軸約0.9m、短軸約0.65m、深さ約0.05m以下。主軸の傾きはN-15°-E。断面形は皿状となる。石材は周辺河川に多く見られる安山岩が主で、火を受けたことにより赤色化したものが見られた。この遺構からの出土遺物はなかった。

3. 出土遺物

SK235出土遺物 (Fig.120、PL.27-1)

6は弥生土器の甌の底部である。弥生後期。

SK236 Ⅰ層出土遺物 (Fig.120)

13はサヌカイト製のスクリレイバーである。時期不明。

SK237出土遺物 (Fig.120)

2は弥生土器の甌の口縁部である。弥生後期。

SK239出土遺物 (Fig.120)

12は弥生土器の器台、もしくは高环の脚部で、時期の特定はできない。

SK241出土遺物 (Fig.120)

4は弥生土器の鉢の口縁部である。弥生中期。5は弥生土器の甌の底部であり、遺構内に埋設されていたものである。上部を人為的に打ち欠いたか否かは不明。弥生後期。

SK242出土遺物 (Fig.120)

1は弥生土器の鉢の口縁部である。弥生中期。

SK252出土遺物 (Fig.120)

7は弥生土器の甌の口縁部小片である。弥生後期のものか。8は弥生土器の小型の甌の口縁部である。弥生中期。9は弥生土器の甌の肩部破片である。時期不明。10は古式土師器の甌の胴部破片である。11は高环の脚部破片である。弥生後期か。

SK254出土遺物 (Fig.120)

3は弥生土器の甌の胴部破片である。弥生後期か。

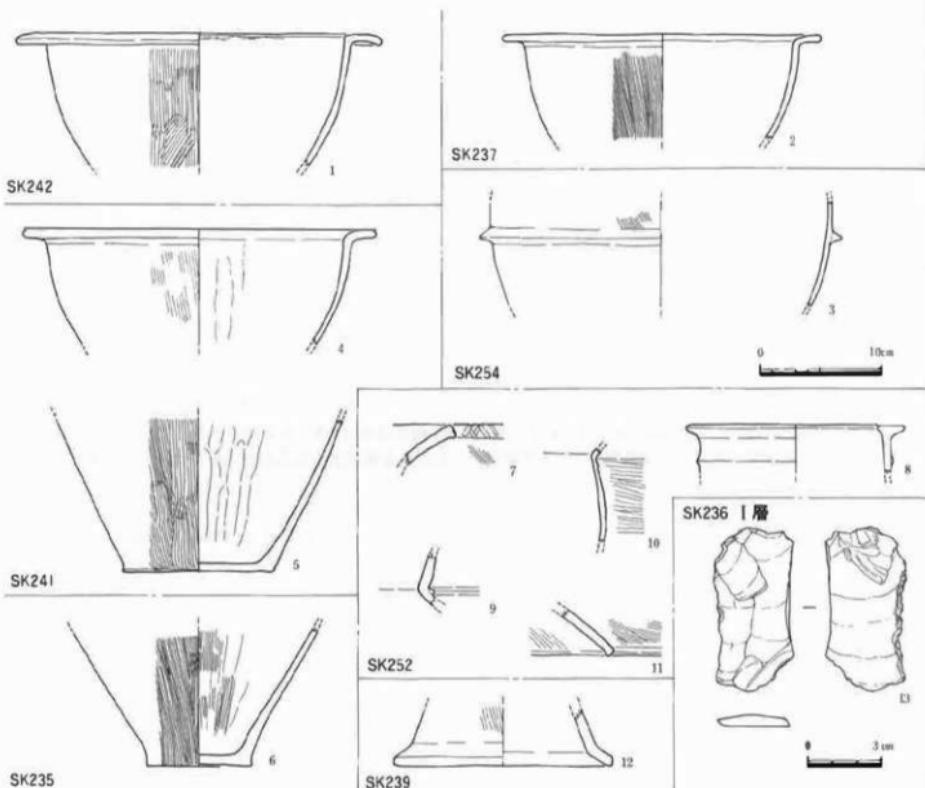


Fig. 120 767-768工区 出土遺物 (S=1/4・1/2)

4. 小結

この調査区からは大型の土壤群を検出したが、遺物量も少なくその性格は不明確である。しかしながらその中のSK241において廃絶時の祭祀と思われる痕跡が見られたことから、当時の生活において重要な施設であった可能性も残されている。調査主管者は湧水量の多さなども考慮して、作業用の「野井戸」の可能性を指摘している。

植物遺体を出土した2基の土壤についてだが、出土状況など明確に出来なかった部分も多く、結論が出ない。植物資料はバイナー処理の後、筑後市教育委員会にて保存されている。

今回検出された石組炉は、筑後市内では最も低い標高で検出されたものである。調査主管者は周辺事例と合わせて縄文時代早期のものと見ているが、周囲での縄文早期遺物の出土がなく、断定するには至っていない。

本調査は問題点を多く残したが、低湿地遺跡の理解について一つの方向を得た貴重なものでもあった。

第7節 770-772工区の調査

1. 概要

770-772工区は、筑後市大字津島字大曾黒に所在する。調査面積は約295m²である。調査の結果、調査区の北側で土壌3基、溝状遺構1条、ピット数基を確認した。この内溝状遺構は766-767工区のSD240と同一のものである。調査は12月6日に始められ、12月26日にこれを終了した。

2. 検出遺構

土壌

SK262 (Fig.122)

CX33グリットから検出された楕円形の平面プランを有する土壌で、北側の一部をピットに切られている。長軸約1.5m、短軸約1.1m、深さ約0.6m。主軸の傾きはN-8°-E。断面形は西側にテラスを有しているが、上方にわずかに開いている。この遺構からは弥生土器が出土している。

SK374 (Fig.122)

CX33グリットから検出された楕円型の平面プランを有する土壌で、検出時点ではSD240を切っている。図上の長軸約0.9m、短軸約0.75m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN-38°-W。断面形は南から西側へかけてテラスを有するもの上方にわずかに開いている。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK735 (Fig.122)

CY32グリットから検出された不定型の平面プランを有する土壌である。長軸約0.8m、短軸約0.8m、深さ約0.4m。主軸の傾きはN-52°-W。断面形は南東側に袋状に広がり、北西側にテラスを有するものの両壁ともこの方向に向かって開いている。この遺構からの出土遺物はなかった。

3. 出土遺物

SK262出土遺物 (Fig.123, PL.27-2)

弥生土器の甕の底部である。底部外面に横方向のケスリが見られる。弥生前期か。

4. 小結

本調査区では北側にのみ遺構を確認した。これらの遺構は本来ならば766-767工区の遺構群と同じグループのものであろう。しかしながら、766-767工区の西側に展開している「水さらし遺構」とは性格は異なるものである。この遺構群の中で時期を特定し得るのはSK262のみであり、他は明確にしえないものである。

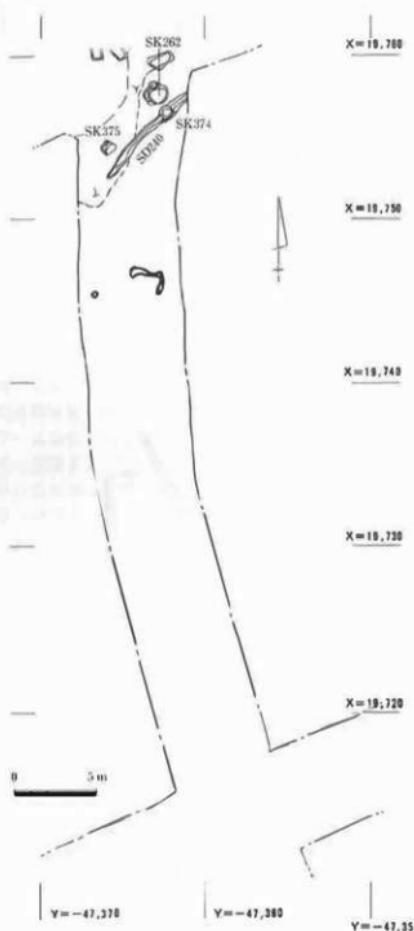


Fig.121 770-772工区 全体図 (S=1/300)

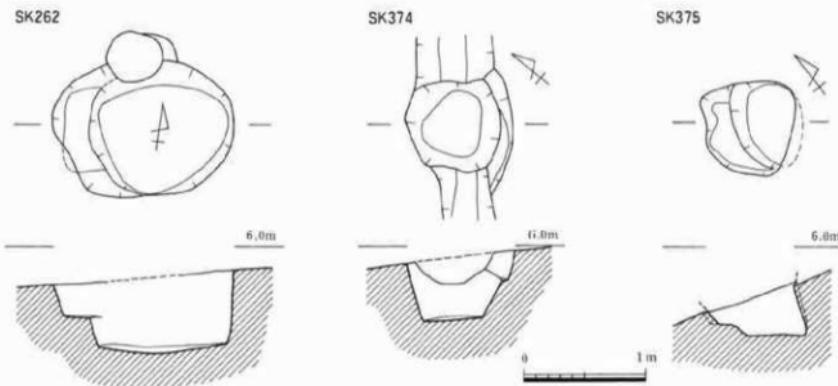


Fig. 122 SK262・374・375 (S=1/40)

また、調査区の南側には遺構を全く確認できなかつたが、これは東側調査区の調査結果や、開発地域の南部分となる山門郡瀬高町部分において、遺跡が確認されていないという結果と照らし合わせても問題のないところである。ただし、このことが、遺跡が南側に広がらないのか、後世の開発により削られた結果であるのかを結論する材料を得ることはできなかつた。津島地区の弥生時代の遺跡の広がりを考える上で、このことは今後の課題として残される結果となつた。

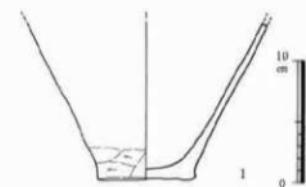


Fig. 123 SK262出土遺物 (S=1/4)

第8節 776-777工区の調査

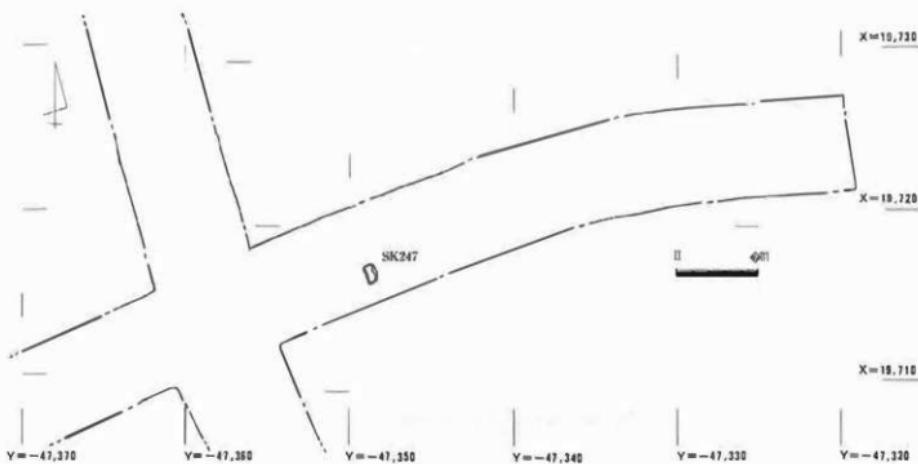


Fig. 124 776-777工区 全体図 ($S = 1/300$)

1.概要

776-777工区は、箕後市大字津島字大曾里に所在する。調査面積は約260m²である。地山は黄橙色のローム土であり、検出時点では淡い褐色のシミが確認された。このため縄文時代の遺構の可能性をもって精査を行なったが、多くが風倒木痕などの搅乱であり、遺構として検出されたのは土壙1基のみであった。調査は11月中に始められ、12月7日にこれを終了した。

2.検出遺構

SK247 (Fig. 125)

CS19～CT20グリッドで検出された、ほぼ長方形の平面プランを有する土壙である。長軸約1.1m、短軸約0.6m、深さ約0.25m。主軸の傾きはN-16°-W。断面形は西側が深いがほぼ逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

3.小結

遺構の密度が南側へ向かい薄くなることは前節でも述べたが、遺構が全く見られなくなるのではないことが確認された。しかし、時期の特定が出来ず、削られたのか否かの確認も出来なかった。これは今後に残された課題である。

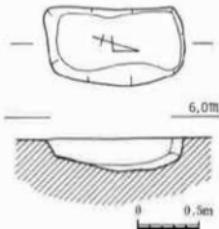


Fig. 125 SK247
($S = 1/40$)

第9節 773-786工区の調査

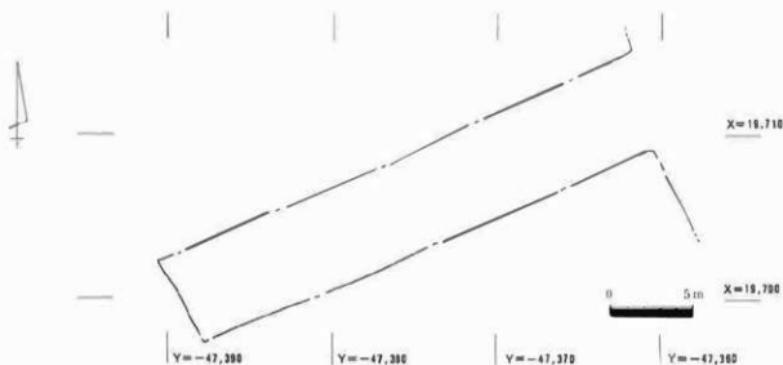


Fig.126 773-786工区 全体図 ($S = 1/300$)

1. 概要

773-786工区は、筑後市大字津島字大曾里に所在する。調査面積は約177m²である。地山は黄橙色のローム土である。この調査区からは遺構や地形の変化点などは確認されなかった。調査は11月28日に開始し、11月29日にこれを終了した。

第10節 773-782工区の調査

1. 概要

773-782工区は、筑後市大字渡島字大曾里に所在する。調査面積は約12ha²である。この調査区からは土器と基を確認したが、時期の特定に至るような遺物の出土はなかった。調査は11月30日に始められ、12月7日にはこれを終了した。

2. 掘出遺構

SK248 (Fig. 128) CU13グリットから検出された楕円形の平面アーチを有する土壙である。長軸は0.9m、短軸は0.5m、深さは0.15m。主軸の傾きはN 4° W。断面形は逆台形状となる。土壙は基本的には礎化鉄錆ヒリの單層であるが、下層へ行く程粘性が増していく。この遺構からの出土遺物はなかった。

SK251 (Fig. 128) CU14グリットから検出されたはざ四形の平面アーチを有する土壙である。長軸は0.6m、短軸は0.5m、深さは0.1m。主軸の傾きはN 9° E。断面形は逆台形状となる。この遺構からの出土遺物はなかった。

3. 小結

ここでの遺構は、西側測量において最も南に位置するものである。遺構の密度が南側へ向かい導くなることは前節でも述べた。しかし、時期の特定が出来ず、削られたのか否かの確認も出来なかった。これは今後に残された課題である。

Fig. 127 773-782工区 全体図 (S = 1/300)

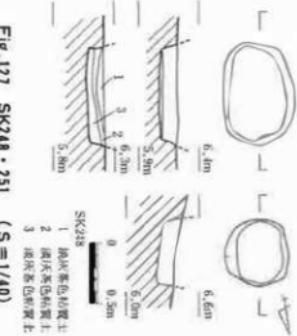


SK248 SK251

SK251

SK248

Fig. 128 SK248・251 (S = 1/40)



第11節 778-782工区の調査

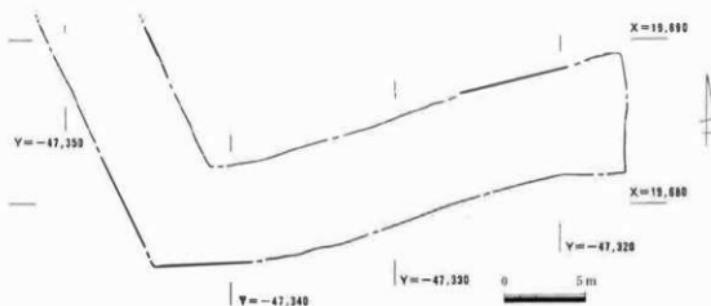


Fig. 129 778-782工区 全体図 ($S = 1/300$)

1. 総要

778-782工区は、筑後市大字津島字大曾里に所在する。調査面積は約105m²である。この調査区からは当初遺構らしき物を確認していたが、南側に近接していた水路からの水の流入や雨水によりヘドロが溜まり、再検出の時にはこれらは失われていた。調査は1月29日にこれを終了した。

第4章 結語

1. 弁生期土器出土の意義

今回の調査成果のうち、主としてSX150から出土した弁生前期から中期初期の土器群について、若干の問題点を拾い上げたい。まず、これまでの筑後市域における同時期の遺物出土例から整理しない。筑後市域において、弁生時代前期から中期初期にあたる土器は概ね亀ノ甲式器と「横当」と考へている。亀ノ甲式土器が市の南面に偏って分布することは既に論じたが⁴¹、これを標準に置き換えると概ね8mから14mに出土地が分布することになる。⁴² それ故にこれらの出土地では、当該期の堅穴式住居を主体とする集落等の存在が考えられるのが自然だ。佐々木勝彦氏は、弁生時代後期の集落をモダルに、標準的・汎用的の三層式三面窓構造を標準として選択を、堅穴式住居を主体とする集落と孤立した建物を主体とする集落の別があるとしたする⁴³が、下林西田遺跡(鹿児島)を評価を考えても、亀ノ甲段階にも獨立した建物を主体とする集落の存在を想定して良いものかどうか判断に迷うところである。

さて、今回報告する津島山反塙遺跡は標高6m、前後に展開している。北側に隣接する津島山、町道跡では当該期の遺物は確認しておらず、その位置付けも中期中期以降の低平地への開発により集落が出現した(付1)としていた。今回は、その津島山ヶ面遺跡よりもさらに低い、上地の出土といふ点に意義がある。今回の出土は、津井とみられる施設からの出土であるが、他に当該期の遺構を見当たらない。何分にもらは状況の狭い調査区の設定を余儀なくされたため調査区外に集落が展開する可能性を完全には否定できないが、現地が複数で堅穴式住居散在に不可欠な場所であることを考えあわせるならば、至近に集落の存在を想定することは難しい。津井という生活開拓施設の存在が付帯されるが、一概には祭祀遺物とともに片付けにくい。一つのモデルとして、集落ではなく作業のためのキャンプを提示したい。ここでいうキャンプには宿泊すること要件としないので注意されたい。類似例として、姫畠耕作における棚・堰や、タイなどに見られる水田の監視小屋での生活を挙げておきたい。これらは、明確な柱を設置しないものもあり、道標として突出されない可能性も高い。

いずれにしても、今後低平地の調査事例が増加し、資本検討が充分に行われてから、結論を導くべきであろう。特に有明海沿岸部での調査事例の増加が望まれる。

(永見 秀穂)

注1 本見秀穂 「筑後町付近における弁生文化—廃耕の実態をりむはなし—」

【参考文献】・八重山の古代を生きる心配農業会資料 2003.1 年報
注2 もちろん、この時期は支那の六朝(5世紀)の小字地名下層にかかるために呼ぶるものであって、阿川からの比喩法も意味があるので、

「武藏北山の上流域にそのままあってはまらない」。

注3 佐々木勝彦 「わかつに」「大川村文化史研究会第2集 研究会論文 1984 年刊

注4 相模原市立委員会編 「相模原市文化財調査報告書第11号 氷室遺跡調査報告書 2000」 年報

注5 本見秀穂 「考略」 案内市文化財調査報告書第26号 氷室遺跡調査報告書第11号 2008 年報

2. 周辺遺跡との関連性

津島丸反塙遺跡(も)用水部分だけという事もあり、その全貌像は明確ではない。周辺の遺跡調査があるものについて若干見ていく。石垣は、不明な点が多いが、その中でも開拓する可能性があるものについて若干見ていく。

注6 西部2号池反塙遺跡(も)用水部分に開拓する可能性があるために呼ぶものであって、阿川からの比喩法も意味があるので、767-769工区で確認された石垣に関しては、志賀野々遺跡(北東端800m)、志賀田遺跡(北東端約1,000m)が挙げられる。ここは概・中期(約8,000年前後)の遺物包含層を伴う遺跡で、それぞれに石垣が、多量の貝殻石を確認した。現在では志賀田遺跡が包含層の東端、志賀野々遺跡が西端となるが、志賀野々遺跡の西側は削平を受けおり、元来は丘陵地の地形を保存したことと考えられる。今回検出された石垣が同時代のものとみえるなら、この時期の志賀田流域での生活、開拓以前の志・津島地区の地形

発する上での一助にできるであろう。しかし、本報告で述べたように、この時期と断定しうる遺物を作つておらず、出土遺物も後述の遺構の切り合いによる混入である可能性が高い。近隣市町村も含め、今後の調査報告が期待される。

弥生後期～古墳時代初期にかけての遺跡には、北側に広がる津島遺跡群が挙げられる。特に津島ヶ原町遺跡（北東隅約200m）では検出材根（鏡板を有するもの）、遺物（SD130、SD275、SX300出土遺物）など、共通点が多い。しかし、津島九反坪遺跡のSD130、SD275が津島ヶ原町遺跡と異なりある区画構とは言えず、SX300における土器残棄についても明確にはしませなかつた。

いずれにしても、周辺する可能性が指摘できるのみで、今後、この地域における発掘調査が行なわれた際に、前述したの一つとして留意されたい部分である。

【参考文献】

立石	百二 木見・齊藤	「筑後西原第2号区(瀬崎町)」 「筑後西原第2号区(瀬崎町)」	大分市教育委員会 大分市教育委員会	1969 2000
----	-------------	------------------------------------	----------------------	--------------

3. 潟井状遺構の導水について

本報告内で、SX100が挖水場としても利用され、SX150はさうではない事を指摘した。が、畠井状遺構となりうる可能性をもつ遺跡として識者から推察された遺跡の大半が導水施設としても利用されており、この点は問題なさそうである。ここでは導水についての問題点を明示しておく。

SX100については導水施設としてはSD105があり、ここでは水口状遺構も確認されたが、SX150では未確認である。両遺構とも、全体の半分しか調査がされていないが、SX150の導水施設が確認されていないことは、生前施設である水田がそれぞれの時期において別の場所に置かれていたか、水田の場所は同じで主な導水施設は別の場所に置かれていたという2つの可能性がある。畠井状の調査が行なわれている福岡市の三吉水道遺跡では、福岡の主な導水施設と灌水時の副水的な導水施設の2つが存在する事が確認されている。これは主に雨水貯水池、谷下の水田に供給されたと仮定されている。津島九反坪遺跡ではSX100・SX150の背側は谷地形であり、SD105は反対の北側に設けられている。三吉水道遺跡モルタルで復元すると、水田は南側の谷の延長線上にあり、SD105は北側の地盤となる。しかししながら、津島九反坪遺跡では雨水を利用しており、これを水田に利用するためには十分にあたためる必要がありますことを指摘された。SD105は水をあためるために施設への導水路、もしくは施設そのものとも考えられ、この場合は水田はSD105の延長上にあると仮定される。

SX105の水口状施設がどのように利用されたのかも含めて、畠井状遺構の調査報告の増加が期待される所である。

【参考文献】

畠井・瀬野・高橋	「田地一軒園市比奈右衛門作」	日本住宅公团
吉野・片桐・瀬野	「丸山遺跡(立石)」	福岡市教育委員会
吉澤・瀬野	「三方水道遺跡」	福岡市教育委員会
谷口	「長野・瀬野」	財团法人 北九州教育文化史料館 神農文化財室
		2000

付　　出土遺物一覽表



日付(西暦)	時間(h)	場所(西暦)	地名	色調(外見)	触土	構成	構造
—	—	—	北の山	茶褐色	細かい砂が多い。	やや平滑	ゆるい層
—	—	—	口湯川橋下	褐色褐色	砂が少なくて、土が多。	やや粗	—
(7.9)	—	—	道端樹皮	深褐色	細かい砂じが、やかな。	やや粗	—
—	—	—	口湯川樹皮	深褐色	細かい砂多い。	やや平滑	ゆるい層(根ノ底付)↑
—	—	—	口湯川樹皮	深褐色	1~2mmの粒度や多い。	不規	根生の根群(根ノ底付)↑
—	—	—	—	—	—	平滑	根生の根群(根ノ底付)↑

UVLP
フリ?

前田(出)
イガ?
イガ?
イガ?
イガ?
イガ?
根毛上上がり

イガ?
イガ?

言量冒

ひやうあく おもとことかく (漢字)

注記: 動植物、内因: 異常・中國地方?)
● 伸生の根群(根ノ底付)↑

28	30/31/160	—	—	—	—	—	—
29	30/31/160	—	—	—	—	—	—
30	31/31/160	—	—	—	—	—	—
31	31/31/160	—	—	—	—	—	—
78	31/31/160	先生工場	—	—	—	—	—
79	31/31/160	物生土場	加藤參	(3.4.5)	—	—	—
80	31/31/160	御生土場	參	(3.4.5)	—	—	—
81	31/31/160	御生土場	參	(3.4.5)	—	—	—

— 131 —

Tab. 9 737-738 工区出土石器一覽

《中華書局影印》

Tab. 10 737-738 工区出土木類一覽

F/D	名前	性別	種類	全長(cm)	骨盤長(cm)	腰盤長(cm)	新規性	年齢	遺存部	備考
♀	206	GEC30	頭骨	ヘラ?	(1.5)	(2.2)	(0.6)		左顎骨のみ	
♀	207	GEC30	頭骨						歯冠のみ	
♀	208	GEC30	頭骨						歯冠のみ	

Tab. 11 766-767 工区出土主器一览

Fig. No.	通称	種別	固相	口径(cm)	底面(cm)	高さ(cm)	形状	色彩(内/外)	胎土	焼成	参考
112	SK0040	单耳土器	砂	(3.5)	口部直徑	2.5	錐形	暗褐色/暗褐色	半片	半生半燒	
113	4 SK093	单耳土器	砂	(3.6)	口部直徑	1.0	錐形	暗褐色/褐色	半片	半生半燒	
114	5 SK044	单耳土器	砂	(10.0)	底面	4	錐形	暗褐色/褐色	中平半	作業面邊	
115	6 SK058	单耳土器	砂	(3.6)	底面	1.5	錐形	暗褐色/褐色	中平半	作業面邊	
116	7 SK027	单耳土器	砂	8.4	底面	2.0	錐形	暗褐色/暗褐色	中平半	作業面邊	

Tab. 12 766-767工区出土石器一覽

Fig. No	標識	種別	全長(cm)	幅幅(cm)	厚度(cm)	重量(g)	材質	温 寸	備考
112	SD190	石碑	3.0	1.7	0.5	—	セラミック	完存	朱押印(通字)
202	SD203	石碑	(2.7)	(1.2)	0.5	1.0	セラミック	完存略	朱押印、一方の経年劣化

Tab. 13 767-769 工区出土土器一覽

Tab. 14 767-769 T区出土石器一覽

Fig. No	通称	種別	最高(度)	最低(度)	範囲(度)	測量(回)	測定	操作員	備考
125	130K2261号	スピリット	8.7	2.2	6.55	14.2	サスカイタ	電球	

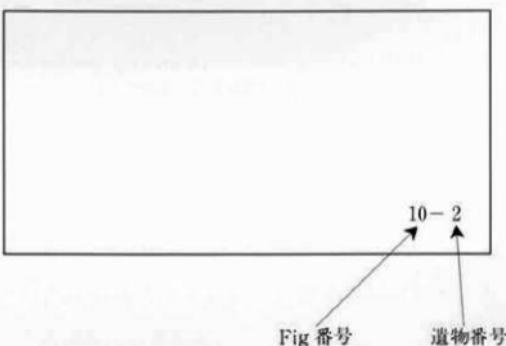
Tab. 15 770-772工区出土土器一覽

行	号	盛装	瓶数	体积	口径(mm)	容量(ml)	瓶高(cm)	瓶颈(cm)	瓶身	色标(外/内)	目数	组数	量身
123	川盐262	烧生土糖				1.0			高303/4	深绿色	细沙著、红-	浅	俗名食盐

PLATE

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



PL.1



津島九反坪遺跡調査前風景（北東から）



東側調査 A・B・C 区全景（北から）



東側調査 SD010・SD015完掘状況（北東から）



SD010土層観察（北東から）

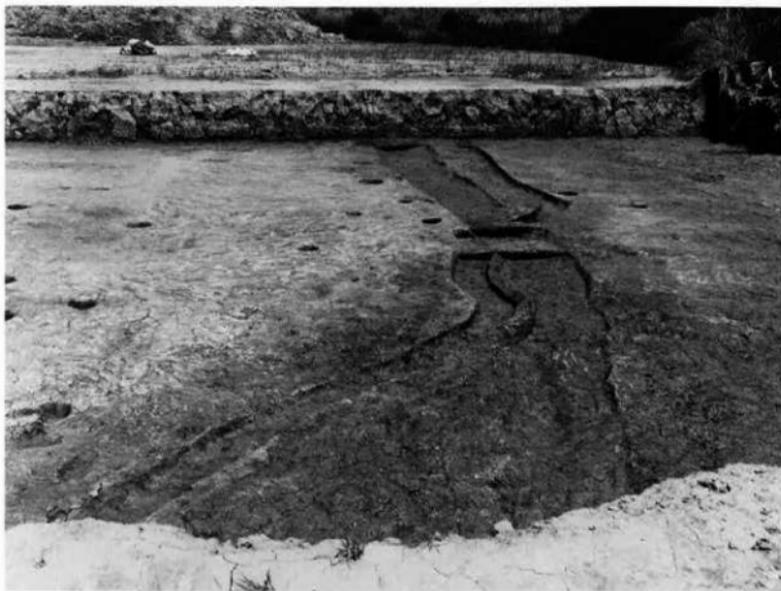


SD010土層観察（北東から）

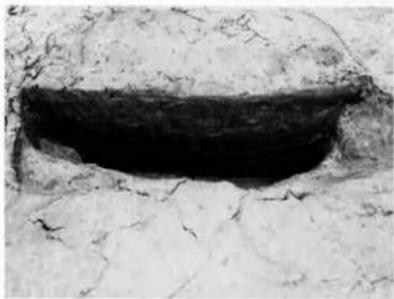


東側調査 SK005完掘状況（東北から）

PL.3



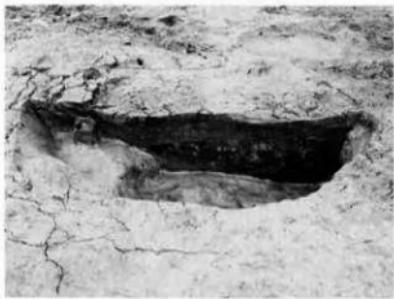
SD025・030発掘調査（西から）



SK017土層観察（東南から）



SK011土層観察（西から）



SK021土層観察（西から）



SX045土層観察（西から）

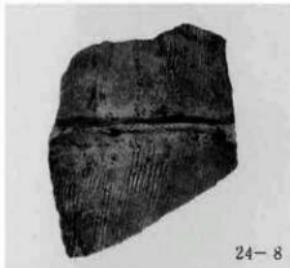


SX045検出状況（西南から）

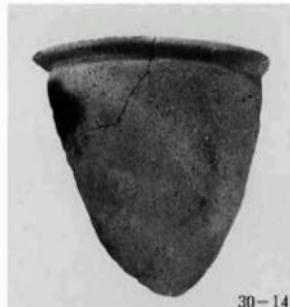


SX045完掘状況（西南から）

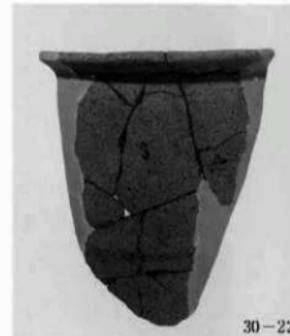
PL.5



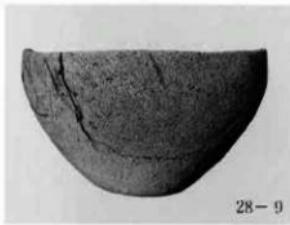
24-8



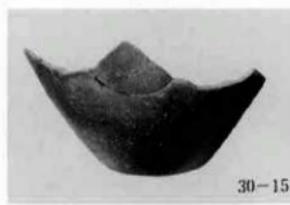
30-14



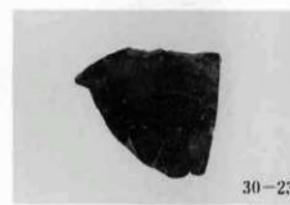
30-22



28-9



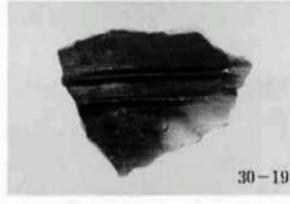
30-15



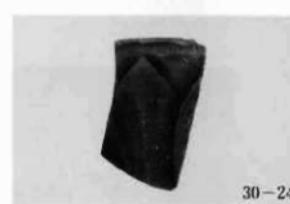
30-23



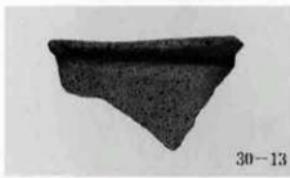
29-11



30-19



30-24



30-13



30-20



1 734-737工区 全景 (上から)

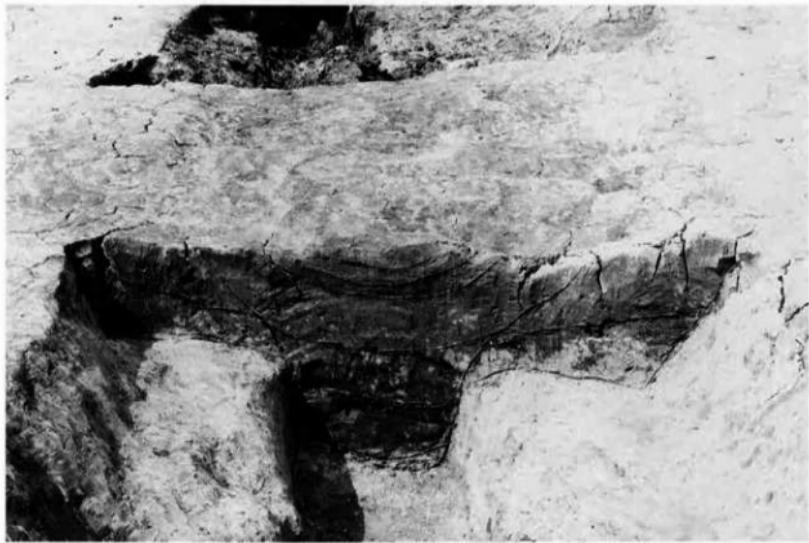


2 SB350 P140d 柱根・礎板出土状況 (北から)

PL.7



1 SD130 完掘状況 (東から)

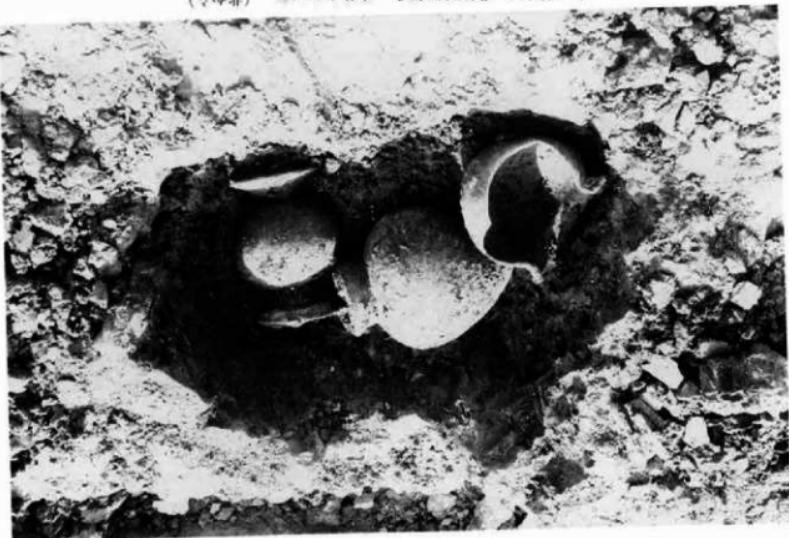


2 SD130 土層断面 (東から)

2 SX100 完整块器 (上方)



1 SD130 青铜时代部分 青铜器 (下方)



PL.9



1 SX100 焼木状況 (北から)



2 SX100 焼木状況 (東から)

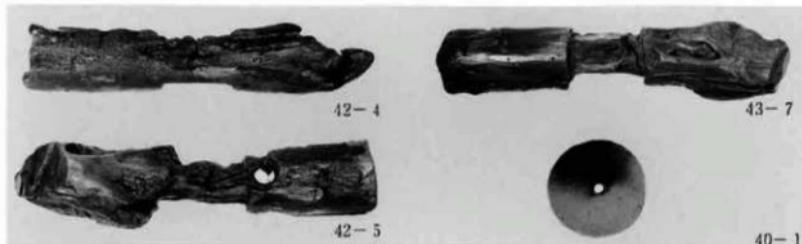


1 SX150 完掘状況 (上から)



2 SX150 東ベルト 土層断面 (西から)

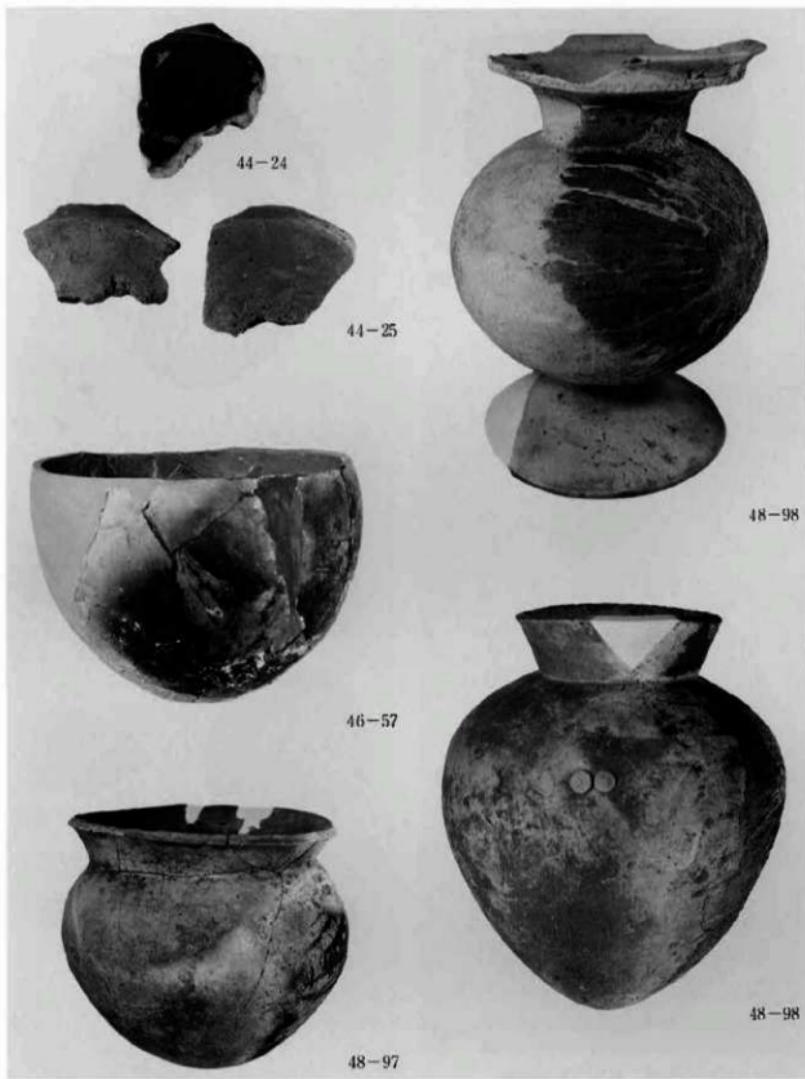
PL.11



1 SB350 出土遺物



2 SD130 出土遺物 (1)



1 SDI30 出土遺物 (2)

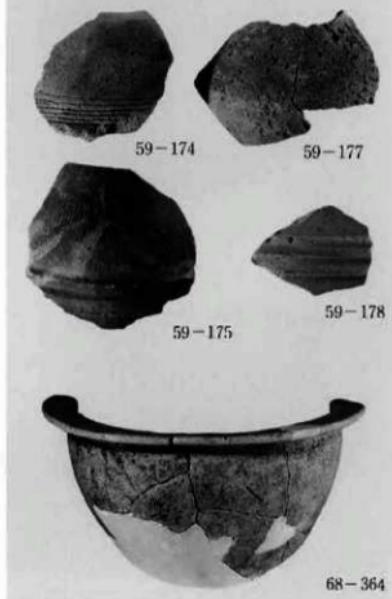
PL.13



1 SX100 I層 出土遺物



2 SX100 II層 出土遺物



3 SX100 出土遺物 (1)



66-307



66-310



65-300



69-394



74-469

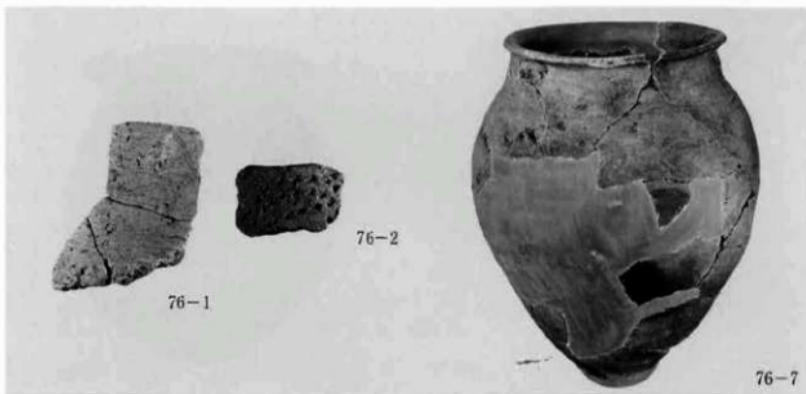


74-470



1 SX100 出土遺物 (2)

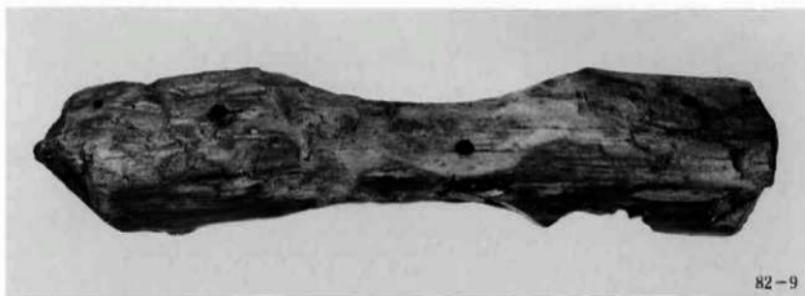
PL.15



1 SX150 1層 出土遺物

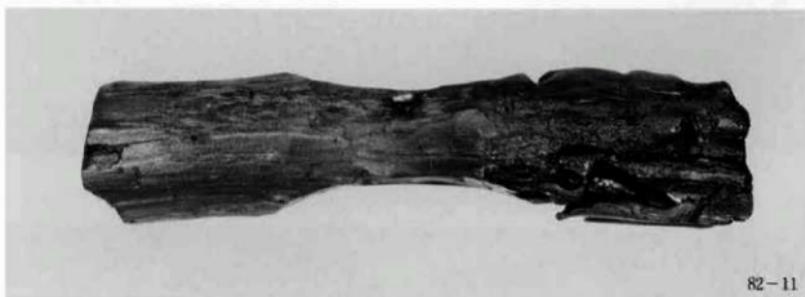


2 SX150 出土遺物



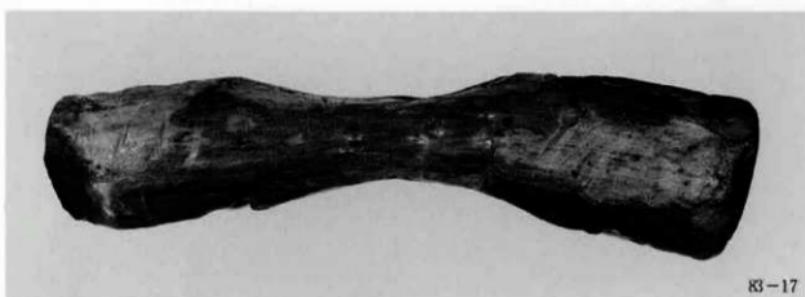
82-9

1 SP140b 出土遺物



82-11

2 SP140c 出土遺物



83-17

3 SP140f 出土遺物

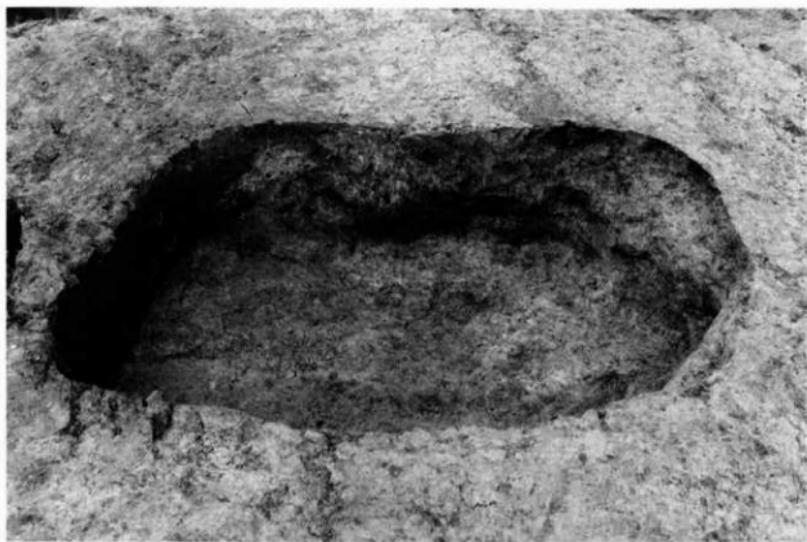
PL.17



1 737-738工区 全景 (上から)



2 SE295 木材出土状況 (南から)



1 SE265 完掘状況 (北東から)



2 SE280 完掘状況 (北西から)

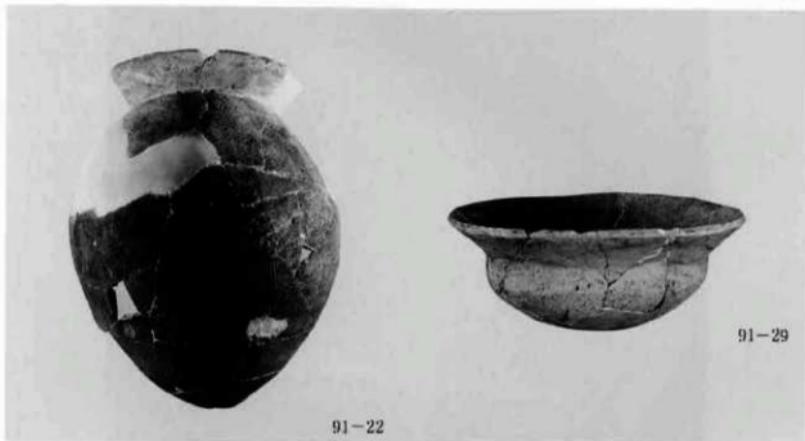
PL.19



1 SX300 完掘状況 (上から)



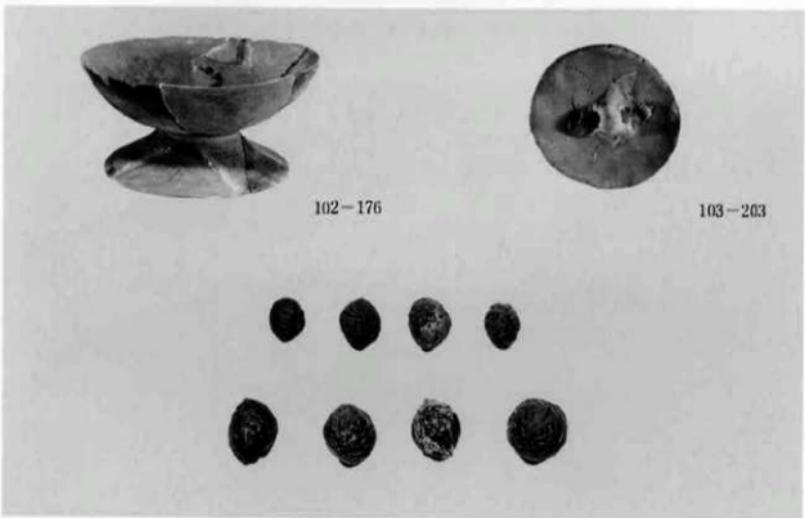
2 SX300 木材出土状況 (南から)



91-22

91-29

1 SD275 出土遺物



102-176

103-203

2 SX300 出土遺物



1 津島九反坪遺跡 西側調査区 南部分 全景 (上から)



2 SK233 完掘状況 (南東から)

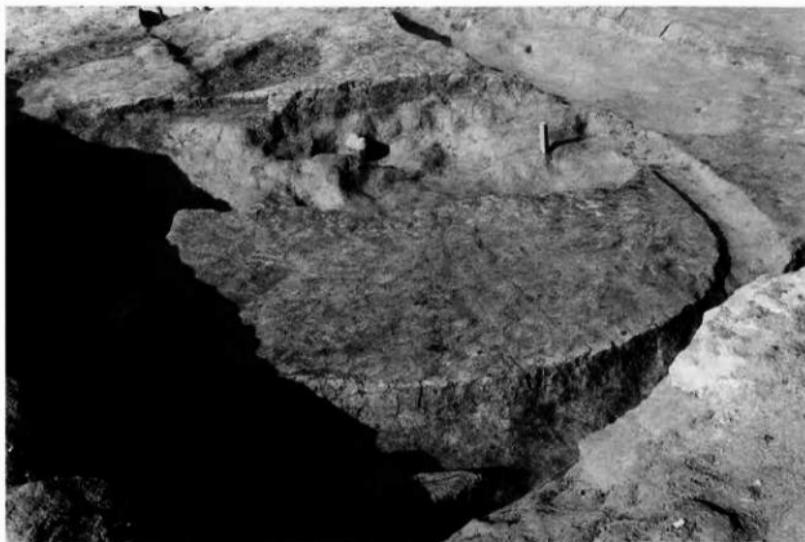


1 SK257 遺物出土状況 (北から)

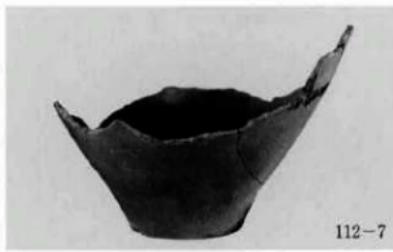


2 SD190 完掘状況 (北西から)

PL.23

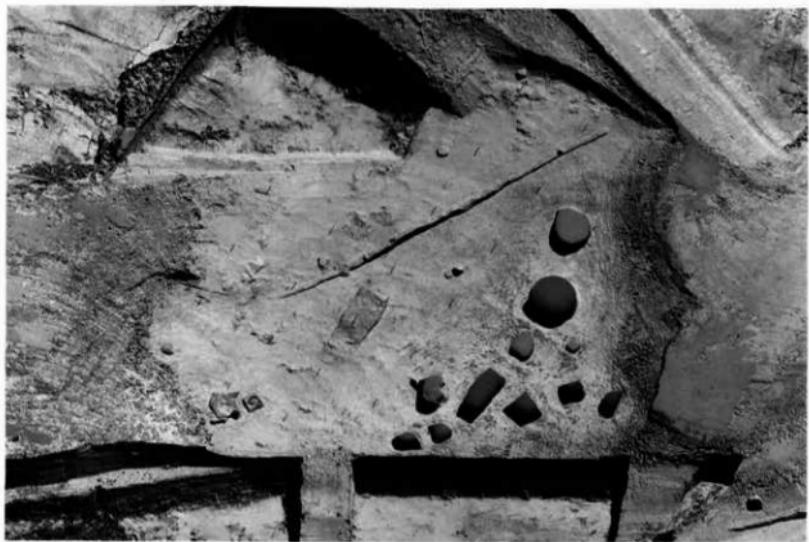


1 SX155 完掘状況 (南東から)

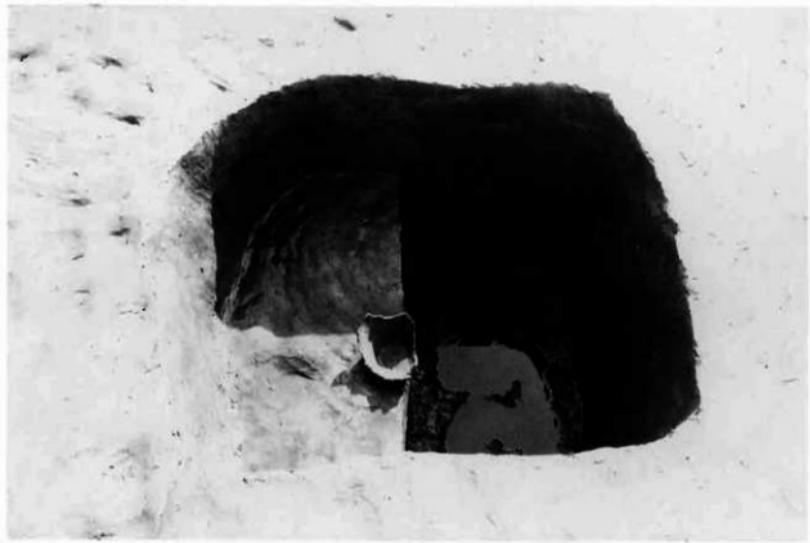


112-7

2 SK257 出土遺物



1 767-769工区 土壌群 (上から)



2 SK241 遺物出土状況



1 SK255 植物遺体出土状況（第1面）（西から）



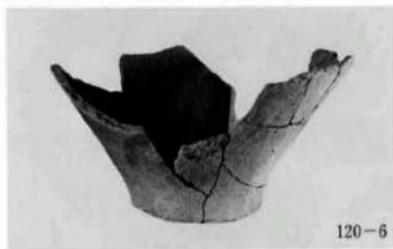
2 SK255 植物遺体出土状況（第2面）（南西から）



1 SK252 焼石出土状況 (西から)



2 SK260 焼石出土状況 (北から)



1 SK235 出土遺物



2 SK262出土遺物

津島九反坪遺跡

筑後市文化財調査報告書 第42集

平成14年3月31日

発行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 大同印刷株式会社
佐賀市天神一丁目1番32号
☎(0952)24-8450